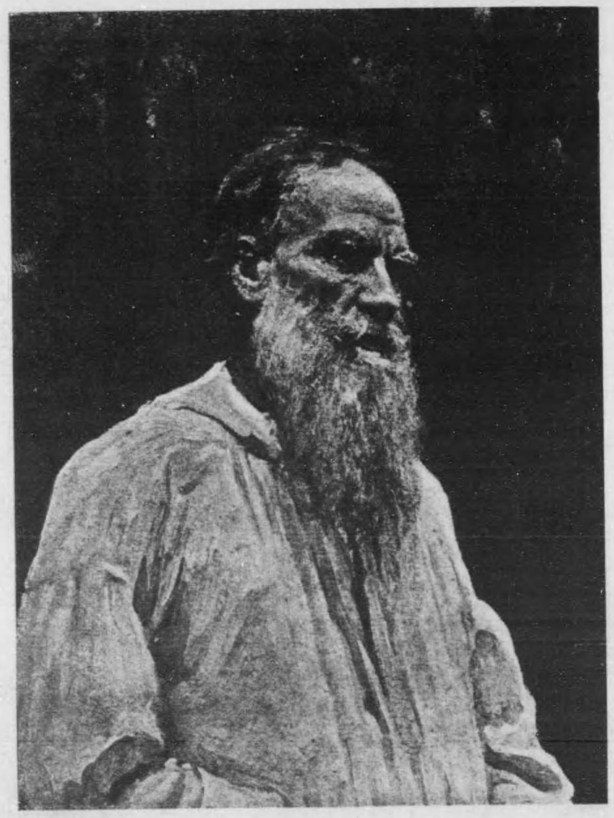
始

コ-3476
あ
345-12
3

戰爭と平和

第一卷

大正
3. 8. 20
購求



Leo Tolstoy.

(LEO NIKOLAEVICH TOLSTOY)

十伯最後の寫眞
（死ぬる六週前撮影）

345-12 ろ

レオ・トルストイ略傳

（一）

レオ・ニコラアエヴィイチ・トルストイは、千八百二十八年八月二十八日（露西亞暦）に、中央露西亞のツウラ市の南方十五露里程の所にあるヤアスナヤ・ポリヤアナ村のヴォルコオンスキイ家代々の領主館で生れた。

父は、伯爵エリア・トルストイの息ニコラアス、母は公爵ニコラアス・ヴォルコオンスキイの女公爵嬢マリイであつた。即ち、父方、母方、共に露西亞の名門である。

トルストイ家の始祖は、不詳であつて、或る歴史家等の説では、その始祖は獨逸人だといふのでもあるし、又他の説に據れば、リスアニア人だともいふし、尙他の説に依ば、韃靼の汗（王）から出たともいふのである。トルストイの容貌から見ると、大分後者に根據がありさうにも思はれる。それは左に右、

最初の伯爵は、ピョオトル・トルストイであつた。この人は彼の彼得大帝の腹心であつて、皇太子アレキジスの暗殺にも與かり、次いで、國事探偵局長の職に就て、彼得及び女皇カザリン一世の信任甚だ厚かつた。彼はその女帝の戴冠式の日に、伯爵を授けられたのだ。けれども、アレキジスの息の彼得二世が位に登ると共に、ピョオトル・トルストイは、爵位を剝がれて、八十二歳の老軀を、白海の濱のソロヴェーツキイ修道院に流されて、其所で間も無く死んだ。が、爵位は、彼得大帝の女、女皇エリザベスの世になつて、トルストイ家に返された。

レオ・トルストイの祖父に當る伯爵エリアは、親切な、寛大な、快活な人であつたが、少々〻錢使が荒かつた。何時も、領地では、宴會、演劇、舞踏會、骨牌の勝負、饗應等を催して居たので、何時の間にか、その妻(公爵嬢ペラギイ・ゴルチャアコフ)の巨大の財産を悉皆抵當に入れて了まつて、艱然、カザン縣の知事の職を得て、生計を立てた。

トルストイの母方の祖先、ヴォルコオンスキイ家の諸公は、ルウリック王から

出たのだ。十四世紀の始に、ルウリック王から十三代目のプリンス・ジョオンが、今のカルウガ及びツウラ縣に在る、ヴォルコオンカ川に沿ふたヴォルコオンスキイの領地を受けた、で、その人から、ヴォルコオンスキイ家が始まつたのだ。レオ・トルストイの母方の祖父の公爵ニコラアス・ヴォルコオンスキイは、種々な官職に歴任した後で、引退して、公爵嬢カザリイン・ツルベエッコイを娶つて、父から讓られたヤアスナヤ・ポリヤアナに住つた。所が、公爵夫人カザリンは夭く死んで、孤女のマリイを遺した。公爵ニコラアスは、この愛嬢に佛蘭西女を附添はして、依然ヤアスナヤ・ポリヤアナで暮して、千八百二十一年に死んだ。

レオ・トルストイの父ニコラアス・トルストイは十六歳で軍隊に入り、千八百十三年及び同四年の戰役に與かつた。獨逸の何處かで急使に差遣された途中で、佛蘭西軍の爲めに捕虜にされて、千八百十五年に露西亞軍が巴里に入るまでは、釋放され無かつた。戰爭が終るといふと、軍職から退いたが、それから間も無く彼の父――卽ち、レオ・トルストイの祖父――が死んで、ニコラアス

は、破産しさうな狀態に陷つて了まつた。

大領地の持主であつて公爵嬢マリイ・ヴォルコオンスキイが、ニコラアス・トルストイと結婚したのは、前者の父公爵ニコラアス・ヴォルコオンスキイが死んでから後直きであつた。

公爵夫人マリイは、四男一女を擧げたが、レオ・トルストイが生れてから一年半後に死んだ。それから、レオ・トルストイの父の方も、レオが九歳の時に死んで、小兒たち――男の子四人に女の子一人――は伯母の世話に委ねられた。

（二）

その伯母――男爵夫人オステン・サアケン――が死ぬるといふと、小兒たちは、今一人の伯母ペラギイ・ユウシコフの世話になることになつて、皆カザン市へ移つた。それは、千八百四十一年のことであつた。レオはその時は最早滿十三歳であつた。

兄三人が入つて居たカザン大學へ彼も入つたのだが、性來熱中し易い質であり、且獨立を愛する心の强かつた彼は、大學の課程を正直眞法にやつて行くといふ學生にはなれ無かつた。自分に興味のある學課にばかり熱中して他を顧みず無いといふやうなことが多かつた。のみならず、保護者ユウシコフはカザンの交際場裡の勢力家であつたので、自然レオもさういふ方の快樂に耽ることも多かつた。舞踏會、劇場、訪問等で冬の時間が大抵費されて、さういふ事がなか〳〵研學の妨害になつたのであつた。

そのうちに、レオは大學の學生生活に飽き果て、兄ニコラアスが大學の課程を修了して了まうと共に、それを好機會にして、自分も學生生活を止めて、兄と一緒にヤアスナヤ・ポリヤアナへ歸つた。

隷農の悲慘なる狀態は、彼の心を動したらしかつたが、彼は未だそれに就て、何等の救濟法を執らうとは爲無かつた。間も無く、彼は彼得堡へ出た。其所での生活は、彼の生涯中の一番烈しい、一番情熱的なものであつた。或る時は、國外に出やうと企て、或る時は、大學の試驗を受ける準備を爲、又或る時は、軍隊に入らうと爲た。彼は骨牌の勝負を爲、負債を造へ、ジプシ

イの歌女等に心を寄せ、そして、一體に、放逸な生活を爲て居た。けれども、さういふ事の間にも、自分の道義上の墮落に對する自覺が時々起つて、彼の心を陰鬱にさせると同時に、他日の覺醒の素地を造つたのだ。

その時代の一部は、莫斯科で費されたのだが、其所での生活も依然彼得堡での生活より少しも善くは無かつた。

が、斯ういふ風に、この世の歡樂――賭事、肉慾の滿足、狩獵など――に耽つて居る間にも、不意に、禁慾主義に近いやうな宗教的謙虛の心持が起つて來るのであつた。そして斯ういふ暗憺たる背景の前に、藝術的創作の念がだん〳〵深くなつて行きつゝあつたのだ。

（三）

レオの長兄のニコラアスは、大學を終るといふと、軍隊に入つて、コウカサス駐在の砲兵に加はつて居たのだが、その兄が、千八百五十二年の四月に、賜暇を得て、都へ歸つて來て、レオの狀態を見て、その危險を覺り、自分と一緒にコウカサスへ行かぬかと勸めた。レオは、物質上幷に精神上都には止まり得無い狀態であつたので、直ちにその勸に應じた。そして、その同じ春、兄に伴れられて、コウカサスへ行つた。

ニコラアスの屬して居た砲兵は、スタリイ・ユウルツに移された、其所は非常に景色の好い所であつたが、其所で、兄弟は、サアカシヤ人の侵入隊との戰鬪に參加したのであつた。が、冬に爲ると、レオはティフリスへ出て、士官になる試驗を受け、それに及第して、再スタリイ・ユウルツへ歸つて砲兵二十旅團の第四中隊の準將校に爲つた。

スタリイ・ユウルツで、壯大な天景や、自然的な人民の生活などに接すると共に、レオの創作熱はだん〳〵強くなり、千八百五十二年の七月に至つて、小說『幼時』を脫稿した、これは、ティフリスに行つた時に書き始めたのだ。彼は、それを、詩人ネクラアソフが主幹となつて居た『ソブレメンニイク（現代）』といふ月刊雜誌――彼得堡にて發行――へ送つて、それが千八百五十二年の九月の誌上に現はれた。これと共に、トルストイの天分は、『ソヴレメン

ク』に關係あるツルゲーネフ等當時の大文人たちから、矚目さるゝにいたるのだ。

レオは、コウカサスに三年居たのだが、そのうちに、單調な生活に飽きて、他に新しい周圍を求めやうと爲だした。千八百五十三年の末頃に、クリミヤ戰爭が起つたので、彼は親戚に依賴して、ダニウブ河畔に出征して居た露西亞軍に加はらせて貰らひ、ダニウブ軍の總司令官の公爵ゴルチャアコフの幕僚と爲つた。レオ・トルストイは、ダニウブ軍に加はる前に、試驗を受けて、將校に昇任されて居た。彼はシリスツリアの襲擊にも參加し、軍の退却にも加はつた。が、その退却の單調なのに飽きて、セヴァストオポルへ移して貰つて、其所へ、千八百五十四年十一月に達して、砲兵十四旅團の第三中隊に加へられた。

トルストイは、其所に居るうち、大攻擊とか、大逆襲とかいふやうな大きい戰鬪には加はら無かつたが、最も危險な地點であつた第四砲臺の任務に度度就て、少しも死を恐れ無かつた。

トルストイが、人間の運命、人生の目的、永遠の眞理といふやうな問題を考へ始めたのは重にこの時からであり、又、後年彼が全力を擧げて唱導した人道的基督教に對する思想を得たのもこの時であつた。

千八百五十五年の八月にセヴァストオポルは陷落したのだが、トルストイは、それより以前に、最後の戰の報告使として、彼得堡へ遣られたのであつた。

セヴァストオポルでの彼の經驗は、『セヴァストオポル』といふ小說に書かれて、それが、千八百五十四年から同五年に亘つて現はれた。戰爭を描寫した文書としては全く破天荒のものである。戰場にある人間の眞實の感情、感覺を『セヴァストオポル』程明瞭に忠實に描いた著作は、それまで、何の國の文學にも無かつたのである。斯ういふ方から見れば、コウカサスでの經驗を基礎にして書いた『侵入』『伐木』の二篇も、注目すべきものであるのだ。

（四）

トルストイは、彼得堡へ歸ると間も無く軍職を辭した、そして、いよ〳〵

文人の生活を始めた。

千八百五十七年の正月に、トルストイは歐羅巴に向つた、ワルソオまで郵便馬車で行き、其所から、鐵路に依つて、巴里へ行つた。其所では、度々ツルゲーネフと出會つたのであつた。

五月の始に、彼は、巴里を去つて、瑞西に行つて、ゼネヴァ湖畔のクラレンスに滯留した、それから、直きに、ルセルヌに行つた、其所では、一等旅館のシュワイツェルホフに宿まつて、衆客の顧みも爲無かつた乞食の樂師を大食堂へ喚び込んで、衆客を閉口さしたことなどもあつた。この事件は彼の小說『ルセルヌ』に書いてある。

トルストイはルセルヌから、獨逸を經て、露西亞に歸り、八月にヤアスナヤ・ポリヤアナに達した。で、その領地で小學校を開かうと爲たのだが、避寒の爲めに、一家盡く莫斯科へ移つた。

トルストイが、その友フェットと共に、ツヴェル縣へ熊獵に行つて、熊に嚙み殺される危險を間一髪の所で遁れたのは、その年の十二月のことである。

ヤアスナヤ・ポリヤアナでは、彼は、熱心に機械體操を爲ると共に、自ら犂鋤を執つて、農業をやつて居た。

千八百五十九年二月に、レオ・トルストイは莫斯科文學會の會員に推選された。

千八百六十年の始に、トルストイの長兄ニコラアスは肺結核に罹つて、夏を獨逸のソデンで送つて居たが、だん〳〵重體になるといふ報を得て、レオ・トルストイは、兄のセルギウスに代る爲めに、當時は最早結婚して居た妹のマリイ及びその二人の娘を伴れて、彼得堡から汽船でステッティンに行き、其所から伯林を經てソデンへと向つた。妹マリイは、レオに先だつて、ソデンへ直行したが、レオは、伯林に止まつて、知名の敎授等の講義を聞き、それから、自分がその人の民俗生活の寫生に感服して居た有名な小說家アウエルバッハを訪問し、尙又諸所で、獨逸の小學校の敎授振を見た。彼は、獨逸の强制的敎授法には甚く不感服であつた。

トルストイが、ソデンに達した時には、ニコラアスは全く重體に陷つて居

た。同じ年の九月二十日に、ニコラアスは死んで了まつた。この兄の死は、レオに強い感動を與へた。レオの死に對する思想はこれが爲めにます〳〵深くなつた。

その強い悲痛から恢復するや否や、トルストイは、尙旅行を續けて、獨逸、佛蘭西、英吉利の小學制度を研究した。倫敦では、露西亞の革命家のアレクサンドル・ヘルツェンと知り合ひになつて、一ケ月程の間非常に親しく交際した。

千八百六十一年二月十九日、即ち、隷農解放の日が來た。トルストイは、急いで歸國したが、直ぐ、自分の縣の農夫と貴族との間の『仲介者』を命ぜられた。

貴族は大抵隷農の解放には不贊成であつたので、諸種の權利の取り極めに於ては、『仲介者』としてのトルストイは、常に農夫の身方であつた。で、貴族側からの非難が烈しかつたので、一年ならずして、辭表を出した。

その後のトルストイは、全力を擧げて、小學敎育に從事した。彼が、初めて、初等敎育に手を着けたのは、カザンから歸つた千八百四十九年であつたが、その時に開いた小さい學校は、彼がコウカサスへ去ると共に閉られて了つた。彼は、それを再千八百五十八年から同九年に到る冬間開いて居たが、それも成功し無かつた。

彼は、『ヤアスナヤ・ポリヤアナ』といふ敎育雜誌を發刊し、『ヤアスナヤ・ポリヤアナより』といふ讀本の叢書を出版し、そして、自分の主義を實驗する爲めの小學校を開いた。トルストイの目的は、豫備敎育としてで無く、全く獨立した初等敎育を兒童に施さうといふのと、その敎授法は決して强制的にならぬやうに爲やうといふのであつた。

此度のは、成功する見込みが確になつて來たが、不幸にして、トルストイは病氣に爲つた。で、醫師の勸に依つて、ステップ(廣原)へ行つて、馬の乳を飲むクウミス療法を試みることに爲つて、五月にヤアスナヤ・ポリヤアナを立つてステップに向つた。

その留守に、無智の探偵の報告に依つて、政府は、トルストイ家の家宅搜索を行つた。革命の企の書類でも得られるかと思つたのであつた。けれども、

元より其樣な書類などの有りやうは無かつた。

それを始として、政府の干渉がだん〳〵煩くなつて來たので、トルストイは遂に學校を閉ぢて了まつた。

それから、トルストイは、ドクトル・ベエルスの娘と千八百六十二年九月二十三日に結婚した。その時、彼は滿三十四歳、妻は滿十八歳であつた。

（五）

それから、間も無く、トルストイは、小說『哥薩克兵』の上半を書き終はつた。これは、コウカサスに於て彼が實見した天景、人間、及び事件を巧みに且深刻に取り扱かつた作品である。が、不幸にして後半は遂に書かれずに終はつたのである。その次ぎに書かれたのが、『ポリクウシカ』といふ短篇であつた。

トルストイの創作力は、ます〳〵偉大になり始めた。彼は、千八百二十五年十二月十四日に彼得堡で革命を企てた所謂る『十二月黨』の事績を書かうと思つた。で、當時の歷史の研究を始めたのであつたが、その結果、その一時代前の事件、即ち、那翁戰爭に興味を吸收さるゝに至つた。彼は、その時代が『十二月黨』の時代よりも一層有意義であることを發見した。彼は、彼の天才の全力を傾けて、その時代をば、藝術品に纏めやうと、決心した。即ち、彼は、『戰爭と平和』の大作に取り掛かつたのだ。トルストイの書簡及び日記に依るも、彼が、この空前の作に就て、非常な力を籠めたと同時に、十分な自信を持つて居たことは明である。

『戰爭と平和』の元の題は『千八百十五年』といふのであつた。彼は、當時の史實を調べる爲めに、歷史及び軍事の諸記錄を涉獵し、當時の生存者等に面會し、ボロディノオの古戰場を踏査する等、非常な努力を爲た。

この大作は、完結までに、七年を費した。即ち、千八百六十三年から同九年までかゝつたのだ。

『戰爭と平和』の目的は、トルストイ自身も云つて居る如く、歷史上の事件の發展に對しては、所謂る大人物なるものゝ働が、何程も影響を及ぼすもの

では無くして、民衆の意志、願望が一團となつて働くが爲めに、歴史上の大事件は生じ來るものだといふ眞理を明確に闡明するにあつたのだ。

『戰爭と平和』は、吾等をして從來の英雄崇拜といふやうなロオマンティックな夢から醒めて、個人の力、個人の尊嚴を自覺させる作品である。

時代を忠實に描寫するといふよりは、その時代に對するトルストイ自身の判斷及び解釋を提出するといふのが、トルストイの目的であるのであらう。

彼は、那翁戰爭なる大事件の起つた時代を捉へ來つて、其所に、永遠なる、普遍なる人間性その者を見やうと努めた、彼は其所に千古に亙つて變らざる人間的眞理を發見しやうと試みたのであつた。

故に、『戰爭と平和』の中には、その時代の史實、傳說、人物の正確なる叙述及び描寫があると同時に、トルストイ自身の經驗は元より、トルストイ自身の性行及びトルストイ自身の周圍が、諸所に織り込まれて居る。即ち、公爵アンドレエーの性格と、ピエール・ベズウホフの感想及び行爲のうちには、トルストイ自身のそれ等のものと共通なものが甚だ多いのだ。

『戰爭と平和』をば、單に藝術的見地のみより見るとしても、これだけ廣大なる事件を、斯の如き首尾一貫せる形に經めた手腕は、何うしても、大天才の手腕と云はなければならぬ。『戰爭と平和』は、肉感的描寫の模範である。十九世紀の新藝術の殆ど完全なる標本である。

『戰爭と平和』は、著者トルストイの人道的意見を十分に提唱したる作品として、並に、十九世紀に於ける新藝術の發展がその絶頂に達したる一澪標として、全く不朽の價値のある紀念碑的作品である。

（六）

『戰爭と平和』を書いて居るうちも、他の方面の思索、活動をトルストイは決して止めては居無かつた。現に、彼が土地公有の方策を考究したのも、この時代のことなのである。

で、『戰爭と平和』を書き終はるといふと、彼は再、教育事業を始め、教育に關する論文を公けにすると共に、初等讀本の著述を爲し、以て、露西亞の

教育界に多大の刺戟を與へた。

そのうちに、再、創作熱が起つて、千八百七十二年には、彼得大帝の事績を小説に書かうと企だてたのだが、研究するに隨つて、彼得に對する興味が無なつて了まつて、千八百九十三年になつてこの題目は全く捨てゝ了まつた。

が、次ぎには、大作『アンナ・カレニナ』が書かれた。

『アンナ・カレニナ』の執筆中、即ち、千八百七十三年に、トルストイ一家は、サマラ縣に行つて居て、其所の飢饉に苦しんで居る人民の救濟に力めた。

その後は、トルストイの危機、即ち、人生の意味に就ての懷疑時代であつて、勞働に依つて、他の爲めに盡くす者は、人生の意味を知り、人生を愛し、死を恐るゝこと無しといふ解決を得るまでの煩悶時期が續いたのだ。

トルストイの宗教上の思想に一大進化が起つて、露西亞の正教會に對する不滿が云ひ表はし始められたのは、この時代からである。

千八百八十一年に、トルストイ一家は、莫斯科に住まうことに爲つたが、彼は、都會に於ける貧富の差に、今更ながら、甚だ心を動かされた。千八百八十二年の冬に、莫斯科の市勢調査があつた。トルストイは、それに助力して、莫斯科の諸所にある貧民窟に出入した。その結果として、彼は、所謂る慈善なるものゝ無意義なことを覺るに至つた。

彼は、自身も、貧民の爲るやうな勞働に服し、粗食に甘んずることを主義とするに至つた。莫斯科からヤアスナヤ・ポリヤアナへ歸る用のある時などは、全路程を徒歩するのが常であつた。

トルストイが、智識普及の爲めに、ポスレエドニイク(仲介者)といふ出版協會を起して、通俗叢書の出版を爲たのも、この時代のことである。

その間、トルストイは、時々ヤアスナヤ・ポリヤアナに歸つて、自ら農業の勞働に就て居たが、千八百六十六年には、草を刈りに出て、荷馬車に乘らうとする際に、膝に骨に達する傷を受け、全一と月床に就て居た後で、大手術を受けたことなどもあつた。

彼は、その病床に於て、『闇黑の力』の想を構まへ、その年の秋になつてその劇を書いた。この劇は、數か所の削除のみで、檢閲を通過し、莫斯科の帝

國劇場で上場されることになつたのだが、背景、衣裝其他一切の準備が出來た後になつて、政府は俄然何處の劇場でもそれを演ずることを禁止した。で、この劇が演じ得られるやうになつたのは、それより餘程後年のことなのだ。

（七）

それより以後のトルストイは、人生批評の論文を公にし、社會の諸制度に關する最も大膽なる、忌憚無き所見を發表して、所謂る人道の大戰士たる眞面目を發揮するやうになつたのだ。

千八百九十一年には、露西亞の約半分が大飢饉に苦しめられた。この飢饉の救濟には、トルストイは一家を擧げて全力を盡くしたが、その方法は極めて有効なものであつた。當時の大飢饉はトルストイ一人の力で全部救はれたかの觀があつた。

千八百九十五年七月十日に、ツランス・コウカサスの三が所で、非戰主義の宗派のヅウホボオルが、自分等の武器を積み上げて、讃美歌を歌ひながら、それを燒き棄てた。元來この宗派は、兵役に就くのを拒むので、露西亞政府は、その宗派の者に對し種々なる迫害を加へ來つたのであつた。トルストイは、その宗派の者の爲めに、非常に盡力し、遂に彼等が外國へ移住し得る許可を、政府から得た。所で、それ等のヅウホボオルが、加奈陀へ移住する爲めの基金を造る爲めに、トルストイは、小説『復活』を書いて、それより得る報酬を全部ヅウホボオルの救濟費に提供した。

トルストイの宗教に關する意見幷に信仰が、露西亞の正教會の信條と反對であることが、餘まりに明白になつて來たので、千九百〇一年三月五日に至つて、正教本部は、トルストイを破門する布告を公に爲た。トルストイは、それに對して、自分の基督教に對する意見を發表し、自分は、眞理に反いた信條を捨て得ざる正教會の一信徒たるを欲せざるは勿論、元來基督教徒といふ言葉が、眞理を曖昧ならしむる嫌無きにあらざれば、自ら基督教徒と稱するさへ躊躇せざるを得無い、而して、破門の如きは自分に取つては、何でも無いことである、何となれば、何人も眞理といふものから自分――卽ち、ト

ルストイ――を破門することは能き無いのだから、と宣言した。

この破門一條は、世上の同情及び尊敬をますゝトルストイの一身に集めたのであつた。

この時分に、トルストイは、可なり重病に罹つた。で、南方で避寒することに爲つて、千九百〇一年の九月にクリミヤへ行つて、ガスプラにある伯爵夫人バアニンの別莊に逗留した。千九百〇二年の秋になつて、全く健康に復して、ヤアスナヤ・ポリヤアナへ歸つた。

日露戰役が始まると共に、トルストイは、『汝等自ら考へよ』といふ、非戰論を公にした。千九百〇五年一月二十一日の所謂僧ガポンの示威運動以後の露西亞全國の爭鬪、動搖の時代にも、トルストイは、政治の圈外に立つて、保守、革命兩派に對して、爭鬪の無益なことを、靜に諭す態度を執つたのであつた。

千九百〇八年には、トルストイは滿八十歳に達したので、渴仰者間に、祝賀會を催さうといふ企があつたのであるが、僧侶及び政府の干涉の爲めに、十分に實行さるゝに至らずに了まつた。けれども、千九百〇九年の春に至つて、トルストイ展覽會が彼得堡で催され、其所では、トルストイの原稿、書簡、肖像、胸像、揮畫、端書、ポンチ繪等が陳列された。この展覽會の際に、その後に設立すべきトルストイ紀念館には、その展覽會の陳列品の大部を收容しやうといふ決議が、委員間に成り立つた。

〈八〉

トルストイが、財產を捨てゝ、一賤民の生活に入らうと企てたのは、隨分古くからのことであつたが、諸種の事情に妨げられて、それを實行するに至ら無かつたのだ。

所が、老年になるに從つて、自分の周圍と自分との不調和がだん〳〵烈しく感ぜられだした。彼は、いよ〳〵決心して、千九百十年十一月十日の朝、自分の決心の理由を說明した手紙を妻に宛てゝ遺して置て、ドクトル・マコオヴィツキイ及びその娘のソオニヤを伴れて家を出て、汽車に乘つて、オプティン

修道院へ行つて、其所で一夜を明し、それから、尙十二哩ばかり先きのシャマアルディン尼院へ行つた。其所には、トルストイの妹のマリイが尼になつて居るので、トルストイは、それに逢つた。暫時その村に滯在しやうと思つて、家を探がした位であつたのだが、家出以來トルストイの健康が勝れ無かつたので、尙前方へと旅行を續け無ければならぬ無かつた。が、途中でだんだん身體が弱つて來たので、ウラル・リヤザン線の停車場アスタポヴァで止まつた。トルストイの考は、唯漠然と南方へと進まうといふのであつたのだ。その停車場の驛長イヴァン・オソリンは、親切にも、トルストイの爲めに自分の宅の數室を明け渡した。

やがて、肺炎が起つて、人としての務を最も壯大に盡くし終はつたトルストイが、この世を靜に辭する日が近づきだした。

彼の臨終は實に靜であつた。何の悶無く、何の苦しみ無く、眠むるが如く逝いた――千九百十年十一月十九日(露西亞曆は七日)のことである。

十一月二十二日に、遺骸は、サセエカ停車場へ運れて、其所で、親族、知人、其他同情者、代表者等の群集に迎へられた。

葬式は極めて質素なものであつたが、如何にも嚴肅に執行された。質素なる棺は農夫に擔がれ、數千の會葬者は『デ・プロフンディス』の讃美歌を歌ひながら、その後に續き、その行列の先頭には、二人の農夫が、粗麻布の急造の旗を二本の樺木の棒に附けたのを捧げて進んだ。旗には左の銘があつた。

『君が、善根の記憶は、吾等の間に、永久に消ゆること無かるべし。

ヤアスナヤ・ポリヤアナの孤兒となれる農民』

で、棺は、ヤアスナヤ・ポリヤアナのトルストイ家へ持つて來られて、階下の一室に置かれ、其所で、蓋が除られて、數千の人々が、この偉人の遺骸に最後の別離を告げた。

輓歌の聲に送られて、棺はトルストイの息子たちに擔がれて、庭園を過ぎ、森を過ぎて、その緣の小さい谷へ達した。其所が埋棺地であつた。丁度その

地點が、兄ニコラアスが、少年時に、四海同胞の幸福なる世を來す祕密の方法を書いた棒を埋めて置いたと、レオ等に屢く話した場所だといふのである。棺が墓へ下されるといふと、數千の人々は、跪まづいて、頭を垂げて、默禱した。その嚴肅な沈靜の裡で、下された棺の上へ投げかけられる凍つた土の音のみが聞えた。

（ポオル・ビルウコフの『トルストイ傳』に據る）

例言

△『戰爭と平和』のやうな既に近代文學中のクラシックになつて居る大作に、別段序文を添へるにも及ぶまいと思つたので、その代りに、著者トルストイの略傳を載せたのだが、未だ少々この作品に對する解題めくものを書いた方が宜いかも知れぬと思はれるので、左に少し左樣いふ事どもを書いて置く。

△『戰爭と平和』は、トルストイ家の歷史のやうなものである。即ち、ロストオフ家はトルストイ家、ボルコオンスキイ家はヴォルコオンスキイ家であるのだ。けれども、公爵アンドレエーは、架空の人であり、ピエールも又左樣であらう。從つて、この二人の性格、思想、感情を一緒にすると、著者トルストイその人になる譯なのであらう。

△戰爭の部分に於ては、ナポレオン、アレクサンドル一世、皇帝プランツを始として兩軍の名將等を巧に描寫して居る。が、比較的少勇士のなかには、架空の人物もあり、又、實在の人物をモデルにして書いたものもあるらしいのだ。現に、第一卷から出て來る、レエルモントフ式の性格の將校フョオドル・ドロオホフは、トルストイの從兄テオドル・トルストイのことを書いた

ものだと傳へられて居る。

△『戰爭と平和』は各齣に山があつて、讀者の感興を引き付けて行く所に、トルストイの小說家としての豐なる天分が十分に表はれて居る。此の如き長篇中の長篇を、人に勞苦無く讀ませやうといふには、左樣いふ用意の必要なことは、論を俟たぬが、これだけの大問題を扱つた作品が、よくも斯う面白く書けたものだと、嘆服せざるを得無い。

△この作は、この第一卷位なものが、このあと三卷で完結する、即ち、總計三千頁餘にのぼる長篇であつて、トルストイが最も力を籠めたのは、第三卷、第四卷であるやうに見える。で、この第一卷だけでも非常に面白いのではあるが、これは未だあとの三卷に對する序詞のやうなものであつて、第二卷、第三卷と書き進むに從がつて、著者の筆は、次第に入神の域に進んで行つて居る。第一卷を讀了するのに、多少の勞苦を感ぜられる讀者でも、忍耐して、第二卷以後へ讀み進まれゝば、感興も次第に加はることも勿論だし、又、それが爲めに得られる所の多いのは、確である。

△『戰爭と平和』の如き小說は、唯だ讀者を樂ませ、面白がらせる爲めに書かれるのでは無い。讀者に考へさせ、讀者に何事かを敎える爲めに書かれるのだ。斯ういふ作品に對する時は、讀者は先づ左樣いふ豫想を以て、讀み始め無ければなら無いのだ。

△譯者は、この大作を譯するに當つて、所謂る氣の利きたる語法を用ゆることを避けた。殊に地の文に於て、左樣いふ注意を爲たのだ。重過ぎて、不器用に見えやうとも、輕きに過ぎてはいけまいといふ用心に出でたのである。從つて、地の文に於ては『見たいな』『てる』『てな』といふやうな言葉は一切用ゐ無かつた。

△それから、會話の中に於ても、已を得ざる場合を除いて、敬語を成るべく少くするに力めた。『お』の字や『御』の字が、餘まり多いと、力が拔けるやうに感じたのと、外國語の語法をも考へ合せたのとで、左樣いふことになつたのである。

△手紙は勿論、勅論、宣言、布告の如きものまで、成るべく、口語、若くは、口語に近いものに譯した。これは、譯者が、我國の有らゆる文體は、成るべく早く口語體に改めらるべきものと信ずるが爲めなのだ。

△兵語、軍職名等に就ては、軍隊の組織が今日とは大に相違して居る所があると思ふので、適宜の譯語を當てた。

△佛蘭西語、獨逸語、伊太利語等の他國語も譯して了まつて、原語を揭げ無い。誰にでも讀んで

貰らひ度い譯書としてはその方が宜いと思つた爲めである。

△本書に出て來る年月日は皆露西亞曆だ。即ち、現今の歐洲曆に比すると、十二日後れであるのだ。

△露里とあるのは、露西亞の一里であつて、〇・六六哩、即ち、我國の約十町だ。

△卷頭にあるトルストイの自署を添へた肖像は、露西亞の大畫家エリア・レエピンの筆に成つたものだ。

△「戰爭と平和」の飜譯にかゝつたのは、一昨年の八月からである。この第一卷を譯了したのは昨年の二月頃かと思ふ。その後、飜譯を今日まで繼續して、第四卷の三分の一餘の所まで進んで居る。遲くも、この十月までには、全部を譯了し得られるだらうと思ふ。

△譯者は、この二年間、專心にこの大作の飜譯にかゝつて居たのだ。十分な結果を擧げ得無いのは、微力の爲めであつて、決して、怠慢の爲めでは無い。譯者は、この空前の大作を、本邦の讀書界に紹介し得るのを光榮とし、且身の幸運と思ふのであるから、能き得る限りの力は盡くした積りである。

△然しながら、譯者甚しく貧乏なるが爲めに、この雄篇の飜譯に今少しの歲月をかけ得無いのは、遺憾である。

△この飜譯は校正に至るまで一切譯者一人の爲事だ、他人の助を借りるだけの餘裕が無かつたのだ。從つて、本書に關する責は全く譯者一人にて負ふべきものである。

△總て、叢書は、商略上から云へば、中に收められる書名の多い方が有利なのだ、一部で四卷にも亘る『戰爭と平和』のやうなものを、加へるのは、不利であるのにも拘らず、此書が我國に紹介せられざるべからざる大作であるのを認めて、『戰爭と平和』をば『泰西名著文庫』の中へ收むるに至つた國民文庫刊行會の主幹等の果斷は、我國の讀書界から多大の謝意を表せられるに値することは確であらう。

△一昨年の秋であつたと記憶して居るのだが、或る席で故平出修君から、『戰爭と平和』の飜譯をやつて居るかと尋ねられたので、僕が、さうだと答へると、平出君は、容を改めて『誠に有り難うございます』と云つた。僕は、自分に對して述べられた禮とは一寸と氣が付き兼ねて、挨拶に途惑つた位であつた。平出君は、熱心な文學愛好者であつた。彼樣いふ職業の人としては知識も博かつた。全く惜しい人であつた。君にして、若し生きて居られるのであつたら、僕はこの第一卷が世に出ると共に、曩に君から與へられたその奬勵の言葉に對して、厚く禮を云は

うものをと、故人の面影が今更に懐かしく感せられる。記して以つて、故人の靈に向ひ、茲に謝意を表して置く。

千九百十四年七月五日

馬場孤蝶

第一巻目次

第一章（千八百〇五年）

（一）……一
マドモアゼル・シェーレルの夜會――公爵ヴァシイリとの政治論――アナトオル・クラアギンと公爵嬢マリイヤを結婚させやうといふマドモアゼル・シェーレルの提言。

（二）……一三
マドモアゼル・シェーレルの客室――老伯母――公爵夫人ボルコンスキイ――ピエール――アンナ・パアヴロヴナの主婦振り。

（三）……二一
種々な集團――子爵モントマアル――ダンギアン公暗殺の議論――美人エレン――マドモアゼル・ジョルジュの家にて公とナポレオンと遭會ひたる物語。

（四）……三二
公爵夫人ヴルウベツコイが、公爵ヴァシイリに、自分の息子の爲めに骨折つて呉れと、強請する事――勢力の貴き事――ミランにてのナポレオン戴冠式に就ての議論

戰爭と平和

——佛蘭西の事態に對する子爵の意見——ピエールがナポレオンを賞たる言辭——ピエールの笑顏——公爵イポリイトの爲たる物語。

（五）・・・四九

ピエールの人と爲り——ピエールと公爵アンドレエーとが、戰爭及びナポレオンを論ずる事。

（六）・・・五七

公爵夫人が、男二人の席に加はる——殆ど夫婦喧嘩——公爵アンドレエーは、ピエールに決して結婚する勿と、勸告する、それに對する公爵の論據——ピエールは、アナトオルの放埒に再び加はらずと、約束する。

（七）・・・七〇

ピエール約束を破ぶつて、再行く——近衞騎兵の兵營内の光景——スティイヴンとドロオホフとの賭——ドロオホフの性格——ドロオホフ曠一本を飲み干して、五十留を贏つ——ピエール熊を伴れて踊る。

（八）・・・八一

ポリイス・ヴルウベツコイ近衞のセミヨオノフスキイ聯隊附となる——公爵夫人ヴルウベツコイ莫斯科のロストオフ家を訪問す——伯爵夫人ロストオフ——その夫人の威嚴——伯爵夫人の命名日の接客——老伯爵ベズウホフとその庶子に關する談話——ピエールとアナトオルとの亂暴の物說——ピエールが家名及び財產を相續しさうな事。

（九）・・・九〇

小兒等の闖入——十三歲のナタアシヤ・ロストオフ——ニコラアイ・ロストオフ——ポリイス・ヴルウベツコイの性格。

（十）・・・九四

仔猫のやうな姪のソオニヤ——ソオニヤの嫉妬——伯爵夫人ロストオフ、マダム・カラアギンと小兒の敎育法を論ず——伯爵孃ヴェーラの樣子。

（十一）・・一〇二

ニコラアイ植物室にてソオニヤを慰撫む——ナタアシヤの悪戲の接吻——ポリイスとの結婚の約束——ヴェーラ、弟妹等に對して自分の性格を表はす。

（十二）・・一〇六

伯爵夫人とアンナ・ミハーイロヴナとの打明け話——公爵夫人自分の金錢の缺乏を打ち明く——伯爵ベズウホフを訪問せんと決心す。

（十三）・・一一六

ボリイスとその母親は、キイリル・ヴラディミロヴィイチの家へ向ふ――アンナ・ミハーイロヴナと公爵ヴァシイリとの會見――伯爵ロストオフに對する公爵ヴァシイリの評――ボリイスはピエールの許に遣らる。

（十四）……一二五

ピエールは父の家に來る――伯爵の三人の姪は、ピエールをば『幽靈か、癲癇者か』のやうに迎ふ――ピエールは全く捨て置かる――ピエールとボリイス――ピエールの顧動――老伯爵ベズウホフの靈の救ひに對するアンナ・ミハーイロヴナの熱心。

（十五）……一三五

伯爵夫人ロストオフの七百留の調達振り――伯爵夫人はその金錢をアンナ・ミハーイロヴナに贈る。

（十六）……一四〇

マアリヤ・ヴミイツリエヴナ・アフロオシモフ――シインシンとベルグ――ベルグの自分の野心に對する辯護――彼の自我主義――ピエールの參着――マアリヤ・ヴミイツリエヴナの樣子――その夫人のピエールに對する半滑稽な攻擊――伯爵の宴會――戀する娘等。

（十七）……一五二

勢ひ付いたる談話――皇帝の勅諭に對する大佐シューベルトの辯護――戰爭に對するニコラアイの興味――彼の熱心なる言辭――氷に就てのナタアシヤの惡戲――な言辭。

（十八）……一五八

ソオニヤの悲痛――ナタアシヤの同情――ソオニヤは自分を犧牲に爲やうと云ふ――四人の若き人々『梟』を論ふ――ナタアシヤはピエールと舞踏す――伯爵ロストオフはマアリヤ・ヴミイツリエヴナと『ダニエル・クウパア』を踊る。

（十九）……一七〇

伯爵ベズウホフ卒中の第六回目の襲擊を受く――邸宅内の光景――公爵ヴァシイリと公爵孃カティイシとの會合――ピエールが相續し得るや否やに就ての議論――それを妨げんとする公爵ヴァシイリの策略。

（二十）……一八五

アンナ・ミハーイロヴナがピエールを死に行く父親の許へ伴れ行く――ミハーイロヴナがピエールの利益を守ることを約束す――二人は公爵ヴァシイリと公爵孃カティイシとの相談中の所を見る――前部室の光景。

（二十一）……一九四

伯爵キイリル・ペズウホフの樣子――寢室の光景――最後の塗膏式――公爵ヴァシイリの奇異な行動――ピエールは父親の手に接吻す――伯爵の最後の凝視。

（三十二）……二〇二

小客室に於ける眞夜半の光景――アンナ・ミハーイロヴナとカティイシとの評論――アンナ・ミハーイロヴナ象嵌入りの書類挾を取り留む――その書類挾の奪ひ合ひ――伯爵の死亡――公爵ヴァシイリに對する伯爵の死去の影響――アンナ・ミハーイロヴナの伯爵の臨終に就ての物語――その夫人のピエールより物を受け得るならんとの希望。

（三十三）……二一二

公爵ニコラアイ・アンドレエーチ・ボルコンスキイの日常生活――彼の性格と考想――旋盤を廻す公爵――娘に與へる日課――數學の賞讃――公爵孃マリイヤに對するジュリイ・カラアギンの手紙――ジュリイのニコラアイ・ロストオフに對する感情――マリイヤの返書――ピエールの胸中にて相爭ふ諸思想。

（三十四）……二三〇

公爵アンドレエー夫妻の到着――リザとマリイヤの對面――公爵アンドレエーの當惑――公爵アンドレエーと父親――着衣中の老公爵。

（三十五）……二四〇

公爵の食堂――系圖――老公爵とリザの對面――食卓にての政治論。

（三十六）……二四九

公爵アンドレエーの出發準備――嚴肅な考慮――マリイヤとアンドレエーとの暇乞の對面――マリイヤはアンドレエーに祝福ある聖像を帶びよと勸む――父親の宗教上の意見に對するマリイヤの批評――妖婦的マドモアゼル・アウリアンヌ――リザの取り留め無き談話――アンドレエーと父親との別れ――公爵の感想錄――リザとの別れ。

第二章　（千八百〇五年）

（一）……二六八

プラウナウ附近の露西亞軍及び總司令官クツウゾフ――閲兵に對する準備――諸聯隊の狀態――聯隊長――兵裝の變更――卒伍に貶されたるドロオホフ――青い外套――第三中隊の大尉ティモオフィン。

（二）……二七六

クツウゾフの到着――閲兵――公爵アンドレエー及びネスヴィイツスキイ――ジエルコフ――驃騎兵の物眞似――公爵アンドレエーはクツウゾフにドロオホフのことを云ふ――ティモオフィンのドロオホフに關する報告――聯隊の兵卒間の

クツヴゾフに對する評――『樂隊は前へ』――ジエルコフはドロホホフと舊交を暖めんとす。

（三）……二九二
クツウゾフと、軍事會議の議員――攻擊的の態度に出でざることに對するクツゾフの辯解――公爵アンドレエーの變り方――公爵アンドレエーの父親に宛てゝの、彼のことに就ての、クツウゾフの報告――同僚間にての親られ方――敗れたる將軍マックの到着――『不運なるマック』――戰役に對する準備――ジエルコフが將軍スツラウホを侮辱す――公爵アンドレエーの憤激。

（四）……三〇四
少尉としてのニコラアイ・ロストオフ――ニコラアイと彼の馬――獨逸人の家主人との談話――デニイゾフの樣子――中尉テリヤアニン――錢入の紛失――ニコラアイはテリヤアニンをして盜品を返さしむ。

（五）……三二一
ニコラアイは聯隊長に詫びることを拒む――その事件の議論――ニコラアイの自尊心――不活動の終。

（六）……三二九
退却中のクツウゾフ――軍はエンス河を渡る――戰場――丘上よりの展望――砲兵陣地よりの砲擊。

（七）……三三四
橋を渡る露西亞軍――橋上のネスヴィイツスキイ――兵卒の談話の斷片――獨逸人の一家――橋上のデニイゾフ――軍人的言葉戰。

（八）……三四三
佛蘭西軍の出現――哥薩克兵の前哨――兩交戰軍間の嚴肅なる間隙――知られざる物――砲火の下――驃騎兵の渡橋――ニコラアイ・ロストオフ――橋を燒けと命ぜらる――誤解――葡萄彈――景色の美しさ――死と戰の破壞とに對する反照――ロストオフの祈禱――始めて砲火の下に立つ。

（九）……三六〇
露西亞軍の退却――千八百〇五年十月二十八日――軍の狀態――公爵アンドレエーの負傷――ブルンの墺地利宮中への特使として遣らる――夜通しの疾驅――異樣の感覺――宮殿に於ける公爵アンドレエー――陸軍卿に對面することゝなる――冷然たる待遇――官吏階級によりて暗示せられたる諸思想。

（十）……三六九

ビリイビンに歡待せらるゝ公爵アンドレエー――ビリイビンの性格と閲歴――外交上の微妙――維也納の陷落――ブオナパルトか、ポナパルトか――さま〳〵の幻覺。……三八一

（十二）公爵アンドレエーは、粋な連中（卽ち『吾々の連中』なるもの）に逢ふ――ビリイビンの宿に於ける公爵イポリイト・クラアギン其他の人々――戲り物の公爵イポリイトの行詰り。……三八六

（十三）朝賀に出たる公爵アンドレエー――皇帝フランツへの謁見――五月蠅き程の諸方よりの招待――マリヤ・テレサの三等勳章を授けらる――朝廷の急發足――ビリイビンは、タアボル橋占領の物語を爲る。……三九八

（十四）公爵アンドレエーは、軍に歸る――露西亞軍の混亂――軍醫の妻――泥醉せる將校――公爵アンドレエーはネスヴィイツスキイを見付ける――公爵バグラアチオン及びウアイエロオテルと共に居るクツウゾフ――兵の配置――バグラアチオンの樣子――クツウゾフはバグラアチオンに祝禱を與ふ――クツウゾフの樣子――公爵アンドレエーはバグラアチオンの隊に加はるを許されんことを請ふ。……四一〇

クツウゾフはクレムズよりツナイム及びオルムッツへ退却するに決す――バグラアチオンは山中を越えて差遣さる――『不可能か可能となる』――失敗せる詐略――休戰――遲延に對するボナパルトの憤激――公爵ムラアへの手紙――バグラアチオンの四千の兵。……四一六

（十五）公爵アンドレエーはバグラアチオンに追ひ付く――懇に迎へらる――陣地の偵察――酒保の天幕――靴を脫ぎたる大尉ツウシン――戰線の諸兵士――盜賊の所罰――佛蘭西人との雜談――シドオロフ――代辯者としてのドロオホフ――シドオロフの胡麻かしの佛蘭西語。……四二七

（十六）丘上よりの展望――地形――陣地に對する公爵アンドレエーの見解――死に關する議論――砲彈――再び大尉ツウシン。……四三二

（十七）戰鬪開始――事實の勢力――會計檢査官――『佛蘭西煎餅』――殺されたる哥薩克兵――ツウシンの砲兵陣地――シェーングラアベンに火災を起さす――ツウシンの掩護兵退き去る――ツウシン忘れらる――事件の偶發に拘はらず將軍の居合

戰爭と平和
すことの價値。
（十八）……四四一
戰場――戰線にて――バグラアチオンに對する戰鬪の影響――敵の進擊――『左、左』――第六獵兵の進擊――敵の敗走。
（十九）……四五〇
パアヴログラアド驃騎兵はランヌの爲めに攻擊されて破ぶらる――退却を命ぜらる――二將校の評論――挑言――試驗――ロストオフの中隊敵に面す――進擊――ロストオフの感覺――ニコラアイ落馬す――鈎鼻の佛蘭西人――ニコラアイ逃ぐ――逃げ得たり――痿痺したる腕。
（二十）……四六一
隊伍の潰亂――ティモオフィンの沈着――ドロオホフの勇敢――ツウシン尙戰ふ――砲兵陣地の死者――ツウシンの勇敢――彼の想像――母親マツヴェーヴナ――公爵アンドレエーはツウシンを呼び戻す爲に差遣さる――砲兵陣地内の光景。
（二十一）……四七二
ニコラアイはマツヴェーヴナの砲車に乘せて貰らう――野營――生きた河――夜の光景――戰の後――ロストオフの感覺――談話の斷片――ツウシンは將軍の前へ喚ばる――小家の内のパグラアチオン――虜獲せる旗――聯隊長の物語――彼が眞實なりと信ずるが故に眞實なり――責むべき者賞められ――賞めらるべきもの責められる――ツウシン讃賞さる――公爵アンドレエーはツウシンを辯護す――立派な賞言――ニコラアイの幻覺――軍の結合。

第三章　（千八百〇六年）

（一）……四八九
公爵ヴァシイリの性格――自分の娘をばピエールに嫁がしめんとする計畫――ピエール侍從に任ぜらる――ピエール諸方より歡迎さる――富の効力――胴の長きカティイシの擧動――ピエールの寬大――公爵ヴァシイリはピエールの家事を處分す――自身に對しても幾干かを取り置く――ピエールは彼得堡にて好遇さる――マドモアゼル・シエーレルの夜會――エレンの自己信頼――ピエールの喫煙草函――伯母さん――エレンの肉感的の美しさ――ピエールに對するエレンの支配力――ピエールは彼得堡の家に新設備を施こす――ピエールはエレンの性格を計上す――エレンに就ての醜聞。
（二）……五〇八
ピエール自己の危險を覺る――魅せらる――公爵ヴァシイリの謀略――エレンの

命名日——公爵夫人クラアギン——會集の生命なる公爵ヴァシイリ——セルゲエー・クズミイチ・ヴィアズミイティノフと勅諭の物語——エレンとピエール——若き戀とそれが現實に遠ざかり居ること——ピエールの放心——公爵ヴァシイリ、事件を危機に進ましむ——『私は貴女を愛する』——ピエール結婚す。

（三）……………………………………五二六

公爵ヴァシイリは荒涼丘へ行くことを通す——公爵ヴァシイリに對する公爵ニコラアイの評——不機嫌——見分——アルパアティイチ雪を掻き戻させらる——正餐の時の公爵——荒涼丘に於けるリザ——『大臣』——マドモアゼル・ブウリアンヌの大膽——公爵ニコラアイ嫁を見舞う——公爵ヴァシイリの到着——アナトオルの性格——求婚者に對する公爵嬢マリイヤの恐怖——リザとマドモアゼル・ブウリアンヌとがマリイヤを美しくせんと骨折る——その失敗——マリイヤの祈禱に對する神の答。

（四）……………………………………五四三

公爵嬢マリイヤ客室へ下り行く——アナトオルの自信——女性に對する彼の擧作——リザの快活——一般の談話——將來の求婚者に對する公爵ニコラアイの考想——公爵ボルコンスキイは娘の髮を見て腹を立つ——公爵ヴァシイリの申し込み——家内の女たちに對するアナトオルの影響——マドモアゼル・ブウリアンヌの向上心——『我慾なる母』は、——アナトオルの禮式違犯が他義に解さる。

（五）……………………………………五六一

リザのヂレ込み——老公爵思案の上決心す——公爵嬢父親に相談す——公爵嬢は選擇の十分なる自由を與へらる——公爵嬢は、アナトオルとマドモアゼル・ブウリアンヌとが温室に居るのを見付る——公爵嬢マリイヤの反對の決心——マドモアゼル・ブウリアンヌを宥す。

（六）……………………………………五七四

ロストオフ家の有樣——ニコラアイよりの手紙——伯爵夫人に何ういふ風にして知らすべきか——娘たちはニコラアイのことを憶ひ出さうと試む——ペエティヤの優越——伯爵夫人に知らす——ニコラアイへの諸書狀。

（七）……………………………………五八七

オルムッツ附近の陣營——ニコラアイ旗士に昇進す——ニコラアイはベルグと同宿せるボリイスを訪ふ——二人の若者の相違——ボリイスに對するニコラアイの憤怒——大公に就てのベルグの物語——ニコラアイはシェーングラアベンの物語を爲る——知らず〳〵の誇張——公爵アンドレエー來る——ニコラアイ公爵と喧嘩す——決鬪せんとす。

（八）……………………………………六〇五

皇帝、兵を檢閲す――ニコラアイの熱中――馬上のニコラアイ。
（九）……六一四
ポリイスはオルムツに公爵アンドレエーを訪ふ――大本營――不文の法則――公爵アンドレエーと將官――公爵アンドレエーはポリイスを伴れて、ドルゴルウコフに逢に行く――戰略會議――ナポレオンに就ての公爵ドルゴルウコフの物語――國民の運命を決する人々。
（十）……六二七
戰鬪の準備成る――ニコラアイ豫備隊となる――再び皇帝――ウィシヤウにての少衝突――皇帝戰場を視察す――晩餐――ニコラアイの祝盃。
（十一）……六三七
サヴァリイ使節として皇帝の許に來る――ドルゴルウコフがナポレオンと交渉する爲めに差遣さる――千八百〇五年十一月――軍は大なる時計の如し――ナポレオン訪問に對するドルゴルウコフの物語――ウァイエロオテルの方略――クツウゾフの豫言。
（十二）……六四五
戰略會議――ウァイエロテルは重き荷車に繋がれたる馬の如し――ウァイエロオテルの『兵の配置』――討論――戰略會議の後――公爵アンドレエーの疑義――彼の豫覺――彼の熱望――從僕等クツウゾフの料理人に揶揄ふ。
（十三）……六五七
アウステルリツツの戰（千八百〇五年十一月二十日）――戰線に出でたるニコラアイ――彼の感覺――彼の洒落――佛蘭西軍の動搖――『皇帝萬歲』――バグラアチオンの視察――ニコラアイの偵察に遣らる――ニコラアイの報告――豫備隊より他へ移つされんことを請ふ――軍に對するナポレオンの命令。
（十四）……六六九
戰の朝――兵士の局限――船の如し――隊伍間の雜談――混亂――戰の開始――バグラアツエンよりの展望――ナポレオンと諸元帥――戰場の要鍵――ナポレオン戰鬪開始の命令を出す。
（十五）……六七九
バグラアツエンに於けるクツウゾフ――諸隊の行進――公爵アンドレエーの感情――墺地利の同僚に對するクツウゾフの擧作――皇帝とクツウゾフ――『何故始めぬか？』――アプシエロン聯隊――ミロラアドヴィイチの進擊。
（十六）……六八九
佛蘭西軍の不意の出現――クツウゾフ負傷す――敗走――公爵アンドレエー盛

り返さんとす――戰場の光景――公爵アンドレエー負傷す――蒼空の無限の深さ。

（十七）……六九七
右翼――パグラアチオンはニコラアイ及クツウゾフの許へ遣る――ニコラアイの疾驅――ライプ槍騎兵の進擊――九死に一生を得たり――ポリイス――ベルア負傷す――不吉なる豫覺。

（十八）……七〇八
ロストオフ尙乘り進む――軍の潰亂――不運なる戰場――ロストオフ皇帝を見付ける、言語を掛け得ず――ロストオフの絶望――再クツウゾフの料理人――午後五時――アウゲストの堤――砲擊――ドロオホフ。

（十九）……七二一
戰場に遣されたる公爵アンドレエー――ナポレオン――無限の天に比してはナポレオンの小なる事――ナポレオンと公爵レプニン――中尉スフテレンの立派なる答――ナポレオン公爵アンドレエーに言語を掛く――聖像――公爵アンドレエーの發熱中の想像――ドクトル・ラレーの診斷――治癒の望無し。

戰爭と平和　第一卷

露國　レオ・トルストイ著

馬場孤蝶譯

第一章

（一）

『ねえ、公爵、ゼノアとルッカは最早ボナパルト家の屬領、私有財産といふより外はありませんね。露西亞がいよ〳〵開戰すると云つて下さらなければ、貴下がこれでも彼の「基督の敵」――私は確に彼奴を「基督の敵」だと信じて居るんですよ――彼の「基督の敵」の何樣な怪しからん事でも、何樣な兇暴でも貴下は見遁がしてお置きなさるんなら、貴下とのお交際は此れつ限りですよ、貴下は最早お友達ではありません、貴下は最早、何時も仰しやる通りの私の忠

實な奴隷ではありませんよ。さ、消沈つてはいけませんよ、私の調子に吃驚なすつたんでしようねえ。さア、此所へお出なすつて、詳しいお話を聞かして下さいましよ』

宮女で、皇后マリア・フェオドロヴナの心腹であつた名高いアンナ・パアヴロヴナ・シェーレルが、自分の家の夜會にやつて來た一番初の客の公爵ヴァシイリといふ有力な政治家に、斯ういふ風に挨拶したのは、千八百〇五年の七月の或る晩であつた。

アンナ・パアヴロヴナは五六日此方咳嗽をして居た、グリップに罹つて居たのだ、此婦人は自分の流行性感冒のことを氣取つて然樣呼んだ――グリップはその時分には極く偶にしきや用ゐられぬ言詞であつた。

その朝、赤い役服の從僕に配らせた小さい何枚もの口上書は、悉皆同じ文面であつた――

『別にお差支がございませんなら、伯爵(或は公爵)、そして又、哀れな病人の相手を一晩なすつて下さることが餘まり太どくお嫌でございませんなら、今晩七時から十時までの間に宅でお眼にかゝれゝば眞個に嬉しうございます。――アンネット・シェーレル』

『ヤア。何といふ蠻的な攻擊だらう』と、公爵は歩み寄りながら應じた、刺繍のある參内服、半ズボン、金剛石の扣子付きの半靴といふ服裝、で、淡々としたその顏に生眞面目な表情の出て居るので見ると、主婦の挨拶を全然何とも思つて居無いのらしかつた。

公爵は立派な佛蘭西語を使つた――昔は露西亞人はさういふ佛蘭西語で話を爲たばかりで無く、それで考へも爲たのであつた――公爵の聲は、交際社會と宮中で長い生活を送くつた豪い人にふさはしい低い、そして他を下目に見るやうな調子であつた。

公爵は、アンナ・パアヴロヴナの側へ行つて、主婦の手の上へ香料を塗つた自分のテカ〳〵した禿頭を曲げて、接吻し、それから、長椅子の上に樂々と坐はつて――

『ねえ、先づ貴女が何んな案配なんだかそれを聞かして、この友達を安心させてください』と、今度は露西亞語で云つた、けれども、聲は前の調子を變へ無かつた、その言辭が婦人向に慇懃で親切であつたに拘らず、その聲調は尙且冷淡、所では無く、冷嘲の意味をさへ洩らして居た。

『道德的感能が斯樣に惱ませられる時節に――誰が快くつて居られるでしよう？　少しでも感情を持つて居る者に取つて、此頃のやうな時代に、誰でも靜になつて居られますか？』と、アンナ・パアヴロヴナは高調子に爲つたが、『今晩はゆつくりなすつて下さいます、ねえ？』

『えゝ。けれども、英國大使の祝賀會がね。水曜日なのでしよう。彼所へも顏を出さん譯に

は行かんのでね』と、公爵は云つた。『娘が、同行する爲めに、今に私を連れに參ります』

『延びたのだと思つて居ましたのにねえ。祝賀會だの花火なんてものはだん〳〵下ら無くなつて來たやうですねえ。左樣申しては何ですけれども』

『貴女の思召と知つたら、先方で延期したでしように』と、公爵は云つた、信じて貰らへるとは自分でも少しも豫期し無い斯ういふやうなことを、卷いた時計のやうに、自然に云ふやうな癖が付いて居るのであつた。

『お嬲りなさるなよ。——所で、ノヴォシイルトソフの急報一件は何う極りましたね。貴下には何でも分かつて居るでしようから』

『何うとも云ひやうがあるもんですか』と、公爵は當惑の冷たい調子で云つて、『何う極まつたと云つた所で。唯だ斯うです、ボナパルトが自分の船を燒いたこと丶、それで、吾々も吾々の船を燒かうとして居ると信ずるだけですな』

公爵ヴァシイリは、演慣れた役割を繰り返へす俳優のやうに、何時も氣乘りのし無い物の云ひやうをするのであつた。アンナ・パアヴロヴナは、その反對で、四十代でありながら、如何にも快活で、なか〳〵勢が好かつた。

物に熱中する性質であることがこの婦人に公際社會に於て特種の位置を與へた、それで、時には、自分では左樣するやうに氣の向かぬ時でさへ、知人たちに意外の思ひを爲せぬやうにと、熱中の何時も所の調子まで、自分からせり上るやうにするのであつた。顏の上に絕えず漂よつて居る抑へ付けた微笑は、す枯れた顏の道具立とは不調和であるけれども、驕兒の場合と全く同なじに、愛嬌の方面での缺陷を此女が何時でも自覺して居ることを表して居た、その愛嬌の缺けて居るといふことは、自分でも何とかする方が都合が好いと思つて居たにした所で、何うにもすることが能きず、又何うとかするといふ氣も無かつた。二人は政治問題の話に耽つて行つたが、アンナ・パアヴロヴナは全く熱中して了まつた——

『いゝえ。澳地利のことは一切私に仰らずに置てくださいよ。澳地利のことは私は全然知らず無いかも知れませんよ、けれども、澳地利は此れまで決して開戰する氣はありませんでしたし、今でも、そんな氣はありませんわ。彼の國はわれ〳〵を裏切つて居るのです。露西亞ばかりが歐羅巴の救主でなければならないんですよ。聖上はご自分の崇高なご職任を自覺なすつてお居でになつて、それを何處までも忠實にお守りなさいますわね。これだけは私は何處までも確信して居りますわ。世の中での一番壯大な仕事がわれ〳〵のご仁德の高いお豪い陛下の御手を待

つて居るのです、陛下は彼れほどご仁心がお篤くつてお德が高く居らつしやるんですもの、神の御助けが無い氣遣はありませんわ、ですもの、陛下は、今何とも云ひやうの無い厭な恐ろしいものにだん〳〵なつて來た革命の九頭怪を、彼の殺人者の無賴漢の鼻先で踏み潰ぶすご天職を十分にお盡しなさるに極まつて居りますわ。われ〳〵露西亞人ばかりに、正しい者の血潮を償ふ天の命任が下つて居るのですわ。われ〳〵が賴みに能きる國が何處にありますえ、何うです貴下。――商人根性の英吉利には、アレクサンドル陛下のいや高い御心が本當に解かる氣遣は何うしたつてありませんわ。彼の國はモォルタを明け渡すことを承知し無いぢやありませんか。彼方ではわれ〳〵の行動に何か秘密な動機でもあるだらうと、そればかり一生懸命に探して居るぢやありませんか。彼方ではノヴォシイルトソフに何と云ひましたね。――何にも云は無いでしよう。今上陛下が御自身の利益にと云つては何もお望みなさらず、唯だ何でも世界の爲ばかりにと思召して居らつしやる克己の大御心は、英吉利人たちには何うしたつて解かりつこはありませんよ。彼等は何を約束しましたね。何にも約束し無いぢやアありませんか。此れまで約束して居たことまでも實行し無いぢやありませんか。普魯西は既にボナパルトは打勝つことの能き無い者で、歐羅巴全體が彼の前では無能力だと公言したぢやありませんか。――で、私はハルデンベルヒにもハウヒウィツツにも寸毫だつても信用を置きませんわ。彼の評判の高い普魯西の中立は陷穽に過ぎませんよ。私は神ばかりを信じ、われ〳〵の愛する聖上陛下のいや高い御天職を信ずるばかりです。陛下は必然歐羅巴をお救ひになりますよ』――

アンナ・パヴロヴナは自分の調子の餘まり激しいのが我ながら可笑しくなつたといふ笑顔で、不意に言葉を切つた。

公爵は微笑ながら、『貴女が若しわれ〳〵の愛するヴインツェンゲロオデの代りに公使であつたら、遮二無二普魯西王を說き伏せて了まつたでしように。貴女は實に雄辯だ。お茶を一杯頂けませんか』

『唯今。時に』と、女主人は又元のやうに落着て云ひ足した、『今晩は二人面白い人が見える筈になつて居ります、佛蘭西の大家のロオアン一族を通してモンモランシイ家と緣類になつて居る子爵ド・モントマアル。本當の歷つきとした脫走王黨者の一人なんです。それから、長老モリオ、彼の深い心の人をご存じですか。謁見を許されました人です。彼の人をご存じですか』

『えゝ、お目に掛れゝば非常に仕合せです』と、公爵は云つて、『それは左樣』と、其瞬間に不圖思ひ出したことかのやうに云ひ出したのだが、實際はその問題が自分の訪問の主要な目的で

あつたのだ、『皇太后陛下が男爵フウンケを維也納の一等書記に命じ度いといふ思召だといふのは事實ですかね。彼の男爵は私の見る所では何うも思はしい人で無いやうですが』

公爵ヴァシイリは、或る一派が皇后マリア・フェオドロヴナの勢力に依つてその男爵に得させやうと試みて居たその位置に自分の息子を就かせ度いと熱望して居たのだ。

アンナ・パアヴロヴナは殆ど眼を眠むるやうに爲た、自分ばかりで無く、誰であつても、皇后の思召が何うだなどとは決して解かるもので無いといふ意味を見せたのだ。

『男爵フウンケは皇太后陛下に陛下の御妹の手から推薦されたんです』と、アンナ・パアヴロヴナは佛蘭西語で、素氣無く、陰鬱な調子で云つた。アンナ・パアヴロヴナが皇后の事を話す時には何時でも、その顔に不意に陰鬱の陰を帶びた崇敬の、深い眞實の表情が表はれて來るのであつて、これが、この女が自分の高貴な保護者のことを憶ひ出させられる總ての場合の特徴であつた。アンナ・パアヴロヴナは、陛下から男爵フウンケは懇篤なお取り扱ひを給はつたと云つたが、其所で又陰鬱の陰が顔の面を通つた。

公爵は無頓着な沈默を守つた。アンナ・パアヴロヴナは、女、特に宮中で育つた女の特質である所の迅速さと巧妙で、公爵が、皇后に推薦された人に難癖を付けた云ひやうをする大膽さに就て、敢て公爵に懲戒の一擊を與へたのであつたが、それと同時に公爵を慰めた。『それは左樣と、お宅のお話を爲ようではありませんか』、斯う云ひ足して、『お嬢さんは、交際社會へお出ですつてから以來、われ〳〵のなかの、好い連中を全然熱中させてお了まひなさいましてすよ。お日樣のやうにお美くしいといふ評判なんですものねえ』

公爵は尊敬と感謝の徵に頭を下げた。

『私は屢く思ふのですが』、アンナ・パアヴロヴナは、少時默まつて居てから、公爵の傍へも少し近く寄つて、政治だの交際社會のことでは最早話は無くなつたが、此れからは一身上の打明け話を爲やうといふ意味を利かせるかのやうに、媚びるやうな笑顔を向けて、斯う追つ掛つて云つて、『世の中の廻り合せといふものは何うもヘンなものだと思ひますわ。何うして彼樣なお二人とも立派なお子さんをお授かりなすつたのでしようね、(私はお末のアナトオルさんを勘定に入れませんよ、彼の方は私嫌ひですからね』と、挿句のやうに、眉を揚げて、斷然と云つて)彼樣な二人の奇麗なお子さん、それで居て、貴下は眞個にそれを何とも思つてお居でなさらず無いのですもの、ですから、貴下はあの方たちの親の資格は無いのですよ』

で、アンナ・パアヴロヴナは熱心な笑顔を見せた。

『何うするものですか。ラヴァテルに尋いたら、私には愛兒心の衝動が缺けて居ると云ふでしようよ』、公爵は斯う云つた。

『最早冗談は止しましよう。眞面目なお話が爲たいのですよ。私は貴下の末の息子さんには辛抱が能き無くなつて居るのです、善うございますか。これは此所だけのお話ですがね、(此所で顏に例の陰鬱な表情が出て)皇后陛下の御前でも、皆ながそれを云ひ出して、貴下のことをお氣の毒がつて居つたんですよ』

公爵は何の返答も爲無かつた、けれども、アンナ・パアヴロヴナは言葉を止めて、公爵の答を待つて居る間意味ありげに彼を見守つた。公爵ヴァシイリは顏を顰めた。

『何うしろと云ふのですかね』と、到頭公爵が、聲を高くして、『ご存じの通り、私は親の力で能きる限り彼等の教育に手を盡したのです、けれども、彼等は兩方とも全馬鹿に育つて了つたのです。イポリイトは毒にならぬ馬鹿といふだけなのだが、アナトオルの方はそれとは全く反對の種類の馬鹿なのです。二人の相違はそれだけですわい』と、何時もよりは少し自然な活氣のある笑顏で云つたが、それと同時に、意外な野鄙な厭な表情を、口の周圍の小皺のなかで如何にも判然と漏らした。

『で、何うしてまア貴下のやうな方が子をお持ちなすつたのでしようねえ。貴下が親でさへ無かつたら、全く點の打ち所の無い方でしようのにねえ』と、アンナ・パアヴロヴナは悲しさうに眼を揚げながら、云つた。

『私は貴女の忠實な奴隸です、ですから、貴女にだけは打明けてお話が能きますがね。私の子供等は私の存在の障碍物ですなあ。此れが私の十字架ですわい。私は斯う自分で說明を付けて居るのです。何うするものですか』——

彼は言葉を止めて、身振りで、自分はその殘酷な運命に何處までも服從して居るといふことを表はした。アンナ・パアヴロヴナは考に沈んだ。

『貴下は彼の道樂息子さんにお嫁を當がつて見やうと思つたことはありませんか。世間では、老嬢は媒酌をしたがつて堪まら無いものだといふんですが、私は自分には未だ左樣な弱點が出來たとは思ひませんけれども、私の親戚で、父親と一緒では何うしても幸福に暮し兼ねる若い娘があるんですよ、公爵嬢ボルコンスキイと云ふんですがね』

公爵ヴァシイリは何とも答へ無かつた、けれども、頭の動き方で見ると、彼が世間漢の特質である考量と記憶の迅速で女主人の心添を一考して居ることは明白であつた。

『彼のアナトオルには年四萬掛るのですからなあ』と、彼は自分の考の苦しい流を抑へる事が明に能き無い樣子で云つた。彼は躊躇つたが、『この割合で行つたら、五年後は何うなることでしようね。親であることの利益たア先づ此樣なものです。金持なんですかね、その貴女の方の公爵嬢は』

『その娘の父親は金持ですが、嵩いんです。田舍で暮して居ます。ご存じでせう、先帝の御生前に退隱した彼の有名な公爵ボルコンスキイなんですわね「普魯西王」といふ綽名でした。なか〳〵悧巧な男ですけれども、隨分偏屈なんです、本當に扱ひ憎い人なんですよ。娘は全く可愛さうなんです。兄が一人あるんですが、それは此頃ルイズ・マイネンと結婚したんです。クッウゾフの幕僚なんですよ。今晩來ますでしよう』

『ねえ、親愛なアンネット』と、公爵は不意にその友達の手を擎つて、何ういふ理由か、それを下の方へ曲げながら、『この緣談を纏めてくださらんか、さうすれば、私は何時までも諭らずに貴女の最も忠實な奴隷で居ますからねえ。その娘は名家で金持でしよう――私の望にピッタリなんですわい』

公爵の身振りとして極く眼に立つその自由で自然な上品な樣子で、彼は女主人の手を持ち揚げて、それに接吻し、それから、接吻して後も、尙放さずに、自分の安樂椅子へ戻つて、傍へ顏を向けた。

『待つてお居でなさいよ』と、少時考へてから、アンナ・パアヴロヴナは云つた。『今晩直ぐルイズ（若ボルコンスキイの妻）に話しましよう、それで、纏まるかと思ひます。先づお宅のことから、私は老嬢の年季を入れ初めますわね』

（二）

アンナ・パアヴロヴナの客室はだん〳〵込みだした。彼得堡の最高の貴族社會が來たのだ、年齡だの性格だのに於ては皆それ〴〵非常に違つて居ながら、社會の同じ階級に皆屬して居るといふ點では誰れも異なら無い人々なのだ。公爵ヴァシイリの娘の美人のエレンが、大使の夜會へ父親と同行する爲にやつて來た。娘は舞踏支度で、帝室の徽章を着けて居た、彼得堡ぢうでの一番人を引き付ける女として知られた小さい若公爵夫人ボルコンスキイも來た。若夫人はその直ぐ前の冬結婚したのであつた、それで、今は妊娠なので、大きな會合には出無くなつたが、小さいのへは尙且出るのであつた。公爵ヴァシイリの息子の公爵イポリイトは、自分の手で

此頃交際社會へ紹介しつゝあつたモントマアルと一緒に來た。長老モリオ其他多勢も來た。

『伯母にお逢ひなさいましたか』とか、『伯母をご存じですか』とか、入つて來る客毎に、アンナ・パアヴロヴナは尋いて、そして、客が來だすと見るや否や次の部室から帆走り出た圖抜て大きい襟飾を着けた老女の傍へと大眞面目で彼等を導びいて、一人々々名を云つて紹介し、客から伯母へとつく〴〵と見渡して、それから、やがて、自分の場所へ戻るのであつた。

客は悉皆この誰も知らず又誰も知らうとして居無い餘計者の伯母に紹介される儀式を經なければならなかつた。アンナ・パアヴロヴナは同情的な滿足の陰鬱な嬉くつて堪まらなさうな表情で以つて、默つて人々の儀式的挨拶の交換に聞き入つて居た。

『伯母さん』は新來の人には誰にでも全く同じ言葉で、相手の人々の健康を尋ね、自分の健康を話し、それから、『神のお陰さまで、今日は餘程お宜しい』といふ皇后陛下の御健康を話した。この老女に捉まつた人々は誰れ彼れ無く皆、禮儀からこそ別に不相應な急ぎ方はし無かつたのであつたが、時が來るや否や、不愉快な義務を勤めあたげといふ、重荷を下したやうなホット安堵の知覺で遁げ出すのであつて、老女の傍に止まつて居るとか、その晩ぢう再とその近傍へ行くとか、いふことを爲無いやうに骨を折つた。

若公爵夫人ポルコンスキイは金刺繍のしてある天鵞絨の袋へ何か仕事を入れて持つて來た。殆ど見分けられ無いやうな柔毛で一寸陰を付けられたその可愛らしい小さい上唇は少し短かつた、けれども、それが齒を露はす時には一層愛嬌があり、若夫人がその唇を引き下げて、下唇の上に結ぶ時には尙一層愛嬌があつた。非常に人を引き付ける女の常である如く、この若夫人の唇が短く、口が半分開いて居るといふ難がその人の美人としての特徴で、そして尙其上の添加物であるやうに見えた。

健康と生に左樣まで滿ち、今やがて母親になるといふ希望でそれほど優雅になつて居るこの若い美くしい女を見るのは誰にも心持が好かつた。年取つた男だの、その齡が未だ來ぬのに最早氣むづかしくなつた偏くれた若者だのは、この夫人の前に出て、少時でも話した後では、夫人を見て居るうちに自分等も夫人と同じものになつたやうな氣がした。何んな人でも、この夫人と話を爲、その晴やかな笑顏、一言毎に見えるその艶の好い白い齒を見れば、彼はその日を何時もに無く愉快に送くつたといふ印象を以て去ることは確であつた。

若公爵夫人は仕事袋を下げながら、小刻みの速い足取りで進んで行き、卓子を廻つて通り越し、心持好く衣服を捌いて、銀の沸茶器の傍の長椅子に坐はつた、その樣子は、この夫人の爲

た事は悉皆夫人自身及び周圍の人々に對する慰さみの藝當であつたかのやうであつた。

『仕事を持つて來ましたの』と、袋を開けながら、佛蘭西語で一座全體に話し掛けて、云つた。『もし、アンネット、惡い戯謔をするもんぢやアありませんよ』と、女主人の方へ振り向いて、言葉を續け、『お手紙ぢやア一寸とした内々の夜會だといふのぢやア無かつたの、ご覽なさいよ、私の服裝の異式なことつたら』

で、夫人は、レエスで緣取つて、幅廣なリボンで高く帶を付けた、形の好い鼠色の長上着を人に見せるやうにと、腕を廣げた。

『構まうもんですかよ、リイズ』と、アンナ・バアヴロヴナは答へて、『貴女は何時でも何んな座でも一等の美人なんぢやありませんか』

『良人に捨られかけて居るんでしよう』と、若夫人は矢張佛蘭西語で、一人の將官に向いて、言葉を續けたが、『良人は死に行くんですわねえ。——ねえ、何故、此樣な厭な戰爭なんぞあるんでしようねえ』と、此度は、公爵ヴァシイリに向いて云ひ足し、その返答は待たずに、公爵の娘の美人のエレンに何か一寸としたことを云ふのであつた。

『この可愛い公爵夫人は何といふ愛嬌のある人だらう』と、公爵ヴァシイリは（佛蘭西語で）アンナ・バアヴロヴナに呟語いた。

若公爵夫人が來てから後直きに、大きい肥つた壯漢が入いつて來た。頭は短かく刈り詰てあり、眼鏡を掛け、粹な薄色の下袴で、太く大振りの緣飾のある肉桂色の上衣を着て居た。この肥つた壯漢は、カザリン時代の有名な貴族で今莫斯科で死にかゝつて居る伯爵ベズウホイの庶子であつた。この男は外國で教育を受け、今其所から歸つたばかりの所で、別にまだ何處へも奉職して居無い、今夜が交際社會への出初めなのだ。

アンナ・バアヴロヴナは、自分の家の客室の系圖で一番重く無い人に對して取つて置いてあつた頷きのやうな會釋で、その壯漢を迎へた。が、殆ど侮蔑と云つても宜かりさうなその會釋に拘らず、ピエールが入つて來た時のアンナ・バアヴロヴナの顏は、人が、大き過ぎる場外れの何でもを見る時に、感じるやうな心配と驚慌とを、表はして居た。

ピエールは、その部室のなかの誰もより背が高かつた位ではあつたが、アンナ・バアヴロヴナの驚慌は、その壯漢の、悧巧さうなと同時に遠慮勝ちな、そして、その部室の誰からも彼を區別した程に正直な、鋭い眼差しに依つて、起こされたのであつた。

『眞個に御親切ですわねえ、「ピエールさん」、哀れな病人の所へ好く逢ひに來てくだすつて』

と、自分が今彼を紹介しにと、連れて行く伯母の方から眼を移して心配さうに彼を見上げながら、アンナ・バアヴロヴナは云つた。

ピエールはちぎれ〳〵の言葉で何か返答を唸り出して、そして、會集全體の上に眼を漂はした。彼は小さい公爵夫人の方へ向けて、先方が自分の親しい友達でゞもあつたかのやうに、陽氣な浮かれ立つたやうな笑顔で頭を下げて、女主人の伯母の方へと導かれた。

アンナ・バアヴロヴナの心配は中つた、ピエールは伯母さんが皇后陛下の御健康の講釋を終はるのを待た無いで、その中途で伯母さんを見捨たのであつた。アンナ・バアヴロヴナは甚ども慌てゝ、何か云つて彼を引止めやうと爲た——

『長老モリオをご存じですか』と、尋いて、『極く面白い人なんですが』

『えゝ、彼の人の永久平和の策といふのを話に聞いたことがあります。至極面白いものですが、何うも實行は能きさうでありませんね』

『左樣お考へなんですか』、アンナ・バアヴロヴナは、何とか云は無ければならぬ場合なので、さう云つて、それから、再女主人としての義務に戻つた、が、ピエールは此度は前のとは全く反對の性質の失態を來した。前には、彼は老女に話を終らせずに置てきぼりを食はせたのであつて、此度は、他の婦人が彼の前を去らうとして居たのに、それを引き止めて、自分の話を聞かざるを得無いやうに爲たのであつた。

頭を下へ曲げ、脚を踏んばたかつて、彼が長老の策を空想だと考へるその理由をアンナ・バアヴロヴナに示めさうと爲だした。

『そのお話は直き唯今伺ひますよ』と、アンナ・バアヴロヴナは微笑みながら云つた。

で、禮儀正しい交際社會の掟を知ら無いこの壯漢を振り捨てゝ、アンナ・バアヴロヴナは再女主人としての義務に身を委ねて、談話の調子が弛みだした所があると見るや否や何處へでも直ぐ加勢に出る心構へで、絶えず聞耳を立てゝ見渡して居た。丁度、紡績所の持主が職工をそれぞれの位置に就かせてから、彼方此方と見廻りながら、止まつた紡錘があるとか、高い或はキイキイいふ音のする奴があるとかすれば、直ぐ其所へ行つて、それを止めるか、平調に戻らせるかするさういふ案配に、アンナ・バアヴロヴナは客室を其所此所と廻つて、默まつて居る一團だの、激し過ぎて話して居る連中だのへ行つては、一言か、又は、毫末とした話の方向の變させ方で、再び談話機關全體を故障の無い禮儀正しい運轉調子に戻すのであつた。

けれども、さういふ仕事に掛り切つて居る間も、女主人が始中終ピエールに對して特に心配

して居たことは、傍目にも明白であつた。女主人は、ピエールがモントマアルの周圍の一團の話を聞きに行き、それから、長老が論議を聞かせて居た連中に加はつたまでの間、心もと無さうに、樣子を見守つて居た。

外國で教育されたピエールには、このアンナ・バアヴロヴナの家の夜會が、露西亞の交際社會への彼れの初陣であつた。彼は、彼得堡の學問のある連中が總べて此所に集まつて居るのだと知つたので、玩具展覽會に入つた小兒のやうに、絶えず括目して氣を付けて居た。彼は益になる何か氣の利いた談話を聞き漏らしてはならぬと始終油斷を爲無かつた。此所に集まつた人人の顏の面の悠然とした上品な表情を見るまゝに、特に高尚な何物かを何時も期待せずには居られ無かつた。

彼はやがて長老モリオの居た所へ來て居た。其所の談話が面白さうに思もはれたので、其所に立つて、若い男は誰れも兎角好きな、自分の說を得意で持ち出すといふ機會の來るのを待ち受けた。

（三）

アンナ・バアヴロヴナの夜會は今酣であつた。何の方面も滑らかに故障無くブン〳〵轉つて居た。傍に、この華やかな會合には寧ろ適應はぬ可愛さうな人間の、涙で顏の痩れ切つた善い年齡の老婦人が坐はつて居るばかりの『伯母さん』は別として、客は三團に分かれた。一つの大抵男ばかりで成り立つて居るのでは、長老モリオがその中心であり、第二の團合では、公爵ヴァシイリの娘の美人エレンと、顏色のバット華やかな、けれども、年齡にしては肥り過ぎた可愛い小さい公爵夫人ボルコンスキイとの周圍に若い連中が集まつて居た。

第三のなかには、モントマアルとアンナ・バアヴロヴナが居た。

子爵は、華車な顏の道具立の、上品な擧動の如何にも人好きのする樣子の壯漢であつた。彼は明かに自分を高名者と認めて居たのだが、上品な育ちであつたので、自分が交はる連中が自分を引張り出して各自の利益に使ふまゝに溫順しく委せて居たのであつた。アンナ・バアヴロヴナが客への馳走として彼を引張り出したことは一目で明かであつた。何んな好い料理でも物の旨さうに無い庖厨で見たら食ふ氣にならぬが、それが好い料理人の手に掛かれば途方も無い珍味として味はるゝことがあると丁度同じ理屈で、その晩、アンナ・バアヴロヴナは客一同に最初には子爵を、次には長老モリオを、滅法な珍味として饗したのであつた。

モントマアルの一團では、直きにダンギアン公の虐殺が論せられだした。子爵は公は自分自身の寛恕の德の犧牲になつたのであることゝ、ボナバルトが惡意を持つたのには內密な二三の理由があることゝを主張した。

『あゝ、もし。それを私どもに話して聞かしてくださいましよ、子爵』と、アンナ・バアヴロヴナは浮かれ立つたやうになつて云つた、この『コンテエ・ヌウ・シュラ・ヴィコント』といふ佛蘭西語には何と無くルイ十五世の口調が籠つて居るやうに思つたのであつた。

子爵は承知の徵に頭を下げ、そして、上品な笑顏を見せた。アンナ・バアヴロヴナは子爵の周圍の連中をもつと前へ詰めさせて、その話を聞きに來るやうに皆を誘ひ寄せた。

『子爵は公とお近づきでしたんですよ』、アンナ・バアヴロヴナは客の一人に佛蘭西語で斯う耳打し、『子爵は非常にお話上手なんですの』と、今一人に云ひ、『上流の交際社會に馴れてお居での方は直ぐ分かりますね』と、第三の人に感嘆の調子で云つた、斯ういふ案配に、子爵は熱い大淺盤のなかの和蘭芹で飾られた 炙肉 のやうに、彼自身に取つて最も心持の好い得意な後光を背負されて客の前へ持ち出されたのであつた。

子爵は談話を丁度始めやうとして居た、微弱な徵笑が　　へを漂つた。

『此所へお出なさいよ、親愛なエレーヌ』と、少し隔たつて坐つて居た第二の團合の中心であつた可愛らしい公爵嬢に、アンナ・バアヴロヴナは云つた。

公爵嬢エレンは徵笑んだ、この部室へ入つて來た初めに浮べて居た、全く美くしい女に眞個に善く適應つた徵笑を顏に表はして、立ち上つた。菰蓼と苔で飾つた白い舞踏服を輕く引き摺り、白いキラ〳〵する肩と、艶々した多量の髮と、燦めく寶石とを見せて、傍へ寄つて通して呉れる人々の列の間を進んだ。特に誰をと云つて極まつた人を見るでは無く、坐中全體に向かつて笑顏を見せ、さながらに、その姿、肉置の好い肩、當時の流行の低く裁つた衣服から露き出しになつて居る美くしい胸や背、夜會の燦輝さを體現したやうなこれ等の總ての美くしさを見ることの特權を愛嬌好く客の各自に許すかのやうにして、エレンはアンナ・バアヴロヴナの傍まで辿り着いた。

エレンは餘まりに美くしかつたので、思はせ振りの裝態をする性質の女のやうな所は影さへ認められ無いばかりでは無く、尙その上に、反つてその反對に、謂はゞ、自分の申分の無い誰にも優つた處女の美くしさを氣耻かしい位に思つた程であつた。自分の美くしさの効果を減らさうと心では骨折りながらも、天然の美くしさは何うにも爲やうが無かつたのだ。

『まア美くしい人』といふ（佛蘭西語）が、エレンを見た坐中の誰の口からも出た。

子爵は、エレンが正面へ來て坐はり、その何時も絶えたことの無い微笑の燦輝さを彼の上に向けた瞬間に、何か全く異常な物に壓倒されたかのやうに、肩を縮めて眼を伏せた。

『奥樣、斯ういふ聽衆では私の話の方が太く負けます』、子爵は笑顔で頭を下げた。

若い公爵嬢は、裸出しの圓い腕を卓子に凭たせたが、子爵に返答として何か云は無ければならぬものだとは思はず無かつた。唯だ微笑んで待つた。子爵が話して居た間、ずつと通して、エレンは眞直に坐り續け、時々、卓子に推しつけるので形の變はつて見える自分の美くしいまるまるとした腕を一寸々々見たり、それよりも更に一層美くしい胸を見て金剛石の頸飾の位置を直したりして居た、唯一二度衣服の襞を延した、で、談話が非常に強く胸に徹へるやうな所へ來ると、アンナ・パアヴロヴナを見て、一寸との間女主人の顔にあつたと全く同じの表情が出たが、やがて再元の落着いた花やかな笑顔に戻るのであつた。

小さい公爵夫人ボルコンスキイも茶の卓子を離れて、エレンの後に續いた。

『一寸と待つてくださいましよ、仕事を持參で出かけますからね』と、調子を高くして云つて――『もし、何を左樣なに考がへ込んで居らつしゃ、と、公爵イポリイトに振り向いて、云ひ足し――『私の仕事袋を持つて來てくださいよ』

若い妻は、微笑んで、誰にも言葉を掛け、迅速に引移しを終はり、賑やかに體を整のへて、座に就いた。

『さアこれで樂々としましたわ』と、調子高に云ひ、子爵に談話を始るやうに賴んで、再自分の仕事に掛つた。公爵イポリイトは仕事袋を持つて來て、それから、若夫人の傍へ自分の椅子を置いて、それに坐はつた。

面白いイポリイトは、人が見て不思議がる程善く妹の美人エレンに似て居たが、更に不思議なのは、イポリイトが、其樣なに妹に似て居ながら、吃驚する程醜かつたことだ。顏の道具立は妹のと同じであつたのだが、妹の方は、今を盛りの若き生の花やかな嬉しさうな自ら滿足した何時も絶え無い莞爾さと、容姿の驚くべきクラシックな美くしさとで、顏全體が如何にも晴れ晴れとして居た。兄の方は、それとは反對で、顏は、同じではあつたが、白痴のやうな表情で曇らされ、何時も高慢に片意地さうに見え、そして、體軀が痩て弱々して居た。眼、鼻、口が、皆な心の不滿である狀態を漠然と示す何時も變ら無い顰面に、宛然、刻み付けられて了つたかのやうであつたと共に、腕や脚は何時とてもギゴチなささうな何うとかいふ態度を執つて居た。

『怪談ぢやあ無いの、えゝ、これは』と、彼は、公爵夫人の傍に坐はると、急いで眼鏡を掛けながら尋いた、さながらに、さういふ道具無しには一言も云ふことが能き無かつたかのやうに。

『何。いゝえ、貴下』と、驚かされた話手は、肩を縮めて答へた。

『怪談は大嫌ですからね』、イポリイトは斯う云ひ足したが、その言葉を云つて了つた後で、やつとその意味が自分に分かつたのであることは、彼の聲調で明らかであつた。

彼がさう云つた樣子が如何にも平氣なものであつたので、誰もその言葉が極く氣が利いたものなのか、極く馬鹿々々しいものなのか、何方とも極め兼ねたのであつた。彼は黑ずんだ綠の上衣で、彼が自分で『畏縮た女神の脚部』と名づけた薄色の半下袴で、靴足袋を出して、舞踏靴を穿いて居た。

子爵は、その當時世間に廣がつて居た逸話を、極く巧く話した、それは詰り、ダンギアン公はマドモアゼル・ジョルジュに逢ひに忍んで巴里へ行つたが、これもその同じ名高い女優に矢張り手を付けて居たナポレオンに其所で出逢つた、女優の家で公と落ち合つたナポレオンは、其時持病の癲癇が發して卒倒したので、全く公の手中に落ちて了つたのであつた、けれども、公はその機會に乘ずるのを控へた、而るに、ナポレオンの方は公のその寬恕に報ゆるに公に死を與へたといふのであつた。

この物語は善い面白いものであつた、戀敵同士が敵手を互にそれと悟つた場が殊に左樣であつた、そして、婦人たちは、見た所、感動した。

『まア面白かつたわねえ』と、アンナ・パアヴロヴナは云つて、小さい公爵夫人を、何うだといふ風で、見遣つた。

『面白かつたわ』と、小さい公爵夫人は、談話の面白さで縫ひ物の手を止められて了まつたといふことを見せやうとするかのやうに、仕事に刺した針を探がしながら、呟いた。

子爵は賞讃のこの沈默の貢が嬉しくつて、得意の笑顏で後を續けやうとした。けれども、丁度その刹那に、危險くつて堪まら無かつた壯漢に始終眼を離さずに居たアンナ・パアヴロヴナが、その壯漢と長老が餘まり聲高に、勢込み過ぎて話して居るのに氣が付いた、で、直ぐに危險になつて居た場所へ手を貸しにと急いだ。

實際、ピエールは政治上の平衡の話に長老を誘ひ出すのに成功したのであつた、で、長老は、見た所、壯漢の率直な熱烈な調子に興味を覺えて、得意な持論を餘蘊無く聞かせて居た。雙方とも餘まりに斟酌の無い熱中で話したり聞いたりして居たのだが、これがアンナ・パアヴロヴ

ナには氣に食は無かつた。

『何ういふ手段に依るかと仰しやるかな。――歐羅巴の平衡と國際法』、長老は斯う云つて居た『野蠻だといふ評判の露西亞のやうな强國に取つてこそ、歐羅巴の平衡を目的とする同盟の主位に於て私心無く斷乎として立つことは能きべきことでありますわい――それで、その國こそ世界を救ふでありましよう』

『何うしてその權力の平衡を來たさせるのですか』と、ピエールが問ひ始めやうとして居たけれども、恰かもその刹那にアンナ・パアヴロヴナが割つて入つた、で、ピエールに嚴かしさうな顏を一寸と向けて置いて、伊太利人の長老に、彼得堡の氣候を何う感ずるか尋いた。

伊太利人の顏は直ぐに變はつて、氣障な態とらしい和らかな表情になつた、女に話しをする時は、この男は何時も左樣のやうであつたのだ。

『御當地のお方のお才と御修養、殊に、私がお招きに預かる公際社會のご婦人のお有樣に殆ど魅せられて了まひましたでな、氣候のことなど考へる餘裕が未だ出來ませんのでな』、彼は斯う云つた。

アンナ・パアヴロヴナは、ピエールも長老も最早大丈夫と見極めたので、二人を自分の見張りの下に置き得るやうにと、一般の集團のなかへ伴れ込んだ。

丁度この時に、新たな人物が客室に現はれた。この新たな人物は、小さい公爵夫人の夫のアンドレエー・ボルコンスキイであつた。公爵ボルコンスキイは、强く引立つた嚴格な顏の道具立の、中脊のなか〳〵美くしい壯漢であつた。彼の眼の倦怠してヂレ切つたやうな表情から、チヤンと揃へたやうな落ち着た步調に至るまでの、彼のあらゆる樣子が、彼の小さい可愛らしい妻とは、ひどく目に立つて反象を呈して居た。彼は、見る所、部室のなかの誰でもと近付であるどころか、唯彼等の顏を見、聲を聞くのにさへ堪へられ無い程彼等にはつく〴〵厭き果てゝ居るのらしかつた。其所の總べてそれ等の顏のなかで、何うも彼の美くしい小さい妻の顏が一番彼をヂレさすものらしかつた。美くしい顏を太く醜くなるまで顰面にして彼は妻に背を向けて了まつた。アンナ・パアヴロヴナの手に接吻し、それから、半眼で一座をグルリと見渡した。

『では、いよ〳〵ご出征のお支度中ですか』と、アンナ・パアヴロヴナは尋いた。

『將軍クツゾオフが私を副官にと望んでくださつたです』

公爵は佛蘭西語で云つて、クツウゾフの名の終りの綴字に佛蘭西人のやうな音勢を付けた。

『で、ルイズは、奥さんは』

『田舍へ行けば宜しい』

『彼の美くしい奥さんをわれ〳〵から取りあげてお了まひなさるのは、貴下の罪になるぢやアありませんの』

『アンドレエー』と、他人に對して用ゐるやうなその同じ媚びた聲調で、小さい公爵夫人は夫に向いて調子を張り上げて聲を掛けて、『子爵のなすつたマドモアゼル・ジョルジュとボナパルトとの關係のお話は眞個に貴下に聞かせ度かつたわ』

公爵アンドレエーは顏を顰めて、他所を向いた、公爵が部室へ入つて來たその時から、その愉快さうな親切らしい眼を離さずに居たピエールは今その傍へ行つて、腕を摯つた。公爵アンドレエーは見向きもせずに、誰れか腕に觸る者があるといふことさへ五月蠅くつて堪まらぬと云つたやうな風に顏を顰めたのであつたが、やがて、ピエールの笑顏を見るといふと、公爵の顏が意外な親切な快ささうな微笑で明るくされた。

『何うしたんだ。――君まで派出な交際社會に入つたのかい』、彼は斯うピエールに云つた。

『君が來るだらうと思つて居たんだ』と、ピエールは答へて、『家へ行つて一緒に晩飯をやりましよう』と、物語を爲出して居た子爵の邪魔にならぬやうにと、耳語で云ひ足して、『何うです』

『いや、恥目だ』と、公爵アンドレエーは笑つて云つて、手を少し強く握つて、左樣いふことを尋く要の全く無いことをピエールに理解させやうと爲た。

まだ何か舌の尖頭まで出て來て居た事があつた、けれども、丁度その時に、公爵ヴァシイリとその娘が立ちあがつたので、二人の壯漢は通り路を開ける爲めに、傍へ退いた。

『御免を蒙ります、子爵』と、公爵ヴァシイリは云つて、立ちあがらうとするその佛蘭西人の袖を引いて、禮儀正しく、抑へるやうに坐はらせ、『生憎な大使館の夜會のお蔭で眞に面白いお話を中途でお邪魔致して、退席します――此樣な面白い夜會を中座するのは如何にも殘念ですが』と、彼は、アンナ・パウヴロヴナに云つた。

娘のエレンは如何にも形好く衣服の襞を挂げて、椅子の間を辿つたが、美くしい顏の面の微笑は尙一層燦輝かであつた。ピエールはその美くしい者が傍を通つて行くのを殆ど絶驚したやうな熱中した眼付で見送つた。

『なか〳〵美くしいね』と、公爵アンドレエーが云つた。

『實に』と、ピエールは云つた。

傍を通る時に、公爵ヴァシイリはピエールの腕を押さへて、アンナ・パアヴロヴナに振り向い

た。

『私の爲にこの熊を馴らしてください』、斯う云つて、『此男は最早一月から私の家に居るのだが、それで居つて、會へ出たのを見たのは、これが最初です。氣の利いた婦人方と交際ふほど若い男の益になることはありませんな』

（四）

アンナ・パアヴロヴナは微笑んで、自分の知つて居る所では、父側から公爵ヴァシイリと續合ひになつて居たピエールの爲に氣を付けやうと受け合つた。

『伯母さん』の傍に坐はつて居た老女は急に跳びあがつて、公爵ヴァシイリの後を入口まで隨いて行つた。その顏には前の興味の裝ひは全く無くなつた。親切さうな、涙で痩れた顏には唯だ心配した慌てたさまが表はれた。

『私のボオリスのことは、公爵、何ういふ案配でしようねえ』、と公爵に隨いて行きながら、云つて、（老女はボリイスといふ名を最初の綴字に音勢を置いて發音した）、『最早この上、彼得堡に居ることは能きませんですがねえ。彼の子に逢つたら何と云つたら宜しいでしよう』

公爵ヴァシイリの老女の話を聞いて居る樣子は不承々々で又殆ど無禮で、五月蠅さうでさへあつたけれども、老女はそれでも機嫌を取るやうな優しい笑顏を向けて、公爵の腕を押さへて、放さ無かつた。

『陛下に一言申し上げてくださるのは貴下には何でも無いことぢやアありませんか、さうすれば、彼の子は直ぐに近衞に入れますわね』と、老女は云ひ足した。

『私に能きるだけはやりますとも、公爵夫人』と、公爵ヴァシイリは答へて、『けれども、陛下に願ふのは辛らい、公爵ガリツインの手からクリミヤアンツォフに當つて貰つては何うです。それが巧妙なやり方でしようぜ』

老女は公爵夫人ヴルウベツコイで、露西亞の一番良い家柄の一人であつたのだが、貧乏であつたので、長いこと交際社會を遠ざかつて居て、昔の緣故を失つて了まつた。公爵夫人は今その一人息子を近衞に入れて貰らはうと都へ出て來たのであつた。で、唯だ公爵ヴァシイリに逢ふ爲ばかりに、アンナ・パアヴロヴナの案内に應じて夜會へ來、唯だその爲めばかりに、子爵の物語を聞いて居た。が、公爵の言葉でギョッとした、昔は美くしかつたその顏に當惑の色が表はれた、けれども、それは唯だ瞬間であつた。もう一度微笑んで、一層强く公爵ヴァシイリの

腕を握り締めた。

『ねえ、公爵』と、云つて、『從來貴下に願つた事と云つては何一つ有ませんし、此事限でこの先決して何も願ひはしませんよ、私は一度だつても父が貴下とお心安くしたからなどゝ申したことは無いぢやァございませんか。ですがねえ、此度ばかりは、後生ですから子息の爲めに此れだけ爲てやつてくださいましよ、一生ご恩に着ますからさ』、口疾に斯う云ひ足して、『腹をお立ちなすつちやァ厭ですよ、怒らずにこれだけ引き受けてくださいましよ。ガリツインには頼みました、でも、斷はられました。貴下昔のやうに親切にしてくださいよ』と、涙を眼に持ちながら、强て微笑まうとした。

『父上樣、後くれてよ』、戸口で待つて居た公爵嬢エレンは斯う云つて、クラシックな肩の上へ美くしい顏を振り向けた。

さて、社會に於ける勢力は、それが盡きて了まは無いやうに儉約し無ければならぬ資本なのだ。公爵ヴァシリイはこれを解して居た、誰彼無しに、自分に縋つて來る人の爲めにその都度他へ頼みに行つて居た日には、直きに自分自身のことを頼みに行くのが利か無くなつて了うといふ結論に一たび達してからは、彼は容易なことでは自分の勢力を働かせ無かつた。けれども、公爵夫人ヴルウベッコイのこの最後の哀願は、彼に良心の刺戟と云つたやうなものを感じさせた。夫人は彼が夫人の父親のお蔭で出世の門出をしたといふ事實を彼に憶ひ起こさせた。その上に、彼は、夫人の樣子から、夫人は、一たび或る考を頭に持つたが最期、思ひが通るまでは金輪際後へ退かず、若し反對されゝば、何處までも責付き、それでも先方が聽かなければ、何時喧嘩面で來るか知れぬといふ種類の女ども、殊に母親どもの一人なのだと見た。この後の考が彼に對して衡量を引つくり返した。

『親愛なアンナ・ミハアーイロヴナ』と、公爵は、何時もの心安さうな樣子ではありながら、聲は不機嫌な調子で、云つて、『貴女の望みを叶へるなァ私には到底能きん事ですな、けれども、私が何れ程貴女が好だか、又何れ程貴女の父親を尊敬して居るか、それを此際ご覽に入れる爲めに、その不可能なことをやつて見ます、ご子息は近衞に入らせて見せます、さァ確に受け合ひましたぞ。これで宜いですかな』

『あァ貴下、貴下は私どもの恩人でございますよ。私は貴下なら必然斯樣してくださると心頼にして居ましたんですわね——貴下がご親切な方なことを承知して居たんですもの』——公爵は一足踏み出した——『あ、一寸、もう二言……彼が入れましたら』——夫人は躊躇つた。

『貴下はミハアイル・イラアリオノヴイーチ・クツウゾフとご信友ですわねえ、あの方の副官にボオリスを取り持つてくださいませんか。さうすれば、眞個に有り難いんですがねえ、で、それから……』

公爵ヴァシイリは微笑んだ。

『それは受け合ひませんぞ。總司令官に任ぜられてからといふもの、クツウゾフが何れ程人に取り圍かれて居るか、それは〳〵一寸と想像が付かん位ですよ。彼の男の口づから、莫斯科のあらゆる婦人がその子息を皆副官に薦めて來たと聞いた程なんですぞ』

『いゝえ、何うしても受け合つてください。放しませんよ、貴下、私の信友、恩人……』

『父上樣』、美人エレンは同じ調子で、依然さう云つて、『後くれてよ』

『では、何れそのうち、左樣なら。ねえ？』

『では、明日陛下に申しあげてくださいますね？』

『相違無く、けれども、クツウゾフの方は約束能きまんぞ』

『いゝえ、でも、約束してください、約束してくださいよ、バシイル』と、アンナ・ミハアーイロヴナは媚びるやうな態澤山の笑顔で、云ひ張つた、この笑顔は、過ぎ去つた長い昔には好く適應つたものであつたかも知れぬが、今の痩れ切つた顔には如何にもうつら無かつた。夫人は何うも自分の年齢のことを忘れたらしかつた、で、自然に女らしい昔の術に信頼するのが癖になつて居たのであつた。が、公爵が行つて了まうや否や、顔が再先のやうに裝つた落着いた滿足の表情を執つた。子爵がまだその時物語を爲て居た集團の所へ返つて、目的が最早達して見れば、暇乞をすべき時の來るのが只管に待たれはするものゝ、聞き入つて居るやうな裝をして居たのであつた。

『けれども、ミランの聖油の總てこの最後の喜劇を貴下がたは何うお思ひですの』と、アンナ・パアヴロヴナは尋いて、『それに、ゼノアとルッカの人民が、帝座に就いて國民の臣禮を受けて居るモシュウ・ボナパルトの所へ臣禮を行なひに來るといふ喜劇は如何でしよう。あゝ、眞個に面白いぢやアありませんか。いゝえ、それは、笑ひ所ぢやアない、誰でも聞くと直ぐ氣がヘンになる位怪しから無いことなんですわ。全然世界ぢうが氣でも狂つて了まつたやうな世の中ね』

公爵アンドレーエは女主人の顔を凝乎と見詰めて、そして、微笑んだ。

『「神が此王冠を予に與へた、これに觸るゝものは覺悟せよ」』と、彼は、戴冠式の時のボナパルトの言葉を引いて云つた。『この言葉が云つた時の彼の姿は實に美しかつたといふことです』と、

云ひ足して、そして、その言葉を伊太利語で繰り返した、『ディオ・ミイ・ラ・ドナ、グヴイ・ア・キイ・ラ・トッカ』

『これぢやア』と、アンナ・パヴロヴナは追掛けて云つて、『もう〳〵餘まりといふものぢやアありませんか。帝王たちは危險此上無い彼の男を最早打捨てはお置きなされ無いのでしよう。』

『帝王？。露西亞は別なのですよ』と、子爵は、丁寧であるが絶望した聲調で云つて、『帝王と仰やいますか、夫人？。彼等帝王はルイ十八世の爲めに、女王の爲めに、マダム・エリザベットの爲めに、何を爲て呉れましたか。何にも爲て呉れ無い』、だん〳〵勢ひ込んで來て斯う云ひ足した。『それで、ご覽なさい、彼等はボルボン家を裏切つた罰を今思ひ知つて居るのです。帝王？。彼等は斯の簒奪者に國使を送くつて居りますせ』

侮蔑の意を強く斯う漏らして、子爵は再度身體の方向を變えた。眼鏡越しに子爵を始めから見詰めて居た公爵イポリイトは、其所まで來ると、不意にグルリと振向いて、小さい公爵夫人の方へ顏を曲げて、針を貸せと云ひ、そして、その針で卓子へコンデエ家の紋印を刻み付けて、夫人に見せ初めた。夫人の方から頼みでもしたかのやうに、彼は如何にも一生懸命な風付で、その紋印を説明した。『節杖、ギユウル框、空色のギユウルで緣を取つた――コンデエ家』と、

云つた。小さい公爵夫人は微笑みながら聞いて居た。

『ボナパルトがもう一年佛蘭西の王位に居らうものなら』、子爵は、その問題に自分程善く通曉して居るものは無いと自信して居るので、他人の說などには耳も假さずに、自分の考への續きばかりを逐つて行く人のやうな風で、斯う、又話しだして、『事態は全く飛んでも無い方へ進むことになりましよう。奸計と横暴で以つて、追放と處刑で以つて、佛蘭西の社會は――勿論上流社會を云ふのですが――全く永久に破壞されてしまひます、さうするといふと……』

子爵は肩を縮めて、絶望の手眞似を爲た。ピエールは何か云はうとした――この談話に對して興味を覺えたのだ――、けれども、ピエールに始終用心して居たアンナ・パアヴロヴナが、口を挾れた。

『アレクサアンドル皇帝陛下は』と、帝室のことを話す場合には何時でも出す例の感動的な調子で、アンナ・パアヴロヴナは云つて、『自分たちの政體を何う撰まうとも、それは佛蘭西國民自身の勝手に任すといふ思召を御發表遊ばされましたのです。それで、佛蘭西の全國民は、簒奪者の手から救はれゝば、必然正當な王樣の御手へ直ぐにお縋り申すやうになると私は思ひますわ』と、その脫走者で王黨の子爵に調子を合はせやうとして、云つた。

『必らず左樣とは云へますまいぜ』と、公爵アンドレエーは云つて、『子爵が事態が現下では進み過ぎて居ると考へられたのは全く御道理です。最早舊制度に戻るのは容易なことではありますまいよ』

『僕の聞いた所だけでは』と、ピエールは顏を赤くして、再度口を挾れて、『貴族の殆ど全體がボナパルトの方へ行つて了つたといふんです』

『それはボナパルト派の云つて居るとなんです』と、子爵はピエールの方を見ずに云つて、『現下では、佛蘭西の輿論が何處にあるといふのを突き留めるのは困難なことですからなア』

『ボナパルトが左樣云ひましたよ』と、皮肉な笑顏で公爵アンドレエーが云つた。彼が子爵を好か無かつたのは明白であつた、で、彼は子爵の方は見な無かつたけれども、その言葉が子爵に向けられたものであることは、それと看て取り得られた。

『予は榮譽の路を彼等に示したり、彼等はそを取るを肯せざりき』と、公爵は、少時默まつて居てから、又ナポレオンの言葉を引いて、『「予は予の應接室を彼等に對して開きたり、彼等はそれに群がり來れり」……、私は、彼が左樣云ひ得る權利を何れ程の度合まで持つて居るか知らんけれども』

『寸毫も持つて居りません』、子爵は斯うやり返して、『公の虐殺以來は、ナポレオンの最も熱心な加擔者どもさへナポレオンを大人物とは仰が無くなりました。尤も、或る徒輩は、新たに彼を大人物に爲たかも知れませんが』と、アンナ・パアヴロヴナに話し掛け、『公の虐殺で、天には一人殉難者が增え、地では一人大人物が減つた譯ですから』

アンナ・パアヴロヴナとその他の連中が子爵の言葉に感服の意を笑顏で示すか示さ無いうちに、ピエールが又口を挾れた、アンナ・パアヴロヴナは、ピエールが何か不遠慮なことを云ひはし無いかと虫が知らせて居は居ながら、此度は、彼を止めることが能き無かつた。

『ダンギャン公の處刑は』と、ピエールは云つて、『政治上の必要でした。で、その全責任を自分一身に負ふのに躊躇し無かつた所がナポレオンの腹の大きい證據だと僕は思ふ』

『まア。まア隨分』と、アンナ・パアヴロヴナは、慄然としたといふやうな調子の低聲で、呻いた。

『えゝ？。モシユウ・ピエール。貴下は暗殺をやるのが腹の大きいことだと云ふんですか』と、小さい公爵夫人が、微笑んで、仕事を身近く引き寄せながら、云つた。

『あゝ。おゝ』と、いろ〳〵な聲が叫んだ。

『面白い？』と、公爵イポリイトは英吉利語で云つて、膝を叩き初めた。子爵は唯だ肩を搖つたばかりであつた。

ピエールは嚴肅な顏付で、眼鏡越しに聞き人を見渡した。

『僕が左樣云ふのは』と、ピエールは我無しやらに、前からの論旨を逐つて、『斯ういふ理由なんです、ボルボン家の人々は、革命を恐がつて逃げて了つて、人民が無政府の狀態の餌食になるのを見返ら無かつたのだ。所で、革命の意義を解し、それを征服することが能きたのは唯ナポレオンあるのみであつた、だから、公共の利益の爲めには一人の生命を犧牲にするのに躊躇する譯には行か無かつた』

『この卓子へお出なさら無いか』と、アンナ・バアヴロヴナは云つた。が、ピエールは、それには返答を爲ずに、言葉を續けた。

『左樣』と、ます〳〵熱心になつて、云つて、『ナポレオンの偉大である所以は、彼が革命の波瀾の上に超越して居て、革命のさま〳〵な惡傾向を鎭壓し、善良な分子ばかりを保存した所にある――即ち、すべての公民の同權、言論、出版の自由がそれだ、この目的を達せんが爲めのみに彼は自ら進んで最高の權力を掌握したんです』

『左樣、彼が若し、その權力を用ゐて虐殺を行うやうなことを爲ずに、その權力を正統の君主に引渡したのであつたら』と、子爵は云つて、『それならば、私は彼を偉人と呼びましたでしよう』

『彼は左樣は能き無かつたんです。人民はボルボン家を振り捨てゝ了まひ度いばかりに彼にその權力を與へたんです、で、それは全く、人民が彼を偉人だと思つたからなんです。革命は壯大な事實なんだ』斯う論じ進んだピエールは、その我無しやらな不適切な喧嘩腰の論調で、彼自身のまだ非常に若いことゝ、彼が何でも思つて居ることを洗ひ浚ひ言つて了まひ度い心持なことを、我にもあらず洩らしたのであつた。

『革命と弑逆が壯大な事實ですつて？……その次は何でしよう？……まア、この卓子へお出なさいよ』と、アンナ・バアヴロヴナは重ねて云つた。

『民約』と、子爵はホヤ〳〵微笑ながら云つた。

『弑逆のことを云つて居るんぢやアありません。その思想の話なんです』

『掠奪、虐殺、及び弑逆の思想ですか』と、皮肉な聲が來た。

『それは極端です、勿論、けれども、革命の眞意義はさういふ物のなかにあるんぢや無い、

それは人間の權利だの、習俗的思想からの解放だの、人間の平等だのにあるんです、さういふ物に悉皆ナポレオンはその全効力を保たせるやうに爲たんです』

『自由と平等ですか』と、子爵は、いよ〳〵その壯漢の主張の愚劣であることを本氣に彼に見せてやらうと決心したかのやうに、忌々しげに云つて、『非常に音は大袈裟な言葉だが、意味は餘程昔から下落して居ります也。自由と平等を愛さ無い者が何處にあります。既に、われ〳〵の救世主基督が自由と平等を唱へられました。人間は革命以來前よりか寸毫でも幸福になりましたでしようか。イヤ、實際は、その反對です。われ〳〵は自由を欲した、けれども、ボナパルトが自由を壓し潰ぶして了まつたんです』

公爵アンドレエーは、微笑みながら、最初はピエールを見、次ぎには子爵を見、それから女主人を見た。

始めのうち少時は、アンナ・パアヴロヴナは、その交際上の熟練に拘はらず、ピエールの激越な調子に膽を冷した、けれども、子爵はピエールの不謹愼な言葉を存外平靜にあいしらつて居るのではあるし、又ピエールの言葉を押へ付けて了まうことは到底能きることでは無いと、見切つて了まつたので、アンナ・パアヴロヴナは、自分の全力を糾合して、その若い辯論家を攻撃しやうと、子爵に合體した。

『けれども、私の親愛なモシュウ・ピエール』と、アンナ・パアヴロヴナは云つて、『公――でも誰でも人間一人――罪の無い者を裁判も開かずに殺して了まうなんていふことの能きる偉人といふのは、何ういふんでしようね』

『私は伺ひ度いね』と、子爵は云つて、『革命暦第二月の十八日の事件を何う說明なさるかさ。彼れは詐欺では無いですか』

『彼れは、手品のやうな策略で、偉人の行爲らしい所は全然ありません』

『それから、負傷者を阿弗利加では殺しました』と、小さい公爵夫人はさう云つて、『眞個に慄然としますわ』。で、夫人は肩を縮めた。

『畢竟、彼は平民だ』と、公爵イポリイトが云つた。

ピエールは何れに答へて宜いか分から無くなつた。彼は皆を見渡して、微笑んだ。彼の微笑は他の皆の半微笑とは全く違つたものであつた。彼が微笑むといふと、不意に、乍ち、彼の生眞面目な、イヤ寧ろ不機嫌さうなと云つて宜い位の顏が、何處へか消えて無くなつて了まう、そして、小兒々々した、人の好さうな、寧ろ間の抜けた、人の勘辨を請ふやうな、全然異つた

顏が現はれた。此晩が彼との初對面であつた子爵は、この革命主義者は決してその口ほど恐ろしくは無いと看て取つた。誰も默まつて了まつた。

『何うしたつて、一度で悉皆に返答の能きつこがあるものかね』と、公爵アンドレエーは云つて、『その上に、政治家の行動を見る場合には、私人としての行爲と、將帥とか皇帝としての行爲とを區別して見無ければならん無い。私はまア左樣思ふんですが』

『左樣、左樣、勿論』と、旨く出て來て呉れた援助が嬉しくつて、ピエールは、斯う言葉を挾れた。

『誰でも認め無ければならんのは』と、公爵アンドレエーは疊み掛けて云つて、『アルコラの橋でのナポレオンと、ジャッファの病院で傳染病者と握手した時の彼とが、實に偉大であつたことなんだ、けれども……けれども、又辯護の能き憎い行爲はあるにはあります』

ピエールの狀態の行き詰まつたのを救はうとしたのであつたらしい公爵アンドレエーは、起ちあがつて、妻に合圖を爲た。

不意に、公爵イポリイトが起つた、そして、兩手を振つて皆を止め、手眞似で人々を坐はらせてから、斯う云ひだした——

『え、、私は今日莫斯科での話だといふのを聞きました、お慰みにそれをお話し度いんです。ご免ください、子爵、私は露西亞語で話さなければなりません。で無いと、話の味が無くなりますからね』

其所で、公爵イポリイトは、佛蘭西人が露西亞に一年居てから話すやうなチャンポンの露西亞語を使つて、話しだした。誰も彼も耳を傾けた、公爵イポリイトは、非常に熱心に、非常に手强く、その話に衆皆の注意を喚んだのであつた。

『莫斯科に或る貴婦人がある。で、その婦人は客嗇なんです。馬車の後に二人從僕を乘せ度いと思つたんです。而も極く脊の高い從僕を。先づさういふのがその夫人の望みでした。所で、その婦人はこれも極く脊の高い仲働を雇つて居ました。で、その夫人が云ひましたには……』

さう話して來て、公爵イポリイトは、止まつて、考へ込んだ、考を纏めるのに骨が折れるといふやうな樣子であつた。

『夫人は云ひました、左樣、夫人が云ひましたには、「お前」、その仲働にさう云つたんです、「他家をお訪ねするんだから、法被を着て、馬車の後へ乘つてお呉れ」』

其所へ來ると、公爵イポリイトは大きい聲で噴飯した、聞き人の誰もより先きに長いこと笑

つて居た、それは、彼に取つて餘まり嬉しく無い印象を人々の胸に起こさせたのであつた。それでも、アンナ・パアヴロヴナと、年の行つた婦人を加へた四五人は、笑顔を見せた。

『夫人は馬車で出た。不意に、烈しい風が吹き出した。娘は帽子を吹き飛ばされて了まひました、で、長い髪がだらりと下がりました ……』

此所で、彼は最早堪えて居られ無くなつた、で、烈しく笑ひだして、哄笑のなかで艱然と、『それで、世間ぢうが知つて了まつた ……』

それで、物語は終つた。誰にも何故彼がさういふ話を爲たのか、何故彼れが露西亞語で話さうと主張つたのか、その理由は解から無かつたが、それでも、アンナ・パアヴロヴナとその他の四五人は、モシュウ・ピエールの厭な不作法な激論をさう心持よく結んで了まつた公爵イポリイトの物慣れた交際振りに感服した。それから後は、談話は、その直ぐ前だの次の舞踏會のことや、芝居のことや、誰それに、何時逢つたとか、何處で逢つたとかいふことなどの、下ら無い一寸々々した談話に割れて了まつた。

（五）

この實に面白かつた夜會の禮をアンナ・パアヴロヴナに云つて、客は追々暇乞を爲始めた。

ピエールは、大きな赤い手で、不格好で、肥つて、途方も無く背が高かつた、彼は、他家の客室へ入つて行く時の世間並の作法を知ら無かつた上に、尙又其所を出る時の作法、即ち、別れ際に先方の特に氣に入るやうな何言かを何ういふ風に云ふものなのか、そんなことに至つては更に不案内であつた。その上に、彼はぼおッとして居た。起ち上がつて、自分のでは無い將官の羽毛の付いて居る三角帽子を手に當つた儘に取り上げて、それを持つて、その持主の將官から返して呉れと云はるゝまで、その羽毛を引張り〳〵して居た。が、彼が幾ら放心でも、客室に入る作法を知ら無いでも、其所で他人と話す時に不作法でも、そんな事は、彼の人の好い事と、率直と、遠慮勝な表情とで、十分償はれた。アンナ・パアヴロヴナは彼に振り向き、彼の失態を全く宥免することを表示する耶蘇教的勘忍の顏付で、彼に頷くやうに會釋して、『又近いうちにお目にかゝりましようね、でも、お說だけはお變えなさいましよ、ねえ、ピエールさん』

彼は、何とも返答せず、唯だ頭を下げて、皆に向けて又例の笑顏を見せた、それは宛然斯う云つて居るかのやうであつた、『說が有らうが無からうが、何うです、私は如何にも人の好い男ぢやアありませんか』、で、アンナ・パアヴロヴナは固より、其他の誰も彼も、我れ知らずさう

感じ無い譯には行か無かつた。公爵アンドレエーは廣室へ出て行つて、彼に外套を掛けやうとする從僕に肩を當てがつて、彼の妻の、又其所へ出て來て居た公爵イポリイトと喋べつて居るのを如何にも無關心な態度で聞き流して居た。公爵イポリイトは、最早直きに母にならうといふ小さい公爵夫人の傍に摺り付くやうに立つて、眼鏡越しに、夫人を眞ともにしげ〳〵見詰て居た。

『裡へお入りなさいよ、アンネット、風を引きますからさ』と、小さい公爵夫人は、アンナ・パアヴロヴナに暇乞を爲ながら、斯う云つた。『あれは承知して居てよ』と、夫人は低聲で附足した。

アンナ・パアヴロヴナは、間を見て、アナトオルと公爵夫人の義妹との間の自分が見込んだ緣談に就て、リザと何うやら斯うやら二言三言話したのであつた。

『貴女に凭るばかりですわ。ねえ』と、アンナ・パアヴロヴナも低聲で云つて、『あの子に手紙を遣つて、その上でお父樣が何うお思ひだか聞かしてくださいよ。では何づれ』。で、アンナ・パアヴロヴナは廣室から內へ引込んだ。

公爵イポリイトは小さい公爵夫人の所へ來て、摺れ〳〵になるまでに顏を下へ曲げて、咢語くやうに夫人に何か云ひ初めた。

一人は公爵夫人の、も一人は彼れ自身のと、さう二人の從僕が、肩掛と外套を持つて、主人二人の話し終るのを待つて立つて、自分たちには一向解から無い佛蘭西語の饒舌をば、云つて居ることは善く解かるのだが、それを知らせ度く無いのだと云つたやうな顏付で、聞いて居た。

公爵夫人は、例の笑顏で話し、笑ひながら聞いて居た。

『大使の方のへ行か無くつて仕合せでした』、公爵イポリイトは斯う云つて居た、『實に下ら無いんです……愉快な晩でしたなア、はゝ？　愉快だつた』

『舞踏會は大層面白からうといふ話だつたぢやアありませんか』と、小さい公爵夫人は、柔毛の生へた小さい唇をピク〳〵させながら答へて、『奇麗な婦人方は皆お出なさるつて』

『いゝや、決して其樣な事はありません、貴女がお出なさら無いんですもの、其樣なことはありません』と、公爵イポリイトは、如何にも嬉れしさうに笑つた、そして、從僕の手から肩掛を引奪くると同時に、從僕を脇へ押し退けて置て、それを小さい公爵夫人に着せ初めた。ぶきつちやうな爲めか、それとも、故意にか――誰にも何方だか解から無かつたが――彼は、肩掛が着さつた後でも、その若い女を抱き締めてでも居るかのやうに、長いこと手を離さ無かつた。

如何にも樣子好く、が、尙且微笑みながら、夫人は少し身を後退らせ、グルリと振り向いて、

夫を一寸と見た。公爵アンドレエーの眼は閉ぢて居た、如何にも草臥た樣子で、そして眠むさうであつた。

『最早宜いかね』と、彼は、妻の眼を避けて、尋いた。

公爵イポリイトは、最新流行形の踵まで下る外套を、大急で着て、裾に躓きながら、昇降段の方へと公爵夫人の後を追つた、從僕が手を貸して夫人を馬車に乘らせて居る所であつた。

『公爵夫人、何れそのうちに』と、舌も脚と共に縺れて、彼は云つた。

公爵夫人は長上衣を少したくし上げて、馬車の裡の闇に坐つた、夫は軍刀を整のへて居た、手助けを爲度がる公爵イポリイトは誰もの邪魔であつた。

『御免、貴下』と、公爵アンドレエーは、行く方に立塞がつて居た公爵イポリイトに、露西亞語で素氣無く、不愛想に云つた。

『待つてるせ、君、ピエール』前のと同じ聲が此度は暖かな親しげな調子で呼んだ。

馭者は馬を早足で出し、馬車は轟いて行つて了つた。公爵イポリイトは、短かいクッ〳〵といふ笑で噴飯した、彼は、その家まで送つて行く約束であつた子爵を、昇降段に立つて待つて居たのだ。

『おい、君、君の小さい公爵夫人はなか〳〵好い器量だね、なか〳〵好い器量だ』子爵は、イポリイトと一緒に馬車の裡に坐りながら、斯う云つて、『全く好い器量だ』彼は指の尖に接吻した。『そして、全く佛蘭西だ』

イポリイトは鼻嵐を吹いて、噴飯した。

『おい、君はあゝいふ一寸とした無邪氣なやり方で行く所は實に恐しい男だね』と、子爵は續けて、『あの亭主、王樣氣取りのあの小僧つこの將校が僕は可愛さうでなら無いね』

イポリイトは又噴飯した、そして、笑聲の眞中から、やう〳〵斯う云つた。

『でも、君は露西亞の婦人は佛蘭西のには到底敵は無いと云つたぢやァ無いか。彼等を生け捕るにやァ又秘訣があるさ』

ピエールは、第一番に行き着いたので、家内の者であるかのやうに、ヅン〳〵公爵アンドレエーの書齋へ行つて、直ぐと例の通り長椅子の上に横になつて、棚のなかで眼の行つた所に有り合はせた書籍（シイザアの征戰記であつた）を手に取つて、肱で身體を支へて、眞中頃を讀み始めた。

『マドモアゼル・シエーレルを甚くおどかしちやつたぢやァ無いか。今頃は餘つ程病氣になつ

て居ようぜ』と、小さい白い手を擦り合せながら書齋へ入つて來た公爵アンドレエーが云つた。

ピエールはごろりと寢返つて、重量で長椅子をギイ〳〵云はせ、公爵アンドレエーに熱心な顏を振り向け、微笑んで、手を振つた。

『あゝ、あの長老は面白かつたね、唯だ彼奴は考へ方が拙いだけなんだ……僕の考ぢやア、永久の平和は出來得ることなんだ、けれども、何うしてと云ふことは解から無い……何うしても權力の平衡では不可……』

公爵アンドレエーはさういふ抽象的な議論には氣が向か無い樣子であつた。

『人は、自分の考へ通りを何處でも云ふといふ譯に行か無いものだよ、君。それよりか、いよいよ身の振り方を何うとか極めたのかい、まア、それを聞かうぢや無いか。騎兵に入るかね、それとも、外交官かい』と、寸時默まつて居てから、公爵アンドレエーが尋いた。

ピエールは長椅子の上で脚を組み合はせて坐はつた。

『君、何うも未だ何うするのが宜いのか自分でも解ら無いんだよ。何方も氣が向か無いんだ』

『でも、何か知らに極め無きやア行けまい。君のお父樣がそれをお待ちぢやア無いか』

十歲の時に、ピエールは、或る長老を附添教師にして外國へ教育を受けに遣られ、二十歲に成るまで其所に居た。莫斯科へ歸つて來ると、父親はその長老に暇を遣つて、若者のピエールに斯う云つた、『さア、これから彼得堡へ行つて、世間を見て、それから、身の振り方を極めなさい。私は何でも承知する。これが公爵ヴァシイリへの手紙ぢや、これが金ぢや。何でも手紙で云つてよこすが宜い、私は何でも相談に乘るからな』。ピエールは最早此處三月仕事を探がして居るのだが、未だ何とも極め兼て居るのだ。公爵アンドレエーが、今ピエールに話したのは此の仕事の選擇であつた。ピエールは額を撫でた。

『だが、彼奴は共濟組合員なのに違ひ無い』、その晩逢つた長老のことを指して、彼は斯う云つた。

『其樣な下らん事は何うでも宜いぢや無いか』と、公爵アンドレエーは彼を岐路から引き戻して、『本氣な話を爲やうぢや無いか。近衞騎兵へ行つたかい』

『いゝや、未だ、だが、僕は感じたことがある、それを君に話し度いんだ。此度の戰爭はナポレオンに向つてやるんだらう。若し、これが自由の爲めの戰なら、僕にも解かることなんだから、夫れやア第一番に軍隊へ入るさ、けれども、世界で一番偉大な人に楯付いて、英吉利や、墺地利なんかの味方を爲るんぢやア――それは善く無いからなア』

公爵アンドレエーは、ピエールの小兒らしい言語に對して唯だ肩を縮めたばかりであつた。誰も其樣な馬鹿々々しい事に返答は能き無いのだといふかのやうな樣子であつた。が、實際はこの率直な疑問に對しては公爵アンドレエーが爲たのより外の返答を見出すのは困難であつた。『誰でもがそれ〴〵自分自身の確信の爲めに戰ふばかりであつたら、世の中に戰爭といふものは無くなるだらう』と、彼は云つた。

『それで、左樣なれば又非常に善いだらうぢやァ無いか』と、ピエールは云つた。

公爵アンドレエーは皮肉さうに微笑んだ。『多分それは善い事だらう、けれども、其樣なことには決して爲ら無いだらうよ……』

『所で、何の爲に君は戰爭に出て行くのかね』、ピエールは斯う尋いた。

『何の爲めつて？　僕は知らん。唯だ出無きやァならんからなんだ。それに、僕の出るのはね……』、彼は止まつた。『僕の出るのはね、僕が此所でやつて居る生活、この生活が――僕の趣味に合は無いからなんだ』

（六）

次の室で女の衣服の戰ぎが聞えた。公爵アンドレエーは自分を覺醒させるかのやうに、はつとした、そして、彼の顏はアンナ・パアヴロヴナの客室でのやうな表情になつた。ピエールは長椅子の下へ脚を落とした。公爵夫人が入つて來た。夫人は長上衣を脱いで了つて、それと同じやうに鮮やかな派出な室內衣を着て居た。公爵アンドレエーは起つて、丁寧に夫人に對して椅子を据えた。

『何故でしよう、私不思議でなら無いわ』と、忙がしさうにそゝくさと低い椅子に腰を落ち着けながら、例の如く佛蘭西語で云ひ初めて、『何だつてアンネットが結婚し無いで居るんでしよう。彼の人に結婚し無いなんて貴下方殿方は何て間抜なんでしようね。御免なさいましよ、でも、貴下方には眞個に女を見る眼が寸毫も無いことよ。何て議論家なんでしよう、貴下は、ピエールさん』

『今も尙且、貴下の旦那と議論を爲て居る所なんです、僕にやァ、何だつて貴下の旦那が戰爭に出たがるのか、それが解かりません』、ピエールは、若い女に對する若い男の態度には極く普通な氣取た所などは少しも無しに、公爵夫人に話し掛けて、斯う云つた。

公爵夫人は戰慄を爲た。明かに、ピエールの言語は急所に觸れた。

『えゝ、それは私の云つて居る所なんです』と、夫人は云つて、『私には解かりませんわ、何だつて男は戰爭無しに暮らせ無いんでしようか、全く解かりませんわ。われ〳〵女がさういふ事を好か無いのは何ういふものなんでしようね？　さア、貴下裁判してくださいましよ。私は良人が伯父の副官で、眞個に立派な位地に居ることを、始終良人に左樣云つて居るんですよ。良人は何處でも善く知られて居ります、誰にでも認められて居るんです。先日もアブラアキシン家で、私は、或る婦人が、「では、あれが名高い公爵アンドレエーなの？　まア」と、尋いて居るのを聞いたんです』と、夫人は笑つた。『良人は何處でも左樣いふ風に扱かはれるのよ。副官長になるのは眞個に譯け無しなんですわ。陛下が良人に眞個に御懇篤な仰せがあつたぢやア有りませんの。アンネットと私とで以つてさうするのは眞個に譯の無い事だと何時も云ひ〳〵してるんですわ。貴下何う思つて？』

ピエールは公爵アンドレエーを見た、友はその問題を好ま無いと見て取つたので、返答を爲無かつた。

『何時出發するね』と、彼は尋いた。

『あゝ、その出發のことなんぞ私に云つては厭よ、それを云つては厭ですよ。他人の話すのを聞くのだつて堪まら無いんですよ』、公爵夫人は、夜會でイポリイトと話したと丁度同じやうな浮はついた剽輕な調子、ピエールが家族の一人であつたやうな夫人自身の家の團欒には全然適合は無い調子で、然樣云つた。『私に取つて眞個に貴い關係が悉皆切れて了まうに違ひ無いと思はれた今晩……それに、ねえ、アンドレエー？』、夫人は夫に意味ありげな眴を爲た。『私心配だわ、私心配だわ』と、肩をビク〳〵させながら、呟いた。夫は、その間に自分とピエールの外に人がも一人居るのに初めて氣が付いて驚いたかのやうに夫人を見た、そして、冷々とした會釋で、妻に尋ねの言語を掛けた。

『何が心配なのかね、リザ？。私には解から無いんだが』

『男つてものは皆何て斯う自我主義者なんでしようね、男は皆、皆自我主義者なんだわ。自分一人の考から、自分一人の氣まぐれから、何の理由は無しに、良人は私を振り捨てゝ、田舍へ私一人閉ぢ込めて了うんですよ』

『父上樣と妹と一緒なんだぜ、おい』と、公爵アンドレエーは平然と云つた。

『お友達が無いんですもの、尙且同なじことよ……それで、私の心配は寸毫も察してくださら無いんだもの』。夫人の調子は今喧嘩腰になつた、上唇が上がつて、何時もの嬉しさうな表

情では無く、野生の獸、まア栗鼠のやうな顏付に爲つた。夫人は、ピエールの居る前で、自分のことを云ふのは禮儀で無いと感じたかのやうに、言葉を止めて了つた、その癖眞個の所はピエールが居るからこそ、其樣なことを云ひ出すやうになつたのだ。

『何が心配なのか、尙且私には解からんね』と、公爵アンドレエーは、妻の顏から眼を離さずに、考へ〳〵云つた。公爵夫人は、はつと赤くなつて、爲方無ささうに手を振つた。

『いゝえ、アンドレエー、貴下はまア變つたことねえ、まア變つちまつたことねえ』

『醫者がお前は成るべく早く眠むやうにしろと云つたちやア無いか』と、公爵アンドレエーは云つて、『お前最早眠る時間だぜ』

公爵夫人は何にも云は無かつた、乍ち柔毛のある短い唇が慄るへだした、公爵アンドレエーは起ち上がつて、肩を搖りながら、部室のなかを行つたり來たりした。

ピエールは如何にも無邪氣な取り繕はぬ驚き顏で、眼鏡越しに、公爵から夫人へと見渡した、そして、自分も起ち上がらうとするかのやうに、そわ〳〵と身動をさせたが、やがて、思ひ直した。

『ピエールさんが居たつて、私何でも無いことよ』と、小さい公爵夫人は不意に云つた、可愛らしい顏がべそを掻くやうな澁面に歪められた、『私は、アンドレエー、最早餘つ程前から貴下に、貴下が此樣なに變はつちまつた譯を聞かう〳〵と思つて居たんですわ。私が貴下に何んなことを爲ました？　貴下は戰爭に出てお了まひなさる、私のことなんか何とも思つてくださらないのね。何故なんですよ』

『リザ』と、公爵アンドレエーはさう云つただけであつた、が、その一語のうちには、賴みもあれば、威嚇もあり、尙それよりも强く、夫人はさういふことを言つたのを自分で後悔する時が必然來るぞと言ひ聞かせる心持が、明らかに含まれて居た、けれども、夫人は口ばやに言葉を續けた。

『貴下は私を病人か小兒かなんぞのやうに扱うのねえ。私は全然解かつてよ。貴下は六月前は斯樣ぢやア無かつたのに』

『リザ、賴むから默まつて吳れ』と、公爵アンドレエーは、更に强く云つた。

ピエールはこの談話のうちに段々落着て居られ無くなつて、やがて、起ち上がつて、公爵夫人の傍へ行つた。彼は夫人の涙を見ては堪らへ切れ無くなつた、自分までも泣き度くなつたのであつた。

『左樣心配し無いで居らつしやい、公爵夫人。貴女の取越苦勞なんだ、それは……大丈夫、私自身も其樣な心持の爲たことも有ります……それは……で……あゝ、御免なさい、他人が出る幕ぢやア無かつた……あゝ、心配しちやアいけません……左樣なら』

公爵アンドレエーはピエールの手を捉まへて、止めた。

『いや、もう少時居て呉れ給へ、ピエール。公爵夫人は親切なんだ、僕が君と愉快に一晩送くるのを邪魔しやうなどゝ決して思ひはし無いよ』

『あゝ、自分のことばかり考へて居るのねえ』と、口惜し涙を堰き止めやうとせずに、公爵夫人は、聲を高くして云つた。

『リザ』と、公爵アンドレエーは、最早勘忍し切れ無くなつたことを見せるやうな高さに聲を揚げて、素氣無く云つた。

乍ち、公爵夫人の可愛らしい小さい顔に今まで出て居た怒つた栗鼠のやうな表情が、同情を喚び起すやうな恐怖の人を引き付ける顔付に變はつた。可愛らしい眼で眉の下から夫の顔を盗むやうに見た夫人の顔には、犬が、惡るい事を爲たと自分でも思つて後尾をおづ〳〵と然かし速くチコロ〳〵振る時のやうな臆病な詫びるやうな樣子が出た。

『まア。まア』と、公爵夫人は呟いた、そして、片手で長上衣を挂げて、夫の所へ行つて、額に接吻した。

『お休み、リザ』と、公爵アンドレエーは云つて、起ち上り、宛然他人にでも爲るかのやうに、丁寧に夫人の手に接吻した。

* * * * *

友同士は默つて居た。何方からも話を始め無かつた。ピエールは公爵アンドレエーを見た。公爵アンドレエーは小さい手で額を擦すつた。

『行つて、晩食にしやう』と、公爵は溜息して云つて、起ち上つて、そして、戸口へと行つた。

二人は、新しい雅致のある道具を十分に備へてある食堂へ行つた。口拭布から銀器、陶器、硝子器などに至るあらゆる物が、新婚の夫婦の家の道具に見られる新らしさのみの特異な外觀を表はして居た。晩食の眞中で、公爵アンドレエーは、肱に身を支へて、長いこと何物かを心に持て居て、急にそれを口へ出す決心を爲た人のやうな態で、ピエールがその友達の樣子ではそれ迄に決して見たことも無いやうな神經的な焦ら立つた表情で話し始めた。

『決して、決して結婚しちやアいかんぜ、君、僕の忠告はこれだ、君がやることの能きることを悉皆爲悉して了まつたといふことを事實上で確に認めるまでは、そして又、君が擇んだ女を愛し無くなるまでは、君がその女を瞭然と見ることが能きるまでは、決して結婚してはいかん、さうで無いと、取り返しの付か無い殘酷な失策をやるものなんだ。年を取つて了まつて、何の役にも立た無くなつてから結婚し給へ……。さうで無いと、君のなかにある善い高尚なものは悉皆殘らず駄目に爲つて了まうだらう。さういふ物が悉皆下ら無い事の爲にチビ〳〵使ひ耗されて無くなつて了まうだらう。左樣なんだ、左樣なんだ、左樣なんだ。左樣なに叱驚して僕の顏を見無くつても宜いよ。君が前途に何か希望を持つて居るとすれば、君に取つては最早萬事休したことを一歩毎に君は感じるだらう、其所では君が宮中の從僕や愚物なんかと同列に立た無ければならんやうな客室の外は、何處へ向ふ道も塞がつて了つたことを感じるだらう。……で、それは何故なんだ』……公爵は力强い手の振り方を爲た。

ピエールは眼鏡を外づした、すると、顏が變つて、又一層人の好さゝうに見えたのだが、彼は叱驚した態で、友の顏を見た。『妻は』と、公爵アンドレエーは重ねて云つた、『非常に善い女なんだ。體面を潰ぶされる心配の斷じて無い、世間にさうザラには無い女の一人なんだ、けれども、あゝ、結婚し無い昔に歸れるなら何んな犧牲だつて僕は拂はうと思ふね。僕が斯樣なことを話すのは君が最初で又君つ限りなんだ、僕は君が好きなんだからね』

斯う云つた時の公爵アンドレエーは、アンナ・パアヴロヴナの客室で安樂椅子にダラリと掛けて、眼を半眠りにして、齒の間から濾し出すやうに佛蘭西語を使かつたボルコンスキイとは尙一層別な人に見えた。干涸びた顏の筋肉が悉く神經的な興奮でピリ〳〵震へた、前には光も無く生命も無いやうであつた眼が、今は十分な生々した光で煌めいた。平常は勢の無い男だけに、斯ういふ病的に燥ら立つた場合には並外れて勢が烈しく見えるのであるらしかつた。

『何故僕が斯う云ふのか、それは君には解からんだらう』と、彼は續けて、『おい、人一生の物話全體がその裡に籠つて居るんだぜ。君はボナパルトと彼の功業の話を爲たが』、彼は斯う云つた、けれども、ピエールはボナパルトのことは何も云ひはし無かつたのだ、『君はボナパルトのことを云つたが、彼の目的を眼がけて眞直に一歩々々向上の路をたどつて居た時のボナパルトは何の羈絆も持つて居無かつた、彼の眼中には目的の外何物も無かつた、で、彼はその目的に達したんだ。けれども、女で縛ばられて見給へ、宛然鏈で繫がれた囚人のやうに、君の自由は悉皆無くなる。君の持つて居るあらゆる希望、あらゆる力は君の邪魔になつて、後悔で君を苛

責むばかりなんだ。客室、無駄話、舞踏、虚榮、輕佻――それが僕の脱出することの能き無い魔法の圈なんだ。僕は今戰爭に出て行かうと爲て居る、それは未曾有の大戰なんだ、それで、僕はといふと、何にも知ら無いんだ、僕は何の役にも立た無い人間なんだ。僕は極く人附の好いと同時に皮肉なんだ』公爵アンドレエーは斯う言葉を續け、『で、アンナ・パアヴロヴナの所では、誰も彼も僕の話を面白がるんだ。所で、僕の妻の生活には缺くことの能き無いこの空馬鹿どもの交際社會、それから、彼樣いふ所謂る交際社會の女どもが何んなものだか知つて見給へ、それこそ實に、で、尤も、それは女は大抵さうなんだがね。僕の親父の考は道理だ。自我主義、虚榮、愚劣、何事に於てもこせ〳〵して居ること――それが、正體の表はれる時の女なんだ。交際社會での彼等を見て、人は彼等には何物かがあるやうな氣がする、けれども、彼等には何も無い、何も無い、何も無いんだ。いや、結婚しちやアいかん、君、結婚しちやアいかんよ』公爵アンドレエーは斯う結論した。

『僕は無茶だと思ふね』と、ピエールは云つて、『君、君が自分を失敗だと思ひ、君の生涯が破船だと思ふのは。君は何でも持つて居るし、君は將來に於てもあらゆる物を持つて居るぢやア無いか。それで居て、君は……』

ピエールは『何故君は』とは云は無かつた、が、彼の調子は、彼が何れ程その友を重んじて居たか、その友の將來に就て何れ程期待して居たかを表はした。

『何うして彼樣なことが云へるのだらう』、ピエールは斯う思つた。

ピエールは公爵アンドレエーを何の點に於ても完全である人の模範だと思つて居た、それは、公爵アンドレエーが、ピエールに缺けて居たさま〳〵な長所の丁度その結合、意志の力とでも云つたら先づ近い意味にならうかと思はれるさういふ結合を、最高の度合に於て持つて居たからであつた。ピエールは何時も、何んな種類の人間に對しても何處までも平然として應對する公爵アンドレエーの能力、その異常な記憶力、その該博な知識、(公爵は、何でも讀んで居た、何でも知つて居た、何物に就ても何等かの意見を持つて居た)それから、取り分け、仕事や學問に對する公爵の力量に驚嘆して居た。若し、ピエールにして、空想に耽つたり、哲理を持ち出し勝であつたりする(ピエール自身は左樣いふことが極く好きであつた)さういふ力が公爵アンドレエーに缺けて居ることに度々氣が付いたにした所で、彼はそれを缺點とはせずに、反つて强所と思つて居た。極く暖かな、友情の厚い、率直な間柄でも、丁度、車輪を滑らかに廻はらせるには油がいるやうに、世辭か、賞讃かがいるものなのだ。

『僕は萬事休した人間なんだ』と、公爵アンドレエーは云つて、『自分のことを何故云ふんだ。君のことを話さうぢや無いか』、彼は、一寸と默まつて居た後で、自ら慰さめたその考に對して微笑みながら、斯う云つた。その微笑は直ぐにピエールの顏から反射した。

『いや、僕のことで話すことが何があるものか』と、呑氣な、嬉しさうな微笑に顏を緩るませながら、ピエールは云つた。『僕は何だ。私生兒なんだ』。で、彼は乍ち顏を眞赤にした。これを云ふのが彼に取つては非常に思ひ切つたことであつたらしかつた。『名も無ければ、財產も無し……。で、畢竟、實際……』。彼は云ひ切つて了まは無かつた。『その代り、僕は自由なんだ、それで、滿足して居る。唯だ、何をやり出したものなのか寸毫も分から無いんだ。本氣に君の意見を聞いて見度たかつたんだ』

公爵アンドレエーは親切な眼付でピエールを見た。が、その眼付は親切で親しげではありながら、それでも尙、公爵自身がピエールより優勝な位地に居るといふ自覺がその眼のうちに籠もつて居た。

『君はわれ〳〵の交際社會ぢうでの唯だ一人の生きた人間なんだから全くその爲に、僕の好きな人なんだ。君は仕合せだ。君の氣の向いたことを何でも擇み給へ、何れも同なじなんだ。君は何時でも大丈夫だらう、けれども、こゝに一つ面白く無い事がある、クラアギンの連中と一緒になつて今のやうな生活をやることは廢しちまひ給へ。君に取つて決して善いことぢやア無いよ、彼樣いふ放埒な生活、散財、なぞは悉皆……』

『爲方が無からうぢや無いか、ねえ君』と、ピエールは肩を搖つて、『女、ねえ君、女なんだ』

『解からんね』と、アンドレエーは答へた。『身分のある婦人、それは別なんだ、けれども、クラアギンの女、女と酒、僕には何うも解から無いなア』

ピエールは公爵ヴァシイリ・クラアギンの家に宿まつて居た、で、其所の息子のアナトオル、即ち、締まらせる爲めに公爵アンドレエーの妹を配せやうといふ話の持ちあがつて居た息子の放埒な生活にピエールも誘ひ込まれて居たのであつた。

『ねえ、君』と、旨い考が思ひ掛け無く心に浮かんだかのやうに、ピエールは云つて、『眞實なんだがね、僕は、最早餘程前から左樣考へて居たんだ。今のやうな生活を爲て居たんぢやア、僕は何の決心も能きず、又物をチャンと考へることも能き無いんだ。頭は痛む、錢は無くなつて了まうんだ。奴今夜僕を誘つたんだ、だが、僕は斷じて行かない』

『行くことを思ひ切ることを君の名譽に掛けて誓つて呉れ給へ』

『名譽に掛けて誓つた』

（七）

ピエールが友の家を出たのは、一時を過ぎて居た。雲の無い夜、彼得堡の特色である夏の夜であつた。ピエールは家へ歸る積りで、借馬車に乘つた。家へ近くなればなる程、夕方か朝早くかと云つた方が宜い位の此樣な夜寢床へ入いることは到底能き無いといふ氣がまする〳〵募るのであつた。人の居無い街路をずつと遠くまで見渡せるだけの明るさであつた。路々、ピエールは、何時もの賭博を爲る連中が悉皆その晩若クラアギンの家へ揃ふ筈であつたことを憶ひ出した、其所では、賭博がしまうと、大抵何時でも飲み競が始まつて、その果はピエールの好きな慰みの一つまで行つて了まうのであつた。

『クラアギンの所へ行つたら面白からうなア』と、彼は思つた。が、直ぐに、最早決して行か無いと公爵アンドレエーに約束したことを憶ひ出した。

けれども、所謂る弱い品性の人間の常で、彼は直きに、殆ど習慣になつて了まつて居た左樣いふ放埒の生活をもう唯つた一遍味はひ度いといふ居ても立つても居られ無いやうな熱烈な欲望に打ち勝たれて了まつて、到頭行かうと決心した。それに、彼は乍ら斯ういふことが胸に浮んで來た、それは、彼はアンドレエーに約束する前に公爵アナトオルに行くといふ約束を爲たのだから、アンドレエーとの約束は無効のものだといふのであつた。果は、彼は、總べて左樣いふ種類の約束は單に關係的の性質のもので、動かし難い意義といふやうなものを決して持つて居る譯では無く、更に又、明日になつたら、自分が死ぬかも知れ無いとか、或は、名譽と不名譽との間の區別が無くなつて了まうかも知れ無いといふことなどを考に入れゝば、殊に、左樣なのだと思ひ廻ぐらした、一體ピエールには斯ういふ考が度々浮んで來て、それが爲に、彼の決心や所期などが悉皆全然打ち消されて了まうのであつた。彼はアナトオルの宿へと向かつた。

アナトオルの住んで居た近衞騎兵の兵營のなかの大きい家の昇降段まで乘り付けて、ピエールは、燈光の附いて居た昇降段から階段を駈けあがり、開いて居た戸口から入いつて行つた。控へ室には誰も居無かつた、空き壜、外套、外靴などが幾つもゴチャ〳〵に横たはつて居た、酒類の強い香がして居た、遠くの方で話し聲と叫聲が聞えた。

骨牌の勝負も、晩食も終まつたのだが、連中は未だ別れ無かつた。ピエールは擲り付けるや

理性の男、

うに外套を脱ぎ捨てゝ、取つ着の部室へ入いつた、其所には、晩食の殘物があつて、一人の從僕が、誰も見ては居無いと思つて、竊然半分飲みさしの杯を飲み干して居た、三番目の部室では大笑ひの聲、喚めいて居る聞き慣れた聲々、熊の唸る聲がして居た。若い男が八人開いた窓の所で事ありげな顔で集まつて居た。もう三人は熊の子にからかつて居て、そのうちの一人が鎖でそれを引摺つて他の者を威かして居た。

『俺はスチイヴンスに百賭けるぞ』と、一人が叫んだ。

『何にもつかまら無いやうにさせ無くつちやア』と、も一人が喚いた。

『俺はドロオホフの方だ』と、又今一人が叫んだ。『賭を始めろ、クラアギン』

『おい、ミシカを打捨れよ、賭をやりだしたんだから』

『一遍にだぞ、で無きやア賭は無効になるんだぞ』と、又一人が叫んだ。

『ヤコフ、壜を呉れ、おいヤコフ』と、アナトオル自身が叫んだ、背の高い奇麗な男で、胸の所で開けた薄い襯衣一枚で、部室の中央に立つて居た。『待て、諸君。ペツルウシヤが來た、俺の好きな』と、彼はピエールに振り向いた。

酔拂ひの喚きのなかで素面のやうに見えるので殊に眼に付く中背の、鋭い碧い眼の男が、窓から叫んだ、『此所へ來いよ。俺が賭の説明を爲てやるから』。これがドロオホフであつた、セメノフ聯隊の將校で、賭博と決鬪が上手なので名高く、今はアナトオルと同じ家に居るのであつた。ピエールは莞爾して、面白さうに四邊を見廻した。

『解から無いね。一體何ういふんだい』

『少時待て、まだ酔つて居無い。壜を此所へ』と、アナトオルは云つた、そして、卓子から杯を取つて、ピエールの所へ行つた。

『何より先きに、飲ま無きやアいかん』

ピエールは、又窓の所へ集つて來て二人の談話を聞いて居た酔漢連中を眉の下から見、彼等の話を聞きながら、續けざまに杯を重ねた。アナトオルはピエールの杯に酒を注ぎ續け、そして、ドロオホフが其所に宿まつて居た英吉利の海軍士官のスチイヴンスとの賭で、三階の窓に腰掛け、兩脚とも外へぶら下げたまゝで、ラムを一壜飲むのだと、ピエールに話して聞かせた。

『さア、これで一壜おつもりだ』と、アナトオルはピエールに最後の杯を突き付けながら、『飲んぢまは無ければ、放さんぞ』

『いや、最早いらん』と、アナトオルを突き退けて、ピエールは窓の所へ行つた。

ドロオホフは、英吉利人の手を捉まへて、重にアナトオルとピエールに話し掛けながら、賭の條件を瞭然と説明して居た。

ドロオホフは、髪の縮れた、凉しい碧い眼の、中背の男であつた。二十五歳であつた。總べての歩兵將校のやうに、口髯を生やして居無かつた、で、彼の顔の最も著るしい特徴であつた口が隱されて居無かつた。その口の線は非常に華奢に刻まれて居た。上唇は堅固した下唇の上に鋭い楔形に強く閉ぢて居た、そして、兩隅で口は何時も、一つの側に一つ宛、二つの微笑を形造つて居た、で、さういふのが一緒になつて、殊に彼の凛然とした、人を人とも思はぬやうな、食へ無い眼付を一緒にすると、誰でも彼の顔に氣が付かずに居ることは到底能き無いやうな印象を他人に起こさせるのであつた。

ドロオホフは金錢の無い、引援の無い男であつた。それでも、アナトオルは年十萬を費うのであつたけれども、ドロオホフはそれと一緒に暮らしながら自分の位地を實に巧く整へて行つて、アナトオルから尊敬せられたのみで無く、二人を知つて居る總べての人からアナトオルより以上の尊敬を得るまでになつた。ドロオホフは何な種類の勝負事でもやつて、大抵何時でも勝つた。何れほど飲んでも、彼の頭は明晰を失なは無かつた。クラアギン、ドロオホフ、二人とも其時分彼得堡の常習的放埒社會の立て物であつた。

ラムの壜が持つて來られた、窓の外縁に人が坐はるのに邪魔になる窓框は、周圍の紳士の叫びや指圖に少なからず怖ぢ狼狽たらしい二人の從僕の手で壞わされた。

アナトオルは反り返つてノサ〳〵と窓の所へ行つた。何か壞わし度くつて堪ら無かつたのだ。從僕を押し退けて、窓框を引張た、けれども、框は外れ無かつた。彼は窓硝子を叩き碎いた。

『さア、君は力が強い』と、彼はピエールを顧みた。ピエールは十字になつて居る木を捉まへて、ウンと引き、メリ〳〵と櫛材の框を捻ぢ外した。

『悉皆取つちまへ、で無いと、俺がつかまつてると思ふから』と、ドロオホフが云つた。

『英吉利人の奴め大口を叩いて居やアがる……素的な藝當だな……えゝ』と、アナトオルが云つた。

『素的だ』と、ピエールは云つて、壜を手に持つて窓へ上つたドロオホフを見た、其所からは、空の明るみ、朝と夕方が混り合ふ明るみが見えるのであつた。ドロオホフは、手にラムの壜を握つて、窓縁へ跳びあがつた。『皆聞け』と、窓縁に立つて、眞正面に部室に向いて、彼は叫んだ。皆默まつた。

『俺は賭に應じた』（ドロオホフは英吉利人に解かるやうにと、拙いながら佛蘭西語で云つた）……『俺は五十帝國貨の賭を爲たんだ――百に增す氣無いですか』と、彼は、英吉利人に向いて、云ひ足した。

『いゝえ、五十です』と、英吉利人は云つた。

『宜しい、五十帝國貨で、俺はラム一壜口から一遍も離さずに飲み干して了まうんだ。窓の外側に坐はつてこれを飲むんだ、此の所で』（彼は身體を屈めて、窓の外の壁の傾斜に突き出して居る所を指し爲た）…『何にもつかまらずに……宜しいか』

『宜しい』と、英吉利人が云つた。

アナトオルは英吉利人に振り向き、上衣のボタンの所を捉まへて、彼を見下して、（英吉利人は小男であつた）英吉利語で賭の條件を繰り返へし始めた。

『寸時待て』と、注意を呼ぶ爲めに窓を壜で叩いて、ドロオホフが云つた。『寸時待て、クラアギン、おい聞け、誰でも俺と同じ事をやるものがあれば、俺はそれに百帝國貨拂つて遣る。皆解かつたか』

英吉利人はその賭に應ずる積りなのか何うなのか、何方とも付かず唯だ頷いた。

アナトオルは尙且英吉利人を放さ無かつた、そして、後者が、頷づいて、悉皆解つたと知らせたに拘はらず、ドロオホフの言葉を英吉利語に譯して聞かせた。その晩骨牌に負け續けて居た痩せた若い騎兵將校が窓へ登ぼつて行つて、頭を突き出して、下を見た。

『おー、……おー……おー……』と、彼は窓から下の敷石を眺めて、叫んだ。

『默れ』と、ドオロホフは叫んだ、そして、その將校を突き飛ばしたので、彼は自分の拍車に躓づいて、部室へ無態に飛んで歸つた。手近な所にあるやうにと、窓緣に壜を置いて、ドロオホフは徐々と氣を付けて窓へと登つた。兩脚を外へ下ろし、窓の出張りの上へ兩手を廣げて、身體の位地を試めし、坐はつて、手放しになり、右へ少し動き、それから、又左へ少し寄り、で、壜を取つた。アナトオルが蠟燭を二本取つて來て、窓の出張りに置いたので、其所は非常に明るかつた。ドロオホフの白襯衣の背部と縮毛の頭が兩側から照らされた。衆皆窓の周圍に群がつた。英吉利人は正面に立つた。ピエールは微笑んで、何も云は無かつた。連中の一人、中での少し年上の男が、不意に、怖ぢけた怒つた顏で前へ出て、ドロオホフの襯衣を攫まうと爲た。

『諸君、これは餘まり馬鹿なことぢやァ無いか、この男は死んぢまう』と、他のものより正

氣なその男が云つた。

アナトオルはその男を止めた。

『觸はつちやアいかん、驚ろかすと、落ちるかも知れ無いぢやアないか、え、……さうすれば何うする、おい』

ドロオホフは振り向き、身體の平衡を取つて、そして、再兩手を廣げた。

『誰でも此度又俺をつかまへる奴があれば』と、緊然結んだ薄い唇の間から言葉を一つ一つ落とすやうにして、云つて、『此所から投げ落しちまうぞ。さア……』

『さア』と、云つて、彼は再向き直り、兩手を落して、壜を取り、唇に當てがつて、頭を後へ曲げ、平衡を取る爲めに放した片手を上へ揚げた。破れた硝子を掃除しだして居た從僕は、身體を屈めたまゝで立ち止まつて、窓とドロオホフの背部を見詰めて居た。アナトオルは眼を能きるだけ見張つて、眞直に立つた。英吉利人は側の方から、口を緊然と結んで、見詰て居た。止めやうと爲た男は部室の隅へ引込んで、壁へ顏を向けて、長椅子に臥た。ピエールは顏を手で隱した、恐怖にぞゞけ立つた顏でありながら、尙且遺すれられたやうに微笑が其所にさまよつて居た。誰も聲を出す者は無かつた。ピエールは眼から手を取つた、ドロオホフは依然同じ

位地に坐はつて居た、唯だ、頭が縮れた髮が襯衣の襟に觸る程まで仰向けられて居て、壜を持つた手が、如何にも骨が折れるらしく振るへながら、だん〳〵高くあがつて居た。確に壜は殆ど空になつて居た、で、頭を仰向けて、ます〳〵高く傾むけられたのであつた。『何故此樣なに長いんだらう』と、ピエールは思つた。半時間の餘も經つたやうな氣が爲たのだ。不意に、ドロオホフは背部をグッと反り返らせた、そして、腕が神經的に振へた、彼は傾斜の出張りに坐はつて居たのだから、この身體の動きは、平衡を失はせるに十分であつた。實際彼は身體がずれだした、で、平衡を回復しやうと骨折るものだから、全身、腕も頭も、尙一層烈しく振へた。片手が窓の出張りへ攫まりさうに上がつた、けれども、再落ちた。ピエールは又眼を閉ぶつた、そして、決してもう何時までも開くまいと自ら誓つた。乍ち、周圍に全體のさゞめきが起つたのに氣が付いた。ヒョイと見あげると、ドロオホフは窓の出張りに立つて居た、彼の顏は蒼かつたが、如何にも愉快らしかつた。

『空だ』

英吉利人に壜を擲ると、彼はそれを巧く受け取つた。ドロオホフは窓から跳び下りた。彼はラムの臭氣がプン〳〵した。

『豪いぞ』『萬歳』『眞個に賭らしい賭だな』『貴樣は恐ろしい奴だな』などゝ、八方から叫聲が來た。

英吉利人は錢入れを取り出し。金錢を數へて出した。ドロオホフは顏を顰めて、何とも云は無かつた。ピエールは窓へ飛んで行つた。

『諸君。誰か俺と賭を爲る者は無いか。俺は同じ事をやるんだ』と、彼は不意に叫んだ。『なに、賭なんぞは何うでも宜い、おゝい、壜を持つて來るやうにさう云つて呉れ。俺はやるぞ……持つて來させて呉れ』

『やらせろ、やらせろ』と、微笑みながらドロオホフが云つた。

『おい、貴樣氣が狂つたか。誰も貴樣にはやらせんぞ。おい、貴樣は階下へ行くにだつて眼が眩るぢやァ無いか』と、幾人かが制めた。

『俺は飲むんだい、ラムの壜を呉れ』と、醉拂つた斷乎とした手付で卓子を叩いて、ピエールはたけつた、そして窓へと登ぼつた。皆は彼の腕を攫んだ、けれども、彼の强さは非常で、傍へ寄つた者は誰彼無しに遠くの方へ突き飛ばされて了まうのであつた。

『いゝや、左樣な事ぢやァ奴は扱かへ無い』と、アナトオルは云つて、『少し待て、俺が欺ましちまうから……。おゝい、俺が賭を行くよ、だが、明日にしよう、今夜は衆皆でこれから行く所があるんだ、それは……』

『うん、一緒に來い』と、ピエールは叫んで、『一緒に來い……それから、ミシカも連れてかう』……。で、彼は、熊を捉まへて、それを抱き上げて、それと一緒に部室のなかをワルツを踊つて廻りだした。

（八）

公爵ヴァシイリは、アンナ・パアヴロヴナの夜會で一人息子のボリイスのことを彼に賴んだ公爵夫人ヅルウベッコイに對して爲た約束を違がへ無かつた。ボリイスの件は皇帝の前に置かれた、で、餘程異例ではあつたが、彼は近衞のセメエノフ聯隊の少尉の命任を受けた。けれども、クッウゾフの副官、若くはアッタッセエの位地は、アンナ・ミハーイロヴナのあらゆる骨折りと泣き付きに拘はらず、ボリイスに得てやることが能き無かつた。アンナ・パアヴロヴナの家の集會から間も無く、アンナ・ミハーイロヴナは莫斯科の金持の親類ロストオフの所へ歸つて行つた。ミハーイロヴナが莫斯科に居る時は何時でもその家に泊るのであつた。それから、ホンの

此頃普通師團の聯隊に入いつたばかりで、今直ぐ少尉として近衞に移つされた秘藏子のボリインカが子供の時分から敎育され、そして、何年も暮らして居たのは、その親類の所であつた。近衞は最早八月の十日に彼得堡を出發した、で、支度の都合で莫斯科に殘つて居たミハーイロヴナの息子は、ラヂイヴイロフへの路で追つ付く筈であつた。

ロストオフ家は、母親と若い娘、兩方共ナタアリヤといふのゝ祝ひ日をやつて居た。朝からずつと續いて、六頭馬車が幾つも引切無しに、莫斯科ぢうに知れ渡つて居たポヴアルスキイの伯爵夫人ロストオフの大きい家へ來たり去つたりした。伯爵夫人と奇麗な上の娘は、その年を老つた方の婦人に祝ひを云ふ爲めに立ち代り入り代り續々詰め掛けた客たちと共に、客室で坐はつて居た。

伯爵夫人は顏の東洋だちの、年齡四十五歲の、幾度もの產で疲れ切つたさまの陽はな女であつた。起ち居と話の落着てゆつくりして居るのは、身體の弱い故であつたのだが、それが尊敬を起こさせる威のある樣子を夫人に與へた。公爵夫人アンナ・ミハーイロヴナ・ヅルウベツコイは、家族の極く心安い友達として、二人と共に坐はつて、客に接したり持てなしたりする助けを爲て居た。家の若い連中は客に接する仲間に連なるには及ば無いといふので、奧の部室に居た。伯爵は客を迎へ、戸口まで案內し、衆皆を食事に招いた。

『何うも實に有り難う』と、相手が自分より高い位地の人だらうが何うだらうが一向構はず、誰彼無しに、極く親しい調子で云つて、『祝の當人二人は勿論、私に取つても實に有り難いことで。是非食事にお來ください。お來が無くば私は、怒りますぞ。家內一同から吳々もお願ひします』。圓々とした剃り付けた機嫌の好い顏の誰に對しても同じな表情と、誰に對しても同じな親しい握手の爲方と、幾度も繰り返す輕い點頭とで、伯爵は斯ういふ言葉を、誰彼無しに何な客にも掛けたのであつた。彼は廣室へ客を送り出すと、直ぐに、まだ客室に居る男か女かの客の所へ引き返した。椅子を前へ動かして、交際社會が好きで、それに慣れ切つた人の風で、坐はつて、脚を樂々と開き、膝に手を置き、品格好く身體を搖りながら、或時は露西亞語で、或る時は拙い佛蘭西語を如何にも平氣で使かつて、天氣の豫想、身體の養生の助言などをし、それから、又起ちあがり、大分飽きては居るが然し自分の義務は何處までも盡くすと決心した人の風で、頭の禿の上へ白髮を手で梳き掛けながら、歸る客を送り出して行つて、又前のやうに食事に是非來て吳れと賴むのであつた。時には、廣間からの歸りがけに、貯藏室と料理頭の部室を通つて、八十人前の食卓の支度が出來かゝつて居る大理石の床の大きい部室へ行つた、そ

して、銀器や、陶器を持つて來たり、食卓を列らべたり、ダマスカス織の食卓掛を廣げたりして居る給仕達を見て、その家で執事の務を爲て居るディミツリ・ヴァシリィエヴィーチといふ善い所生の若者を傍へ呼んで、『さア、ミイテンカ、手落の無いやうにやつて呉れよ。うん、左樣だ、左樣だ』と云ひ、それから、大きい食卓の一杯に使はれて居るのを快ささうに見廻して、『御馳走が大事なんだからなア。左樣だ、左樣だ』と、云つた、で、伯爵は滿足の息をホッと漏しながら再客室へと返るのであつた。

『マリヤ・ルヴォヴナ・カラアギンとお嬢樣』と、伯爵夫人の大きい從僕が客室の入口で、深い濁聲で通じた。伯爵夫人は寸時考へ込んだ、そして、夫の肖像が蓋に付いて居る金の喫烟草函から一摘取つた。

『お客は最早堪まら無いね』と、夫人は云つて、『でも、此の方だけにはお目に掛からうよ。太く澄ました人なんだもの、ご案内をしてお呉れ』と、夫人は、『最早宜しい、何うにでも止めを刺して呉れ』と、云つてでも居るやうな元氣の無い調子で云つた。

背の高い、肥つた、ツンとしたやうな態の婦人と、圓い笑顔の娘が袴の戰を高くさせて客室へ歩み込んだ。

『奥樣、眞個にお久し振りですわねえ、……可愛さうに、此兒がズッと臥つて了つたものですからね』——『ラズモウフスキイの舞踊會で』——『伯爵夫人アブラアキシン』——『眞個に嬉しいんですよ』——女の聲々が、互に遮ぎり合ひ、袴の戰ぎと、椅子の床を擦る音に混じり合つて、口速にベチャクチャ云つた。それから始つた談話は、それが一寸と途切れるが最期客は直に起あがり、袴を戰がせ、『眞個に嬉しいんですよ、……母親が健康で……それから、伯爵夫人アブラアキシン……』などと、呟やきながら、又同じやうな戰ぎを爲せて、廣室へ出て、外套を引掛けて、馬車へ入る段取りまでのホンの繋ぎにやる種類のものであつた。談話は、市の重な事件の噂であつた、カザリン女皇の時代に男振りの好いので名高かつた大金持の伯爵ベズウホイの病氣と、その老人の庶子で、アンナ・パアヴロヴナの夜會で太く不作法な擧動の有つたピエールの話が出た。『伯爵は眞個にお氣の毒ですわねえ』と、客は云つた、『身體も彼樣な油斷のなら無い有樣だし、今度は又息子さんの事で心配を爲せられるし、これぢやア彼の方も最早長いことはありませんわ』

『何んな事なんです』、伯爵夫人は客の云つて居るのは何な事だか一向知ら無いと云つたやうな顔付で斯う尋ねたのだが、實は、伯爵ベズウホイの心痛の原因は最早五十度も聞いて居たの

だ。

『それと云ふも悉皆現今の教育の爲方から來ることなんですわ。外國へ出すなんて』と、客の婦人は續けた。『若いのに、彼地で擲りつ放しにされて居たんでしょう、だもんですから、此方へ歸つても、此頃彼得堡で眞個に慄然とするやうな身持になつて了まつて、到頭巡査が付いて、彼市を追ひ拂はれたといふ噂なんですわ』

『眞實なんですか』

『惡るい友達をこしらへたんですよ』と、公爵夫人アンナ・ミハーイロヴナが口を挾れた。『公爵ヴァシイリの息子と……そのピエールと、それから、ドロオホフといふ若者とさう三人で以つて、何とも謂ひやうの無いヒドい事を爲て居たといふ噂なんですよ。で、そのうち二人はその應報を受けたんださうです。ドオロホフは普通の兵卒に貶されて了まひ、ベズウホフの息子は莫斯科へ追放されたんだと云ひます。アナトオル・クラアギンの方は……父親が何うにか抹み消して了まつたんです。けれども、尙且彼得堡からは出されました』

『へえー、何んなことを爲たんですね』

『全然惡黨なんでしたつて、中でも、ドロオホフが一番』と、客は云つた。『ご存でしょう、彼のチャンとした婦人のマリヤ・イワノヴナ・ドロオホフの息子なんですがねえ、貴女。眞個に呆れ返るぢやアありませんか、三人で何處からか熊を捉まへて來て、馬車のなかへ一緒に乘せて、或る女役者の家へ行く途中だつたさうです。巡査が止めに駈け付けました。すると、その巡査を捉まへて、熊の背部へ縛り着けて、熊をモイカ川へ追ひ込みました、熊は巡査を背負つたなりで泳いだんださうです』

『面白い風だつたらうね、その巡査は』と、伯爵は、可笑さを堪らへ切れずに、叫んだ。

『お、、眞個に慄然とする。笑ひごとなもんですかよ、伯爵』

が、さう云つた婦人連自身笑はずには居られ無かつた。

『やう〳〵の事でその可愛さうな巡査は助かつたんです』と、客は續けた。『これが、伯爵キリイル・ヴラディミイロヴィーチ・ベズウホイの息子の爲る高尙な慰みだといひますんではねえ』、客は斯う云ひ足した。『それで居て、良い教育を受けた、なか〳〵悧巧な男だと云ふことぢやアありませんか。外國教育の結果といふのは先づ斯樣なものなんですわ。何れ程金持だつて、此地では誰も交際ふ人は無いでしょうよ。私には紹介しやうと云つた人がありました。私は斷然斷はつて了まひましたんですわ、娘が有るんですものね』

『何うして金持だとおつしやるの』と、伯爵夫人は娘達の方から振り向いて、尋ねた、娘達は直ぐ夫人のそれからの話は聞いて居無いやうな顏を爲た。『伯爵は庶子ばかりぢやアありませんか。何うも……ピエールも庶子ですわ』

客は手を振つた。『彼の人は左樣いふのが隨分澤山なんでしよう』

公爵夫人アンナ・ミハーイロヴナが、自分の知り合ひの多いこと、、世間の何んな細かいことでも好く知つて居ることを見せ度いと思つたのらしく、口を挾れた。

『それは斯樣なんです』と、意味ありげに、呼くやうに云つた。『伯爵キリイル・ヴラディミイロヴィーチの評判は誰だつて知ら無いものは有りませんわ……。子供の數は自分でも覺えて居無い程なんですわ、けれども、ピエールは祕藏子だつたんです』

『彼の老人は眞個に奇麗でしたね』と、伯爵夫人は云つて、『ホンの去年まではねえ。彼樣な奇麗な人は私未だ見たことはありませんですよ』

『此頃は最早全然變つて了まひました』と、アンナ・ミハーイロヴナは云つた。『あ、、それでねえ』と、言葉を次いで、『財產全部の直接の相續人は、奧樣の方の緣で、公爵ヴァシイリなんです、でも、伯爵はピエールが可愛くて堪まら無いんで、その敎育に骨を折つたんで、そして、陛下にも書面で願ひを上げたんです……ですもの、若し伯爵が亡くなれば（最早何時左樣なるか分から無い程疾いんです、國手ロオレエンが彼得堡から來た位なんですわ）、ですから、その曉は、彼の大身代がピエールの物になるか、公爵ヴァシイリの物になるか、何方になるか、分かつたものぢやアありませんわ。四萬の耕奴、何百萬と云つてあるお金なんですもの。公爵ヴァシイリが自分で話したことなんですから、これは眞實なんでしよう。それで、實は、キリイル・ヴラディミイロヴィーチは、私の母方の三番目の從兄なんです、そして、又ボリイスの名付親なんですよ』、公爵夫人は、さういふ類緣に少しも重きを置いて居無いやうな態で、斯う云ひ足した。

『公爵ヴァシイリは昨日莫斯科へ着きました。何か事業の視察に來られたんださうですよ』と、客は云つた。

『左樣、これは此所だけのお話ですがねえ』と、公爵夫人は云つて、『それはホンの世間體で、實は、公爵キリイル・ヴラディミイロヴィーチが重體だと云ふんで、唯だ公爵に逢ふ爲めに來たんですわね』

『何にしても、貴女、それは實に面白い惡戲でしたなア』と、伯爵は云つた、で、年取つた

婦人には聞え無かつたのを見て、若い方の連中に振り向いた。『その巡査は嘸ぞ面白い態でしたらうね、實に眼で見るやうだ』

で、巡査が腕を振つた樣子を身振りで見せて、伯爵は、何時も善く喰ひ、又それより尙一層善く飲む人々の笑ふやうに、賑かな濁聲の笑で噴飯して、腹の兩脇を搖すらせた。『其所で、何卒、食事にいらしつてください』と、云つた。

（九）

沈默が次いだ。伯爵夫人は客を見て、愛想の好い笑顏を見せて居た、けれども、若し客が起ちあがつて、行つて了まつても、別に惡るくは思はないといふ事實を隱くさうとは爲て居無かつた。娘は最早長上衣の襞をまさぐつて、母親の方を促がすやうに見て居た。と、乍ち、次の室で、二三人の娘や、男の兒の戶口へ駈けて來る音と、突き倒された椅子の床を擦る音がした、と思ふと、十三歲位の女の兒が、短かい綿紗の袴のなかに何物か隱くして、駈け込んで來て、部室の眞中でピタリと止まつた。娘は逃げ出した勢に止度を失なつてツイ此所まで、跳び込んで了まつたのらしかつた。と、同時に、戶口に、襟の上に緋の襟飾を卷いた學生と、近衞の若い將校と、十五歲位の娘と、小兒の外衣を着た肥つた薔薇色の頰をした男の兒が現はれた。伯爵は跳びあがつた、そして、身體を右左へ搖らせながら、小さい娘の周圍に廣く兩手を廻した。

『やア、來たな』と、伯爵は、笑ひながら叫んだ。『祝ひ日だ、祝ひ日だ』

『お前、今日は平日とは違ひますよ』と、伯爵夫人は、峻しさを裝つて、云つた。『貴下、何時でも甘くばかりなさるのね、エリイ』、夫に斯う云ひ足した。

『今日は、お孃さん、お目出度う』と、客が云つた。『善いお子さんねえ』と、母親に振り向いて、云ひ足した。

黑眼の、大きい口の、その小さい娘は、善い器量では無かつたが、如何にも生々して居た、一生懸命に駈けたので、露出の肩が上下に搖れ喘いで居た、黑い髮が後へゴヂヤ〳〵になつて投げ掛けられて居た。腕は細くて、露出であつた、小さい脚にはレエスで緣取つた股引と爪先ばかりの半靴を穿て居た。娘は今、最早小兒では無いが、と云つて、未だ若い娘には成り切つて居無いといふその可愛らしい年頃であつたのだ。父親の手から捥き離れて、娘は、母親の所へ駈けて行つた、そして、母親の嚴しい言葉は一向耳に止め無かつた態で、母親のレエス付の手

巾の裡へ上氣した顔を隠くして、笑ひだした。そして、袴の裡から覗き出して居た人形のことを笑聲で途切れ〳〵になる言葉で云つた。

『ねえ……私の人形……ねえ……』で、ナタアシヤはその上には何にも云へ無かつた、何でも彼でも可笑しくつて堪まら無かつたのだ。母親の膝に突伏して、恐ろしく高い聲で笑ひだして了まつたので、澄まし切つて居た客さへ誘はれて笑はずには居られ無かつた。

『さア、彼方へおいで、馬鹿々々しい事は彼方でなさいよ』と、母親は、怒つた態を爲て娘を押し退けやうと爲た、『これは二番目の娘で』と、母親は客に云つた。ナタアシヤは母親のレエス付きの手巾から少時顔を出して、笑ひの涙の裡から、母親の顔を覗いて、又顔を隠した。

斯ういふ家内の睦ましい樣子に感じずには居られ無かつた客は、自分もその裡には加はるのが然るべきことだと思つた。

『ねえ、貴女』と、ナタアシヤに話し掛けて、『貴女のミヽを何處から連れて居らしつたのの？貴女のお娘さんなんでしよう、ねえ』

ナタアシヤは、客が自分に話し掛けた、態々小兒らしいことを云つた、見下したやうな調子を好ま無かつた。返答を爲ずに、客を嚴づかしい顔付で見詰めた。

そのうちに、若い連中全體、アンナ・ミハーイロヴナの息子の將校のボリイス、伯爵の長男の學生のニコラアイ、伯爵の姪のソオニヤ、二男の小さいペエチャが、客室の裡でズラリと列んで、各自の顔に溢れて居た大騒の可笑しさを、客前では抑へ付けて、チヤンとして居やうと骨折つて居る樣子であつた。彼等が今の先勢好く飛び出した奥の間での談話は、客室での市の噂や、天氣や、伯爵夫人アブラアキシンなどの下ら無い話より夐然面白かつたに違ひ無い。彼等は一寸々々顔を見合はせて、噴飲すのを堪らへ兼ねた。

若者二人、學生と將校は、小兒からの朋友で、同い年齡であつて、兩方とも奇麗であつた、けれども、互に似た所は寸毫も無かつた。ボリイスは、華奢な整然とした道具立の奇麗な顔に沈着な樣子の表はれて居る背の高い赤つ毛の若者であつた。ニコラアイは、背の高く無い、卒直な表情の縮毛の若者であつた。上唇には最早黑い鬚の生て來た徵があり、顔全體が向ふ行きの强いことゝ、熱烈な性質を表はして居た。彼は客室へ入いつて來るとカツと赤く爲つた。確に何か云ふ事を思ひ付かうと骨折つて居ながら、何にも思ひ付無つたのだ。ボリイスは、それには引き代へ、直ぐに落着いて了まつて、その……人形のことを平氣で面白さうに云つて、鼻が缺け無いうちからそれを知つて居たのだが、それと近附になつた五年以來それが段々年を

取つて了まつたことや、頭の鉢が横にバクリと龜裂がして了まつた譯などを話した。彼は其樣なことを云ひながら、ナタアシヤを見た。ナタアシヤは、クルッと横を向いて、弟を見た。その弟は先刻から聲に出さ無い可笑しさに震へながら睨めるやうな顏をして居たが到頭堪へ切れ無くなつて居たのであつた。ナタアシヤは跳ねあがつて、小さい迅い脚の續く限りの速さで部室から飛び出して行つた。ボリイスは笑は無かつた。

『出るんですか、母上、えゝ。馬車が入るでせう』と、笑顏を向けて母親に云つた。

『左樣ですよ、行つて支度を爲るやうに言ひ付けてください』と、母親も微笑みながら云つた。ボリイスは、徐かに戸口へと歩いて行つて、やがて、ナタアシヤの後を追つた。肥つた男の兒は、遊戯が中途で妨げられたのに怒つたかのやうに、憤然と爲つて二人の後を追つて駈け出した。

（十）

若い連中では、伯爵夫人の一番上の娘（これは、妹とは四つ違ひで、最早全然成人のやうに擧動つて居た）と、若い方の女客を除けると、客室には、ニコラアイと、伯爵の姪のソオニヤが殘つた。ソオニヤは、細つそりした少さい體の棕面女で、優しい眼が長い睫毛で被はれ、濃い黑い毛が頭の周圍に二卷に束ねられ、肌膚の少し褐色がゝつたのが、殊に、露出の痩ては居たが、形の好い、筋肉の締まつた腕と頸の所で目立つて居た。體の運動の滑らかなこと、少さい手脚の和かで撓やかなこと、（それから、その擧動に何と無くコソ〳〵した所と包ましげな所があるのなどが、直きに奇麗な猫にならうとして居る未だ十分には育つて居無い可愛い仔猫を思ひ寄らせた。）娘は、衆皆の談話に興味を持つて居るやうに見せて、微笑むのが禮儀だと思つたらしかつた。が、ともすれば、その眼が、濃い長い睫毛の下から、直きに軍隊に入らうとして居た從兄の方へ向くのであつた、そして、その眼付には、娘らしい熱烈な非常な敬愛の心持が籠つて居たので、娘の笑顏の意味は少時でも誰をも欺むくことは能き無かつた、仔猫は、二人がボリイスとナタアシヤのやうに客室を出られ次第、直ぐに、前よりも一層勢好く飛び跳ねて從兄と遊ばうと思ふばかりに其所に踞まつて居るのだといふことは見え透いて居た。

『左樣、貴女』と、老伯爵は、客に話し掛けて、ニコラアイを指し、『これの信友のボリイスが今度將校に任命されたですが、倅は好きな友達に置いて行かれるのが厭だといふので、大學も退し、賴る所の無い年寄りの父親を捨てゝ、軍隊に入らうと云ふのですせ、貴女。けれども、記

錄局に全然口が出來て居るのですになア。何うです豪い友情ぢやアござんせんか』と、伯爵は、尋ねるやうに云つた。

『ですが、戰爭がいよ〳〵始まるといふではございませんか、ねえ』、と、客は云つた。

『餘程前から左樣云つて居ます』と、伯爵は云つた。『これからも幾度云ふことでせうか、けれども、何時までも唯だそれだけでせうよ。友情ですなア、貴女』と、伯爵は再云つて、『倅は驃騎兵に入らうと爲て居ります』

客は何と云つて宜いか解から無かつたので、唯だ頭を振つた。

『決して友情ぢやありません』と、ニコラアイは、カツと上氣せて、何か耻辱になる言ひ掛りを否定するとでも云ひやうな態で答へた。『何で友情なもんですか、唯だ軍隊へ引き付けられるからなんです』

彼は從妹から若い女客へと見廻した、二人とも道理だといふ笑顔を見せた。

『驃騎兵のバアヴログラドスキイ聯隊の大佐シユウベルトが今晩食事に來て呉れるのです。今賜暇で此方へ來られたのでしてな、歸りに倅を伴れて行つて呉れやうと云ふのですわい。最早何うにも爲方が無い』と、伯爵は肩を搖つて、自分の隨分當惑したらしい事柄を戯言のやうな口調で話した。

『僕は前にお話し爲たぢやありませんか、父上樣』と、息子は云つて、『僕を手放すのがお厭なんなら、僕は止しますつて。けれども、僕は軍隊より外では全く駄目な人間なのは自分で善く知つて居るんです。僕は外交官には向か無い、普通の文官も駄目ですよ。自分の感情を僞はることが下手なんです』と、ニコラアイは、奇麗な若い男の媚を裝つて、ソオニヤと若い方の女客とを、幾度もジロリ〳〵見た。

ニコラアイの上に眼を釘付けにしたやうな仔猫は、今にも踊りだして、猫の本性を見せさうであつた。

『ま、まア、最早宜い』と、老伯爵は云つて、『何時も直きに激して了まう。ナポレオンで誰も彼も氣違ひだ、衆皆ナポレオンが中尉から皇帝まで登つた經路を夢みて居るのだね。左樣さ、又其樣なことにでも爲つて貰らへれば、結構だが』と、客の皮肉な笑顔には氣が付かずに、云ひ足した。

年寄り連がナポレオンの話を爲だすと、カラアギン夫人の娘のジユリイは、若いロストオフに振り向いた。

『木曜にアルハアロフさんへ入らつしやら無かつたのは眞個に殘念ね。貴下が入らつしやら無いんで私何樣に面白く無かつたでせう』と、親しげな笑顔を向けて、娘は云つた。

若者は、その言葉が太く嬉しくつて、媚びた笑顔を見せて、椅子を娘の方へ近々と寄せて行つて、そして、自分の我れ知らずの微笑の爲めにソオニヤが嫉妬に胸を强く刺されて、眞赤になりながら無理やりに笑顔を裝つて居たのは氣が付かずに、莞爾して居るジユリイとばかり話を爲だした。が、その談話最中に、彼は一寸とソオニヤの方を見た。ソオニヤは彼に向いて宛然攫み掛りでも爲さうな顏付を爲た、そして、唇にはそれでも無理に微笑を持たせながら、涙を抑さへ兼ねた樣子で、起ちあがつて、部室を出て行つた。ニコラアイの生氣は全然消えた。談話の最初の切れ目を待ち兼ねた態で、如何にも困じた顏で、ソオニヤを探がしにと部室を出た。

『若いうちは誰しも胸裡を包め無いものさねえ』と、アンナ・ミハーイロヴナは、ニコラアイの後姿を指ざして、云つて、『從兄妹同士、油斷がならぬ近い同士』と、（佛蘭西語で）云ひ足した。

『左樣ですよ』と、若い連中が客室へ持つて來た陽氣な明るさが消えて了まつた時に、伯爵夫人が云つた。夫人は、誰から持ち出されたのでも無いが、唯だ何時も自分の胸にあつた問題に自答するとでもいふ態で、『若い者を仕合せにしてやらうといふには、一通りの苦痛や氣苦勞ではありませんね。今でさへ、若い者のことぢやア嬉しいと思ふよりかハラ〳〵思ふことの方が全く多いんですものねえ。何時もハラ〳〵してばかり居りますんですよ。別けても、此頃のやうに男の子にも女の子にもホントに油斷も隙もなら無い世の中でしてはねえ』

『全く仕付け次第のものなんですよ』と、客は云つた。

『えゝ、仰しやる通りです』と、伯爵夫人は續けた。『今までの所では、有り難いことに、私は家の子供の眞個の友達になつて、何樣な事でも私に打明けて呉れ無いことは無いんです』、伯爵夫人は、自分の知ら無い秘密は自分の子供には無いと思つて居る世間の多くの親の考慮違ひを又自分も繰り返して、斯う云つた。『子供は何時も私に一番に打明けますわ、で、ニコラアイも、向ふ行きの强い性質ですもの、何か惡戯をするか知れませんけども、（男の子は矢張男の子ですからねえ）、それにしても、お話しの彼得堡の若い方々のやうなことは無いと思つて居りますよ』

『うん、素的な子供だ、素的な子供だ』と伯爵は頷いた。伯爵は面倒な問題に遭遇ふと何時

でも唯だ素的だと斷じて解決を付けて了まう人なのであつた。『何うです、驃騎兵に爲らうと思ふなんて。けれども、何う爲るものですか、貴女』

『年下のお孃樣は眞個に可愛いお子ねえ』と、客は云つた。『飛んだ陽氣な』

『えゝ、左樣です』と、伯爵は云つた。『私に似たのですなア、聲がなか〳〵好いのです、自分の娘のことを斯う云つては可笑しいですが、これは眞實ですぞ、サロミニの生れ代りといふ歌謠者になりませう。敎師に伊太利人を賴みましたですよ』

『少し早過やしませんか。あのお年齡からだと、聲を傷めて了まうといふ話ぢやアござんせんの』

『いゝや、何うして。早過ぎる所ですか』と、伯爵は云つた。『なアに、われ〳〵の母の代にやア、女の子が大抵十二か十三で結婚したのですからなア』

『もし、彼女は最早ボリイスに戀して居るんですよ。何うでせう』と、伯爵夫人は優しい笑顏でボリイスの母親を見た。それから、何時も胸に有つた問題に答へるらしい態で、言葉を續けて、『ねえ、私が彼の娘に嚴しくして、全然制止て了まつたら、何うでしたらう……それこそ、內所で何んな事だつて爲兼ねるものぢやアありませんわ』『伯爵夫人のさう云つた意味では、二人が接吻でも爲ては大變だといふのであつた）『ですが、私のやり方が斯ういふ風だもんですから彼の娘の言葉一言だつて私の知ら無いことはありませんですよ。彼の娘は、今晩も私の所へ來て、何でも話して了まひます。そりやア甘く爲るのかも知れませんさ、ですが、これが一番良いやり方だと私は眞個に思つて居るのですわ。でも、上の娘はもつと嚴しく育てました』

『左樣です、私の方は全然違つた育て方でした』、上の娘、器量の好い公爵孃ヴエーラが、斯う云つて、そして、微笑んだ。が、微笑はヴエーラの顏を可慕こくは爲無かつた、反つて、顏が不自然に見え、從つて、厭な風になつた。ヴエーラは好い器量であつた、鈍い性質では無く課業の覺えも好く、立派に敎育された娘であつた、聲も聞いて快く、云つたことは道理でチヤンとして居た。けれども、不思議と、誰も——客も、伯爵夫人も——何故ヴエーラが其樣なことを云つたらうか不思議でならぬといふやうな態で、娘を見た、そして、座が一寸と白けた。

『何方も自分の上の子供の仕付には種々な工夫をなさるものですよ、世間に無いやうなエラい事を爲やうと骨折るものなんです』、客が斯う云つた。

『左樣いふ失策では我々の方も實は、同樣なのでな、貴女。この伯爵夫人もヴエーラの仕付には工夫が過ぎました』と、伯爵は云つた『だが、それは構はんです、それでも、大體は、

素的な成功ですからなア』、伯爵は斯う云ひ足して、ヴェーラに向いて、是認の眴を爲た。

客二人は起つて、食事には來ると約束して、歸つて行つた。

『何といふ不仕付だらう。何時までも〳〵居坐はつて丶』と、伯爵夫人は、客を送り出して了まつてから、云つた。

（十一）

ナタアシャは客間を駈け出はしたが、溫室までしきや行か無かつた。で、其所で止まつて、客室の談話を聞きながら、ボリイスの出て來るのを待つた。やがて、焦れだして、脚踏を爲、ボリイスが直ぐ來無いのに最早泣き出すばかりに爲つて居た、と、緩徐過ぎもせず急速過ぎもせず、唯だ靜づかに來る若者の足音が聞こえた。ナタアシャは素早く植木鉢の間へ跳び込んで隱くれた。

ボリイスは部室の中央で、パッタリ止まつて、四邊を見廻はし、軍服の袖から塵の塊を拂ひ落とし、姿鏡の所へ行つて自分の奇麗な顏を見て居た。ナタアシャは竊然と隱れ場所から覗いてボリイスが何うするのか待つて居た。ボリイスは少時姿鏡の前に立つて、自分の姿を見て微笑んで、前方の入り口の方へと歩き出した。ナタアシャはそれを呼び止めさうに爲て、又思ひ直した。『探がさして遣れ』と、娘は自分に向かつて云つた。ボリイスが艱つと出たばかりの所で、も一つの入口から、ソオニヤが、赤くなつて、涙の間に何か呟きながら、入つて來た。ナタアシャは傍へ駈け寄らうとする最初の衝動を抑制へた、そして、隱形兜を冠ぶつて居るかのやうに、隱れ場所に潛んで、何う爲つて來るだらうと覗がつて居た。心のなかには今まで覺え無い變な面白さを感じだした。ソオニヤは客室の戸の方を見返り〳〵、何か口の裡で云つて居た。戸が開いた、そして、ニコラアイが入つて來た。

『ソオニヤ。何う爲たんだい。何うして彼樣な？』、傍へ駈け寄りながらニコラアイが云つた。

『何でも有りませんよ、何でも有りませんよ、打捨つといてくださいよ』と、ソオニヤはしやくり上げて居た。

『いゝえ、僕は解つてるよ』

『それぢやア宜いわよ、解つてるの、尙結構よ、彼の女の方へいらつしやい』

『ソ……オ……オニヤ。お聞きよ。勘繰ばかしで僕を苦め、自分も厭な思を爲るなんて？』、ニコラアイは斯う云つて、娘の手を摯つた。ソオニヤは手を引つ込め無かつた、泣くのも止めた。

ナタアシヤは、動きも爲ずに、隱れ場所から眼を輝らせて見て居た。『何うなるんだらう』と、ナタアシヤは思つた。

『ソオニヤ。僕は此の世の中なんぞ何うなつたつて構は無いんだ。唯だお前さへ有れば僕はそれで宜いんだ』と、ニコラアイは云つた。『僕は證據を見せる』

『其樣なことを云つちやァ厭よ』

『うん、ぢやァ云は無い、さア、勘忍してお呉れよ、ソオニヤ』。ニコラアイは娘を引き寄せて、接吻した。

『あゝ、面白い』と、ナタアシヤは思つた、そして、ソオニヤとニコラアイが部室を出ると、自分もその後へ隨て出て、ボリイスを呼んだ。

『ボリイス、おいでよ』と、何か事あり氣なコソ〳〵した顏付で云つた。『話し度いことがあるのよ。此方、此方』と、云つて、そして、溫室へ入り、自分が前に隱れて居た鉢の間へとボリイスを伴れ込んだ、ボリイスは、微笑みながら隨いて行つた。

『話し度いことつて一體何だい』と、ボリイスは尋ねた。ナタアシヤは少しモヂ〳〵した、四邊を見廻はし、そして、鉢の裡に投げ込んであつた人形を見て、それを拾ひ上げた。

『人形に接吻してよ』と、云つた。ボリイスはナタアシヤの熱心な顏を何事でも見落さ無い眼に愛情を籠めて見遣つて、何とも返答し無かつた。『厭？あゝ、ぢやァ、此所へいらつしやい』と、ナタアシヤは樹の間へ、もつと奥深く入つて行つた、人形を拋り出した。『もつと傍よ、もつと傍よ』と呼いた。若い將校の腕の袖口の上の所を捉まへた、赤くなつた娘の顏には嚴肅と畏怖の樣子が表はれた。

『私に接吻して呉れ無い？』と、眼瞼の下からボリイスを見上げ、微笑み、そして、上氣で泣きさうになつた顏で、宛然聞き兼ねるやうな聲で、呼いた。

ボリイスは赤くなつた。『何て馬鹿な』、ナタアシヤの方へ顏を下げ、又一層赤くなつて、斯う云つたが、それでも、何とも爲ずに、次に來ることを待つて居た。不意に、娘は鉢の上へ跳びあがつた、それで、自分の顏がボリイスのよりも高く爲つたので、細い露出の兩腕をボリイスの頸の周圍へ掛けて抱き締め、頭を一振して、髮を後へ投げ落し、ボリイスの唇に眞正面に接吻した。

やがて、他の側の鉢の間へ滑り下りて、頭を垂額れて立つた。

『ナタアシヤ』と、ボリイスは云つて、『僕がお前を愛してるなア、解つてるだらう、けれど

も……』

『貴下は私を愛して丶よ』と、ナタアシャは口を挾れた。

『左樣なんだ、けれども、ねえ、斯樣なことは爲つこ無しにしやうぢや無いか……。もう四年すれば……さうしたらば、結婚を申し込むからね』

ナタアシャは寸時考へ込んだ。

『十三、十四、十五、十六……』と、小さい細い指で數へた。

『あゝ、左樣なんだよ。ぢやア、宜いかね？約束したことにして』。と、娘の上氣した顏に嬉しさと安堵の微笑が輝き出た。

『約束したよ』と、ボリイスは云つた。

『何時までも』と、少さい娘は云つた。『死ぬまで』。で、ボリイスの腕を摯つて、嬉しさうな顏で男に引添つて徐に次の室へ歩み出た。

（十二）

伯爵夫人は客に逢ふので疲れ切つて了まつたので、最早誰が來ても逢は無いと言ひ付けた、取次の瑞西人が、それから祝ひに來た客は誰でも食事に案内しろと言ひ付かつた。伯爵夫人は、幼時友達のアンナ・ミハーイロヴナが彼得堡から歸つて來て以來、未だ落々話したことが無かつたので、此所で、差向の打明け談話を爲度かつたのだ。アンナ・ミハーイロヴナは、涙に痩れては居るがそれでも何處か愛嬌のある顏を擧げて、伯爵夫人の肱掛椅子へ近々と摺り寄つた。

『貴女には私何んな事でも全然打ち明けますわ。と、アンナ・ミハーイロヴナは云つた。『往時からのお友達で今殘つてるのは最早幾等も有りませんわねえ。ですもの、貴女が斯うやつて近しくしてくださるのが一層嬉しく無くつて何うしませう』

アンナ・ミハーイロヴナはヴエーラを見て、言葉を止めた。伯爵夫人はその友達の手を握り締めた。

『ヴエーラ』と、伯爵夫人は、確に祕藏子では無い長女に云つて、『お前さんは何だつてさう物の思ひ遣りといふのが無いだらうね。最早此所に居るには及ば無いことに氣が付か無いの。妹の方へ行くか、それで無ければ……』

奇麗な伯爵嬢は、一向平氣な態で、意氣惡るさうに微笑んだ。

『左樣云つてくだされば、母上樣、私最早夙くに行つてたことよ』と、云つて、そして、自分

の部室の方へと出て行つた。が、喫烟室を通り抜けやうとすると、二つの窓に二人宛對になつて坐はつて居るのが見えた。ヴエーラは止まつて、輕侮みの微笑を漏らした。ソオニヤは、彼の始めて作つた詩を書いて遣つて居るニコラアイの傍へピッタリ寄り添つて坐はつて居た。ボリイスとナタアシヤはも一つの窓に坐はつて、ヴエーラが入つて行つた時には、默まつて居た。ソオニヤとナタアシヤは耻かしさうな、嬉しさうな顏で、ヴエーラを見た。

さういふ戀を爲て居る少娘を見るのは面白い可愛いものなのだが、それを見ても、ヴエーラの胸には寸毫も快い心持は起ら無かつた。『これで幾度云ふんだらう』と、ヴエーラは云つて、『私の物を使つちやア不可つてことをさ。各自の部室が有るぢやア無いの』。ヴエーラはニコラアイからインキ壺を取りあげた。

『もう寸時、もう少時』と、ニコラアイは、ペンを浸けながら、云つた。

『貴方がたは何でも飛んだ時ばかし擇つて爲るのねえ』と、ヴエーラは云つた。『先づ第一客室へ荒れ込んで來るんですもの、お陰で私どもは何れだけ耻かしい思ひを爲たか知れやし無い』その言葉は全く道理であつたけれども、いや、全く道理であつた爲めなのかも知れぬが、誰も返答を爲なかつた、四人とも唯だ互に顏を見合はせたばかりであつた。ヴエーラは、インキ壺を手に持つたなりで、佇立んだ。『貴方たち、ボリイスとナタアシヤ、それから後の二人位の年齡で全體何んな秘密が有りますかよ——眞個に馬鹿々々しいつたら無いわ』

『ねえ、それが貴女に取つて何うなんですか、ヴエーラ』と、ナタアシヤが、極く優しい聲で、辯解した。確に、ナタアシヤは、その日は、誰に向いても何時もより機嫌好く優しかつたのだ。

『馬鹿々々しいわ、眞個に』と、ヴエーラは云つて、『私までお陰で耻かしいわ。何んな秘密……』

『誰にだつて秘密は有つてよ。私たちは貴女とベルグのことに口を挾れは爲無いことよ』、ナタアシヤは少し熱して、斯う云つた。

『左樣ねえ、口は挾れ無かつたやうねえ』と、ヴエーラは云つて、『私の行爲には後暗いことは寸毫だつて有りやアし無いんですもの。けども、私貴女のボリイスに對する行爲は母上樣に話すことにするわ』

『ナタアリヤ・イリイニシナの私に對する行爲は大變宜しい』と、ボリイスは云つた。『私に不足は決してありません』

『お止しなさい、ボリイス、貴下はなか〳〵外交家ねえ』（外交家といふ言葉が特別な意味に取られて若い連中の間で流行つて居たのだ）――『あゝ、厭だ、眞個に』と、困じた震へ聲で、ナタアシャは云つて、『何だつて私にばかし突つ掛かるんだらう』

『貴女には何うしたつて解ら無くつてよ』と、ヴエーラに向いて云つて、『貴女は誰のことも思つて居無いんですもの、貴女は情無しよ、全くマダム・ド・ジャンリスよ』（これは、極く厭な意味で、ニコラアイがヴエーラに付けた綽名であつた）『だもんで、貴女は他人を困らせるのが一等樂みなのよ。貴女は、思入れペルグと惡戯するが宜いわ』、ナタアシャは、斯う口速に云つた。

『えゝ、私はね、お客の前で若い男を追つ掛け廻はすことは爲ますまいよ……』

『おい、彼奴は最早目的を達したちやア無いか』と、ニコラアイは口を挾れて、『各自にヒドいことを云つて、衆皆困まらしやアがつた。此方は小兒部室へ行かうや』

四人とも、怖ぢけた鳥の群のやうに、起つて、部室を出た。

『お前たちの方が私にヒドいとを云つて、私は誰にも何にも云はなかつたちやア無いの』と、ヴエーラは云つた。

『マダム・ド・ジャンリス。マダム・ド・ジャンリス』と、戸の彼方から笑ふ聲々が叫んだ。

誰にも左樣なヂリ〳〵させる不快な心持を起こさせた奇麗な娘は微笑んだ、そして、衆皆から云はれたことなどは全然何とも無いらしい態で、姿鏡の所へ行つて、襟飾を直し、髪を撫で付けた。自分の奇麗な顏の寫つて居るのを見て、娘はます〳〵冷然と落着いて了まうやうであつた。

客室では話が未だ續いて居た。

＊　＊　＊　＊

『ねえ、貴女』と、伯爵夫人は云つて、『私の身の上だつて善い事づくめぢやア有りませんよ。今の樣子ぢやア、家の財産も長くは無いといふことが私に解から無いで居ると思つていらつしやるの、悉皆倶樂部だの、彼の人のお人好しのお陰なんですわ。田舍に居た時分だつて、閑氣になんぞ寸時の間も構へちやア居られ無かつたんですわ、――やれ、演劇だは、やれ、獵の會だは、何だは彼だはつてね。あ、さう〳〵、私の話を爲るんぢやアありませんでしたね。さア、貴女が何ういふ風に爲ていらしつたのか、それを話してくださいよ。私何時も貴女には感心して居るの、アンネット、貴女がその年齡でさ、莫斯科だは、彼得堡だは、大臣の所だは、豪い人の所だはと、四方八方駈け廻つて、衆皆を巧く承知させて來る所がねえ。實に貴女感心です

わねえ。まア一體何ういふ風にしてやるものなの？あゝ、私なんぞに到底能きることぢやア無い』

『ねえ、貴女』と、公爵夫人アンナ・ミハーイロヴナは答へて、『眼の無いほど可愛い息子を抱へた、誰一人頼る者の無い寡婦になんぞ爲るもんぢやアありませんわ。でも、何でも慣れろですねえ』と、幾等か得意な態で、『裁判のお陰で全然世間に慣れて了まひました。誰でも豪い人に逢つて貰はうと思ひますとね、手紙を遣るんですよ、公爵夫人これ〳〵は、何某にお目にかゝり度い」と、書いたのをさ、で、私は借り馬車で獨りで二遍でも三遍でも――で不可ければ四遍だつても――此方の志望が就るまでは何遍でも推し掛けるでんすわ。先方が何と思はうが彼と思はうが此方は一向お構ひ無しさ』

『ねえ、で、ボリインカの事件で、貴女誰に逢つたんですか』と、伯爵夫人が尋ねた。『貴女のお息さんは最早近衛の將校なのに、家のニコリインカは見習士官にしきや爲れ無いんですわ。中間に立つて口をきいて呉れる人が誰も有りませんものね。貴女は誰に頼みました？』

『公爵ヴァシイリに。それは〳〵親切に爲て呉れました。直ぐ何處までもやつて遣るつて引受けて、陛下に直接に願つて呉れたんですよ』、公爵夫人アンナ・ミハイーロヴナは斯う熱中の調子で云つた、自分の目的を達する爲めに凌いだ種々の屈辱は最早全然忘れて了まつたのだ。

『彼の方は此頃何うなんです？だん〳〵年を取るばかし？、公爵ヴァシイリは』と、伯爵夫人は尋ねた。『ルミャアンツォフ家の演劇の催から此方一遍もお目に掛りませんよ。私なんぞのことは最早全然お忘れかも知れ無い。その癖、隨分私を付け廻したもんだけども』と、伯爵夫人は往時を思ひ出て、微笑んだ。

『寸毫も變はりませんよ』と、アンナ・ミハーイロヴナは答へて、『それは〳〵愛想の好さと云つたら、宛然溢れ出すやう。彼れ程の出世でも寸毫も高ぶつてなぞ居無いんですよ。「十分なお世話と云つては能きますまいが、公爵夫人」と、私に左樣云つて、「貴女のお頼みなら何でもやりませう」と、云ふんでしたよ。えゝ、眞個に善い人ねえ、親類に極く親切な。だけれども、ナタリイ、私彼の子が可愛くつて堪まら無いでせう。彼子の仕合せになると云ふんなら、私何んな事だつて爲て見せますよ。でも、家の物と云つてはそれは〳〵少許』と、悲しさうに聲を低くして續け、『最早お話にも何にも爲ら無い狀態ですわね。何時かからの彼の飛んでも無い訴訟沙汰に根こそげ注ぎ込ませられて了まつて、それで居て、一向捗と云つては行くのぢや無いしさ。私はねえ、何うです、全くの所、自分の物と云つては銅錢一枚だつて有りませんよ、ですから、

ボリイスの準備にやア私眞個に思案に餘まつて了まひました』、公爵夫人は、手巾を出して涙を流した。『何うしても五百ルウブル入用んだけれども、懷中にと云つては唯つた二十五ルウブル札一枚限りなんぢやァありませんか。私はまア斯樣な狀態ですわね……。今ぢやア、唯つた一つ賴みに爲て居るのはキリイル・ヴラディミイロヴィーチ・ベズウホイのことなんですよ。彼の人でも、自分の神子だといふんで――彼の人がボリイスの神父なんですものね――彼子を助けに出て呉れて、ボリイスの身の立ち行くだけ幾干か出して呉れるんでも無いとすると、私の今までの辛苦は全く水の泡ですわ、彼の子の準備に費ふ物はまる〳〵無いことになるんですよ』

伯爵夫人は涙ぐんで默まつて考へ込だ。

『私はね、屢斯う思ひますの――罪の深いことかも知れ無いけども』と、公爵夫人は云つて――『ですが、私は屢思ふんですよ、此に伯爵キリイル・ヴラディミイロヴィーチ・ベズウホイといふ人が唯つた一人で生きて居る……それは〳〵太した財產で……でも、彼の人は此の世に何の生き甲斐があるのだらう?、なぞとね。彼の人の爲めには此の世は重荷なんだから、自分でも最早末練は無いでせうけども、ボリイスの方は、今が世の中への眞個の出始めなんぢや有りませんか』

『そりやア、ボリイスにと云つて何か遺して置いて呉れますわね』と、伯爵夫人が云つた。

『何うですかしらねえ。世間の大金持なぞといふものは皆身勝手なものでさアね。でも、それはそれとして置て、私ボリイスと今此れから直ぐ行つて、私どもの身の上を有りやうに見ます。他人は何とでも思ふが宜ごさんす、何が構ふもんですか、此方は大切な息子の運命の分れ目なんですもの』。公爵夫人は起ちあがつた。『今二時です、それで、お宅の食事は四時でせう。行つて返る間は有りますわ』

で、事務に慣れた、時間の使ひ方の巧妙な、彼得堡婦人の態で、アンナ・ミハイーロヴナは息子を呼びに遣つて、一緒に廣室へと出て行つた。

『では、行つて來ますよ』と、戸口まで送つて出た伯爵夫人に云つた。『運の向くやうに祈つてください』。息子には聞え無いやうに、斯う耳いた。

『伯爵キリイル・ヴラディミイロヴィーチへ行くんですか、貴女』と、伯爵は食堂から廣室へと出て來て、云つた。『少しでも快いやうであつたら、食事に來るやうにピエールを案內してください、前には來たことがあります。屢く子供と踊つたものです。屹度忘れずに案內してください。』

オルロフでも今日のやうな御馳走は爲たことが無いと、奴は云つて居るよ』

（十三）

『ねえ、ボリイスや』と、伯爵夫人ロストオフから借りた馬車が藁を敷いた街路を駈け、伯爵キリイル・ヴラディミイロヴィーチ・ベズウホフの邸の廣庭へ乘り付けた時に、アンナ・ミハーイロヴナが云つた。『ねえ、ボリイスや』、母親は古ぼけた外套の下から出した手をおつかなびつくり愛撫すやうな手付きで、息子の手の上に掛けて、斯う云つて、『溫和しく、善く氣を付けてくださいよ。伯爵キリイル・ヴラディミイロヴィーチは右に左貴下の神父ですよ、そして、貴下の將來の運は此人次第で開けるんですよ。宜うございますか、ねえ、貴下の上手なお愛想を善くしてね……』

『耻つ掻きにさへ爲らずに濟めばですがねえ』と、息子は冷然と答へた。『ですが、承知しました、貴女がさう仰しやるんなら、やりませう』

馬車は入口に立つて居たけれども、玄關番の瑞西人は、親子の風體をジロ〳〵見、（二人は名を通じさせずに、壁龕に入つた塑像の兩側に列んで居る間の硝子戸を通つて、ヅカ〳〵入つて行つたのだ）、古外套を心得顔に見やつて、誰に逢ふといふのか、公爵嬢たちか伯爵か、何方なのか、尋ねた、そして、伯爵に逢ひ度いのだと聞いて、閣下は今日は餘程お病重いので、誰にもお逢ひになれ無いのだと云つた。

『此の儘歸つたつて宜いではありませんか』と、息子は佛蘭西語で云つた。

『ね、ねえ』と、母親は、身體に觸つて遣りさへすれば、息子の心が落ち着き、勢が付くと思つたかのやうに、再ボリイスの手に觸つて、懇願する聲で云つた。ボリイスは、それ限り何とも云は無かつた、けれども、外套は脱がずに、不審さうに、母親の顏を見て居た。

『お前ね』と、アンナ・ミハーイロヴナは、玄關番に向いて機嫌を取るやうな聲で云つて、『伯爵キリイル・ヴラディミイロヴィーチの太くお病重いことは承知して居るんですよ……參堂つたのわね……私親類なんです……伯爵のお邪魔を爲はしませんよ、ね、お前……。公爵ヴァシイリ・セルゲーヴィーチにお目に掛かれゝば宜いんですよ、此方に來てお出ですわね。取り次いでくださいね』

玄關番は、不承々々、二階で鳴るやうになつて居る呼鈴の綱を引いた。

『公爵ヴァシイリ・セルゲーヴィーチのお客、公爵夫人ヅルウベッコイ』と、上から駈け降り

て來て、階段の角から見下した、フロックを着た、半袴の、上靴の從僕に向いて、呼ばはつた。

母親は、染絹の長上衣の皺を直ほし、等身のヴェニス姿鏡に自分を寫して見て、それから、見すぼらしいクシャ〳〵に爲つた靴で、平氣で階段の絨氈の上を昇つて行つた。

『お前さん、承知なんだねえ』と、腕に觸つて勵ましながら、再度息子を顧みた。息子は、床に眼を向けて、溫和しく後から隨いて行つた。

二人は、公爵ヴァシイリに宛てられた部室と戸口一つで續いて居る大きい部室へと入つた。

親子が部室の中央まで行つて、二人の入るのを見て跳び出して來た年寄りの從僕に道を尋かうとして居たその途端に、戸の一つの靑銅の把手が轉つた、そして、勳章を一つ着けた天鵞絨の室內衣を着た公爵ヴァシイリが奇麗な黑髮の男と一緒に出て來た。此の男が名高い彼得堡の醫者、ロオレエーンであつた。

『確ですな、では』と、公爵が云つた。

『公爵、Errare est humanum、けれども……』と、醫者は、羅甸語（やり損なひは人間の常といふ意味の）を佛蘭西訛りで、舌縺れに發音して、云つた。

『成る程、成る程……』

アンナ・ミハーイロヴナ親子をそれと見て、公爵ヴァシイリは目禮で醫者を歸し、そして、何にも云はずに、不審さうな顏付で、二人を迎へに、と進んで來た。息子は、非常な哀痛の表情が倏然と母親の眼に出たのに氣が付いた、で、彼は微弱に微笑んだ。

『まア眞個に、何といふ悲しい場合に又お眼に掛かることでせうね、公爵……。ご病人は何うなんです、えゝ』『母親は、自分の上に凝乎と向けられて居る冷々とした心持の惡い睨には氣が付かぬやうな態付で、斯う云つた。公爵ヴァシイリは母親を見詰、それから今度は、當惑と云つても宜い位の不審さうな顏付で、ボリイスを見詰めた。ボリイスは丁寧に點頭を爲た。公爵ヴァシイリはその目禮には答へずに、アンナ・ミハーイロヴナに振り向いた、そして、その問に對して、頭と唇の動かし方だけで、病人は到底駄目だらうといふ心持を知らせた。

『へえ、まア』と、アンナ・ミハーイロヴナは聲を高くした、『まア、眞個に大變だ。考へるだけでも眞個に情無い……これが、伜です』と、ボリイスを指して、云ひ足した。『自身お目にかゝつてお禮を申し度いと云ふものですから』

ボリイスはもう一遍丁寧な點頭を爲た。

『ねえ、公爵、子を持つた母親の心は、貴下が私どもの爲めに爲てくだすつたことを、決し

て忘れは致しませんよ』

『少でも何かお爲になることが能きたのは喜ばしいです、親愛なアンナ・ミハーイロヴナ』と、公爵ヴァシイリは、自分の衣服のレエスの緣飾りを引張り直しながら、云つた、その聲と樣子は、此所莫斯科では、自分に恩を受けて居るアンナ・ミハーイロヴナの前では、彼得堡で、アンナ・バアヴロヴナの夜會でよりも尙一層勿體を付けたものであつた。

『善く任務を盡くすやうになさい、職を辱かしめんやうにな』と、嚴づかしい顏でボリイスに振り向いて、云ひ足した。『喜ばしいのは……貴下は今賜暇で此方においでかね』、表情の無い眼で、斯う尋いた。

『命令が參り次第、今度の聯隊に加はります筈なんであります、閣下』と、答へたボリイスは、公爵の素氣無い態に腹立つた氣色は寸毫も見せず、と、云つて、談話を始め度いといふ氣色も無かつたが、言葉が如何にも謹んで落着て居たので、公爵がつく〳〵とその顏を見て居た。

『母堂と一緒にお暮しかね』

『私は伯爵夫人ロストオフの所に居ります』、ボリイスは再度『閣下』を添へた。

『ナタリイ・シインシンの嫁づいた彼のイリヤ・ロストオフですよ』と、アンナ・ミハーイロヴナが云つた。

『左樣、左樣』と、公爵ヴァシイリは單調な聲で云つた。『何うしてまア、ナタリイ・シインシンが彼樣な母熊に抵められ無い熊（開けぬ我殺者といふ意味）に嫁づく氣に爲つたものかなア、私には一向了見が解からん。實に拔けた可笑しい男だ。それに、又賭博を打つ、といふ話さ』

『ですけれども、眞個にチャンとした人なんですよ、公爵』と、アンナ・ミハイーロヴナは、自分も伯爵ロストオフは斯う貶批されても爲方が無い譯なのを認めはするが、それでも、彼の慇然さうな老人を左樣酷く云はずに置いて呉れと賴むとでも云ひさうに、悲し氣な笑顏で、口を挾れた。『お醫者たちは何う云ひますの』と、少時間を置いて、公爵夫人は尋いた、そして、再度深い心痛の表情が涙に痩れた顏に現て來た。

『何うも覺束無いですな』と、公爵が云つた。

『で、私は是非伯父さんに逢つて、私やボリイスがいろ〳〵お世話に爲つたお禮を申し度いんですがねえ。此子は伯爵の神子なんです』と、公爵夫人は、公爵ヴァシイリが左樣と聞いたら嘸ぞ嬉しがるだらうと云はぬばかりの調子で、云ひ足した。

公爵ヴァシイリは考へ込んで顔を顰めた。アンナ・ミハーイロヴナは、公爵は自分が他日伯爵ベズウホイの遺産分配の場合に公爵自身に對し競爭者と爲るやうなことがあつてはと困つて居るのだと見て取つた。で、直ぐに安心させにと掛かつた。『私が心から愛し、尊敬して居る大切な伯父さんのことですからねえ』と、如何にも當然だらうと云は無いばかりの平氣な調子でその『伯父さん』といふ言葉を發音して、『伯父さんのご氣象は私善く存じて居ります、――胸量のお廣い、廉直な、ですけれどもねえ、お傍にはお孃樣がたばかりなんでせう……未だホンの若いかたゝちではありませんか……』。公爵夫人は頭を垂げて、呟語で斯う云ひ足した、『伯父さんは末期の勤行は最早お濟ましなんですか、公爵。又この末期程凡そ大切なものは無いんでさアね。最早餘つ程お危篤んでせう、覺悟させてあげ無ければ何うしてもいけませんよ、眞個に夫れ程お宜しく無いんなら。女はねえ、公爵』、優しい笑顔になつて、『斯樣いふことは巧く爲遂せるものなんですよ。私は是非伯父さんにお目に掛から無ければなりませんわ。もう眞個に辛いのは辛いんだけれども、爲方がありませんわ、散々辛い目に逢つて來た私なんですもの』

公爵は勿論解かつた、そして又、既にアンナ・パアヴロヴナの家での近い例もあるので、アンナ・ミハーイロヴナを逐拂ふのは一通りなことで無いのも解かつた。

『此の會見が伯爵の苦痛を增すことに爲りはし無いでせうか、ねえ、アンナ・ミハーイロヴナ』と、公爵は云つた。『晩まで待つては何うでせう、醫者どもは直ぐだとは云つて居らんのだから』

『待つなんて飛んでも無いことですよ、公爵、それは時によりけりでさアね。もし、彼の方の靈魂を救はうといふ大切の問題なんぢやアありませんか。あゝ、何といふ辛さなんだらうね、敎徒の義務は』

奧の部室の戸が開いた、そして、伯爵の姪の一人、冷然として無愛想な顏で、脚の短かいのに對し不釣合に胴の長いのが入つて來た。

公爵ヴァシイリはそれに振り向いた。『えゝ、何んな模樣だね？』

『矢張同なじよ。此所で斯う騷がしく爲て居ちやア、何うしたつて……』、姪は斯う云つて、アンナ・ミハーイロヴナを見ず知ずの人かなんぞのやうにジロ〳〵見た。

『おや、まア、私全然お見それ申しましたよ』と、アンナ・ミハーイロヴナは、さも嬉れしさうな笑顏で、云つて、姪の傍へチョコ〳〵と駈け寄つた。『私今來た所なんですよ、伯父さんのご看病のお手傳ひにね。貴女隨分情け無かつたでせう、お察し爲ますわ』と、如何にも同情するといふ態に上眼使ひをして、云ひ足した。

姪は、何とも返答せず、微笑みさへも爲ずに、ブイと引込んで了まつた。アンナ・ミハーイロヴナは手套を脱り、そして、塹壕に據るとでも云ひさうに、肱掛椅子に陣取つて、公爵ヴァシイリを招いて側に座はらせた。

『ボリイス』と、公爵夫人は息子に云つて、そして、笑顔を向け、『私はね、伯爵、伯父さんの所へ行くんですよ、それでね、お前さんは、その間に、ねえ、ピエールに逢つておいで、そして、忘れずにロストオフ家の招待のことを云ふんですよ。食事の案内なんですがねえ。行きませんでせうかね』と、公爵を顧みた。

『いや、何うして、何うして』と、公爵は如何にもウンザリした樣子で、云つて、『彼の若者を連れ出してくださらば、實に有り難いですよ……彼奴は此所にヘバリ付いて居て困る。伯爵は一度も彼は傍へ呼んだことが無いのですせ』

公爵は肩を搖つた。從僕が客の若者を階下へ下ろし、それから、又外の階段を昇らせて、ピオトル・キリイロヴィーチの部室へ案内した。

（十四）

ピエールは、到頭彼得堡で職を極め得無かつた、そして、實際不品行の爲めに莫斯科へ追放されたのであつた。伯爵ロストオフの所で出たピエールの話は眞實であつた。ピエールも熊に巡査を縛る手傳ひを爲たのだ。彼は、ホンの二三日前に歸り着いて、例の通り父親の家に落ち着いた。自分の噂は夙くに莫斯科でも知れ渡つたらうから、父親の身近くに居る、さ無きだに前々から自分の味方では無かつた女連は、得たり賢しで、伯爵を突つ突くに違ひ無いとは思つたものゝ、彼は歸つた直ぐその日に父親の部室へ行つた、公爵嬢連が何時も居る客室へ入つて行つて、女連に挨拶した、二人刺繍臺に寄つて居て、一人聲高に物を讀んで居た、女連は三人であつたのだ。一番年上のは、キチンとした、胴の長い、無愛嬌な顏の處女であつたが――アンナ・ミハーイロヴナの前へ出て來たのが此女であつたが――それが物を讀んで居た。年下の二人は、兩方とも薄桃色の可愛い顏で、違ふ所と云つたら、唯だ一人の方が顏に小さい黑子があるので、その爲めに、愛嬌が餘程深いといふことばかりであつた。此の二人が、刺繍をやつて居たのだ。ピエールは、死より甦へつた人か、災殃を以て擊たれた人でゝもあるやうな風に迎へられた、年上の公爵嬢が讀むのを止めて、默まつて、慄然とした眼付で、彼を見詰めた、次のは前のと全く同なじの表情に爲つた、一番年下の、黑子のあるのは――一體陽氣な善く笑ふ性質

であつたが――これは、刺繍の框の上へ突つ伏さ無いばかりに爲て、笑顔を隱くした、可笑しいことが直ぐ始まると見て取つて、笑はずには居られ無かつたのであらう。縫ひ糸を下から引き出し、模樣を好く見やうとでもするやうに、頭を垂げて、艱然のことで、噴飲すのを堪へて居た。

『お早う』と、ピエールが云つた。『僕を忘れたのかい』

『能く知つててよ、全く知り過てるわ』

『伯爵は何んな案配かね。逢ひに行つて宜いかい』と、ピエールは、例の通り、モヂ〳〵して云つた、でも、ドキマギは爲て居無かつた。

『伯爵は肉體もお苦しければ、心も惱んでおいでなんですよ。貴下は、能きるだけの苦しみを伯爵にさせやうとばかり骨折つて居らつしやるやうなのねえ』

『伯爵に逢ひに行つて宜いかい』と、ピエールは繰り返した。

『ふん……伯爵が死んでも宜い、直ぐ死んでも宜いと思ふんなら、行つてお逢ひなさいよ。オルガ、伯父さんのお粥が出來てるか行つて見といで――最早やがて入用時分なんだからね』と、娘は云ひ足した、これは、自分たちは忙がしいのだ、そして、ピエールが伯爵に心配させるやうさせるやうと仕向けてばかり居るのには引き代へ、自分たちの方は寸時の間も油斷無く伯爵に心持好くさせやうさせやうと氣に掛けて居るのだといふことを、見せ付けやう爲めであつたのだ。

オルガは出て行つた。ピエールは寸時ジッと立つて居て、姉妹を見て、頭を下げて、斯う云つた、『では、部室へ行つて居ます。宜い時分が來たら知らしてください』。彼は出て行つた、そして、黑子のある妹娘のさう高く無くハア〳〵笑ひ出した聲を後に聞いた。

その翌日、公爵ヴァシイリが來て、伯爵家に落着いた。彼はピエールを呼びによこして、ピエールに斯う云つた、『おい、君、此地でも彼得堡のやうな身持ちだと、いよ〳〵飛んでも無いことになりますぞ、私の云つて置くことはこれだけなんだ。伯爵は太く、全く太く病重いんだ、君は決して逢つては不可んよ』

それから以降、ピエールは全たく打捨つて置かれた、彼は、二階の自分の部室で終日一人暮らして居た。

ポリイスが入つて來た時には、部室の裡を彼方此方と歩いて居た、時々隅々で止まり、槍で誰か見え無い敵を突くとでも云ひさうに、壁に向いて恐しい權幕の身振りを爲、やがて、眼鏡

越しに如何にも嚴づかしい顏で前方を見詰め、やがて又、彼方此方と歩き出して、何かブツブツ呟き、肩を搖つて、手眞似をするのであつた。

『英吉利の國威は最早地に墮ちた』と、額で睨めて、誰かに指し爲た。『モシユウ・ビットを、國民及び公法の叛逆者として、此に宣告する理由は……』、自分自身を最早ナポレオンにして了まひ、危險なドオヴァー海峽を越へ遂せ、一擧に倫敦を陷ゐれて了つた氣になつて、斯うビットの宣告を爲かけて居る所へ、品の好い奇麗な若い將校が入つて來た。ピエールはピタリと止まつた。ピエールはボリイスの十四歳の時逢つた限りなので、最早顏を寸毫も覺へて居無かつた。が、それでも、彼は、持前の忙だしい懇ろな風でボリイスの手を摯り、そして、慕かし氣な笑顏を見せた。

『覺へて居ますか』と、ボリイスは快よく微笑んで、落着て云つた。『母に伴れられて伯爵にお目に掛りに來ました、ですが、少しお宜しく無いやうですね』

『左樣、何うも宜く無いやうですよ。種々な奴に取り卷かれて弱つて居るんです』、ピエールは、斯う答へて、この若者は誰であつたか憶起さうと骨折つた。

ボリイスは、ピエールが自分が誰だか知らずに居るのだと見て取つた、けれども、自分の方から名乘るのもヘンだと思つたので、落着拂つてジッと先方の顏を見て居た

『伯爵ロストオフが食事に貴下をご案内します』と、ピエールに取ては手持無沙汰な少し長い沈默の後で、ボリイスは云つた。

『あゝ、伯爵ロストオフ』と、ピエールは嬉しさうに、云ひ始めた。『では、貴下はその息子さんのイリヤなんですか。イヤ何うも、今まで全然忘れて居ましたよ。覺て居ますか、二人でマダム・ジヤッコオと一緒に雀山でよく滑つて遊だものですね……隨分長いことだが』

『違ひます』と、ボリイスは大膽な、寧ろ皮肉な笑顏で云つた。『私は公爵夫人アンナ・ミハイロヴナ・ヅルウベッコイの息子のボリイスです。イリヤといふのはロストオフ家の親父の方で、息子はニコラアイなんです。それに、私はマダム・ジヤッコオなどといふ人を一向知りません』

ピエールは、蠅か蜂でも周圍に群れて居るとでも云ひさうに、兩手と頭を振つた。

『いやア、何うしたことだ。全然ゴッチャにして了まつた。莫斯科には何だつて斯うシコタマ親類ばかし居るんだらう。貴下はボリイス……左樣だ。あゝ。最早全然解かりました。ねえ、君、ブウロオニュから出る英國征伐を何う思ひますかね。ナポレオンが海峽を越れば、英吉利は

メチャ〳〵でせうなア、僕はこの征伐は必然あると信じますね。唯だヴィルヌウヴが下手をやら無きやア宜いんだがなア』

ボリイスは、ブウロオニュから出る征討軍の話などは一向知ら無かつた、それから、ヴィルヌウヴといふ名は此所で初めて聞いたのであつた。

『莫斯科では、誰も彼も、政治のことなんか其方除けで、唯だ、夜會とか他人の噂話ばかりに憂身を瘦して居るんです』と、ボリイスは落着き拂つた皮肉な調子で云つた。『僕は其樣な下ら無いことは寸毫も知ら無いし、又寸毫も考へも爲無い。莫斯科位他人の噂を大騷やる所はありませんな』、斯う續けた。『此頃は何處も彼所も、貴下のことゝ、伯爵のことで持ち切つて居ます』

ピエールは、客が自分で後悔するやうなことを何か知ら云ひは爲まいかと、客自身の身に代つて心配するとでも云ひさうに、持ち前の人の好い笑顏を見せた。が、ボリイスは、ピエールの顏を眞正面に見詰めながら、瞭然とした、遠慮の無い言葉で話した。

『莫斯科の人間は他人の噂話を爲るより外何にも爲無いんです』、斯う續けた。『誰も彼も、伯爵が誰に遺產を繼がせるかそればかり一生懸命に知り度がつて居るんです、怪しからんです な、伯爵の方がわれ〳〵總體よりもズッと後まで生きて居られるか知れもし無いに、いや、私は左樣あることを眞底から祝るんですがね』

『左樣、實に怪しからんですな』と、ピエールは口を挾れて、『實に怪しからん』。ピエールは尙且、この將校が折惡く彼のギョットするやうなことを云ひはしまいかと心配した。

『それで、貴下には必然』と、ボリイスは、ホンの寸許顏を赤くしたばかりで、聲も態度も寸毫も變へずに、『貴下には必然、誰も彼も、伯爵から何かしら貰うことばかり考へて居るやうに見えませう』

『あゝ、到頭それだ』と、ピエールは思つた。

『それで、これだけは是非、貴下の誤解を避ける爲めに、申して置き度いんですが、私母子が前に云つたやうな仲間だとお思ひなさると、飛んだお考慮違なんですぞ。私どもは太く貧乏して居るには居ます、けれども、私は——兎に角私自身だけは——ご親父がお金持でお有りなさるだけそれだけ、私はご親父の親類だと私自身を考へません、又私にしても、母にしても、ご親父に何一つ頂き度いとお願ひ申すことなんぞは斷じて致しません』

ピエールは、ボリイスが何んで左樣いふ事を云ひだしたのか、暫時の間、解し兼ねた、が、

やつと解かるといふと、長椅子から跳びあがつて、持ち前の速さと武骨とでボリイスの手を攫んだ、そして、ボリイスよりも夐然赤くなつて、慚愧と迷惑の混じりあつた感じで、話し初めた。

『うん、こりやア變だ。君は思ふんですか、僕が……何うして君は其樣な……僕は善く知つて居る……』

が、ボリイスは又ピエールの言葉を途中で抑さへた。

『私は貴下に全然有りやうにお話して了まつたんで、大きに安心です。貴下にはこれがお厭かも知れ無い、左樣なら何うぞ勘辨してください』、ボリイスは、ピエールに安心させられるのでは無くて、反つてピエールを安心させやうと骨折りながら、斯う云つた、『でも、貴下の立腹なさるやうなことは私は云は無かつたらうと思ふんです。私は率直に何でも云つて了まうのを主義にして居るんです……所で、先方へ何と返答しませうね。ロストオフ家の晩餐にお出なさいますか』、で、ボリイスは、厭な義務を果して了まつてさも安心したといふ態で、その苦しい位地から脱出して、自分より以外の何人かをさういふ位地に置いて了まつて、全然元の快活に返つた。

『いゝや、僕の話を聞いて呉れ給へ』と、落着を恢復して、ピエールが云つた、『貴下は實に豪い人だ。貴下の今云つたことは實に立派だ、實に立派だ。貴下に私が何んな人間だか解かつて居無いのは無理は無い、お互に逢つて居たのは隨分往時のことなんだもの……お互に小兒だつた……貴下が何う思つても……僕は解つた、全然解りました。僕にやア貴下のやうにやアやれ無かつたらう、いや、僕にやア左樣いふ勇氣が無かつたでせう、だが、實に立派だ。僕は貴下とお近付になつたのが、非常に嬉しい。可笑しな風な人間だと』と、彼は云つて、止まつて、微笑んで、『貴下は僕を思つたものだなア』。ピエールは笑つた。『けれども、其樣なことは何うでも宜い。もつとお心安くして、お互に十分氣心を知り合ふやうになりませう、ねえ』。彼はボリイスの手を握り締めた。『僕は一度も伯爵に逢は無いんですからねえ。僕を呼びによこさ無いんです……人間として、僕は伯爵は實に氣の毒だと思つて居ます……。だが、僕には何うにも爲やうが無い』

『所で、貴下は、ナポレオンが軍隊を英國へ上陸させ得るとお思ひですか』と、ボリイスは微笑みながら、尋ねた。

ピエールは、ボリイスが話題を更へやうと力めて居るのを見た、で、彼は、ブウロオニュ軍の利益な諸點と、困難な諸點を説明しだした。

從僕が公爵夫人からだと云つてボリイスを呼びにと入つて來た。公爵夫人は歸るといふのだ。ピエールは、ボリイスともつと心安くならうと思つて、晩餐に行くと約束した、そして、別れ際に、ボリイスの手を親しげに握り締めて、その顏を眼鏡越しに慕かしさうに覗き込んだ。

ボリイスが行つて了まうと、ピエールは、暫時部室を彼方此方と歩いた、最早見えざる敵を突くのでは無く、その如何にも愛嬌のある、怜悧な、氣象の堅固した若者を憶ひ出して微笑んで居た。

若い人々、殊にそれが孤獨の位置にある人たちだと、屢ある通りに、ピエールはこの若者が何といふこと無しに太く慕かしかつた、で、彼は、それと信友にならうと斷乎と決心した。

公爵ヴァシイリは廣室まで公爵夫人を送つて行つた。公爵夫人は眼へ手巾を當て居て、顏には涙が流れて居た。

『悲しい辛らいことですね、眞個に辛らうございますよ』と、公爵夫人は云つた、『ですが、何んなに苦くつても、私は私の義務を盡くします。今晩一晩ご看病に參りますよ。彼の方をこの儘に打捨つては置けませんわ。眞個に一分を爭ふ場合なんですからねえ。何だつてお姪ごたちはそれを延ばしておいでなんでせうねえ。多分神樣が彼の方に支度させる道を開いてくださいますでせう。左樣なら、公爵、お氣をお付けなすつて……』

『左樣なら。奧樣』と、公爵は答へて、引返した。

『あゝ、彼の人はそれは〳〵大變な容體なんです』と、母親は、二人又馬車の中に坐はつた時に、息子に云つた。『誰の顏も大抵最早識別が付か無くなつて居るの』

『ピエールに對する伯爵の態度が私には寸毫も解かりませんね、母上』

『遺言狀でそれも全然解かるでせうよ、お前、私共の運命も全くそれ次第で極まるんですよ……』

『ですが、何かわれ〳〵にも遺して行つて呉れるたア、何うして思へるんですか』

『あゝ、お前。彼の人は大變な身代で、私どもの方は此樣なに貧乏なんだもの』

『さア、それだけでは十分な理由とは何うも云へますまいよ、母上』

『あゝッ、それは〳〵病重んだもの、それは〳〵病重んだもの』と、母親は叫んだ。

（十五）

アンナ・ミハーイロヴナが息子を伴れて伯爵キリイル・ヴラデイミイロヴィーチ・ベズウホイの

所へと馬車を走らせた後で、伯爵夫人ロストオフは、手巾で眼を抑へて、長いこと獨り坐はつて居た。到頭夫人は鈴を鳴らした。

『何う爲たんだね』と、夫人は自分を二三分待たした女中に、腹立たしげに云つた。『家で使はれるのが、お前さん、厭なのかえ、えゝ？。何んなら、他で口を探がして上げませうかね』

伯爵夫人は友達の心痛と哀れな耻辱とに心を亂されて居たので、機嫌が惡かつた、それは、女中に、他人行儀の丁寧なヴィー（貴女）とか、ミイーリヤ（お前さん）とかいふやうな言葉で話し掛けたのでも知れるのだ。

『まことに相濟ません』と、女中が云つた。

『伯爵にいらしつて下ださいと申し上げてお呉れ』

伯爵は、例の通り、何だかオド〳〵したやうな顔付で、妻の所へ、ヨタ〳〵入つて來た。

『ねえ、可愛い伯爵夫人や。素的な山鳥とマデエラのシチウが喫れるんだせ。私は一寸試めしに味を見た、タラスを千留で雇つて實に宜いことを爲たよ。奴にやアその價値が十分有りますわい』

彼は、妻の側に坐はつて、肱を形好く膝に置き、白髮の髮を手で梳き立たせた。『お前の命令は何だね、可愛い伯爵夫人や』

『それは斯うなんです、ねえ、郎君、――あら、そのベッタリ附着てるものは何んですね』と、夫人は、夫の直衣を指しながら、云つた。『シチウですね、多分』と、微笑みながら、云ひ足した。『それは斯うなんです、郎君、ねえ、私お金が欲しいんですわ』。夫人の顏が陰鬱になつた。

『あゝ、可愛い伯爵夫人や……』で、伯爵は、紙入れを引張り出しながら、モヂ〳〵した。

『恐ろしく多額欲いんですよ、伯爵。五百留欲いんですの』伯爵夫人は、白麻の手巾を出して、夫の直衣を拭いた。

『即刻、即刻。おゝい、誰か居るか』と、伯爵は、自分に呼れた者どもは直ぐ墓地に飛んで來ると確信して居る人のみが叫ぶやうな聲で、叫んだ。『ミイテンカを呼んで來いよ』

貴族の出生で、伯爵の家で育てあげられ、今では伯爵の金錢の出納を受け合つて居たミイテンカが、部室へ靜に歩み込んだ。

『おい、お前』、謹んで寄つて來た若者に、伯爵は斯う云つた。『持つて來て呉れ』、寸時考へて、『左樣、七百留、左樣だ。で、宜いか、この前のやうな彼樣な裂けた汚れた札は不可ぞ、好い奇

麗な奴を、伯爵夫人の所へ』

『左樣なの、ミイテンカ、奇麗なのを、ね』、と伯爵夫人は、銷沈つた嘆息を爲て、云つた。

『閣下、何時までに持つて參れば宜しいのですか』と、ミイテンカは云つた。『貴下も御存じの筈ですが……いや、宜しうございます』と、ミイテンカは、伯爵が、何時も直に怒り出す前觸れの、忙はしい深い呼吸を爲だしたのを見て、斯う云ひ足した。『いや、忘れて居りました……唯今持つて來いと仰つしやるので？』

『左樣だ、左樣だ、うん、それなんだ、持つて來い。伯爵夫人に上げて呉れ。彼のミイテンカは實にわれ〳〵の財寶だなァ』と、若者が行つて了まうと、微笑みながら、伯爵が云ひ足した。『彼奴は、出來無いといふことは何ういふことなのか知らんのだ。私はその出來無いなどゝいふことは大嫌なんだ。何んなことでも出來るものだ』

『あゝ、お金なんて、伯爵、お金なんて、眞個にいろ〳〵な悲みを世の中に拵らへるものですわねえ』と、伯爵夫人が云つた。『その癖、このお金は私にやァ何うしても無きやァなら無んですもの』

『お前は恐ろしい費ひ人だよ、可愛い伯爵夫人や、誰も皆知つて居るんだ』と、伯爵は、云つて、そして、妻の手に接吻して、再自分の部室へと行つて了まつた。

アンナ・ミハーイロヴナがベズウホフ家から歸つて來た時には、その金錢は、最早、悉皆新らしい札で、伯爵夫人の小さい卓子の上に、手巾で隱されて、載つて居た。アンナ・ミハーイロヴナは伯爵夫人が何と無くソワ〳〵して居るのに氣が付いた。

『え、、貴女？』と、伯爵夫人が尋ねた。

『あ、、それは〳〵ヒドい容體よ。平常の相恰は全然無くなつて居ます、病重い事つたら、病重いことつたら、眞個に大變なの、私唯つた二分程居たばかしです、二言と云ひませんよ』

『アンネット、何うぞ、辭退なすつちやァ厭ですよ』と、伯爵夫人は、手巾の下から金錢を取り出して、年取つた、痛せた、威のある顏にはヘンに適應無い赤らめた顏で、不意に云つた。

アンナ・ミハーイロヴナは、直ぐに、伯爵夫人の云つた意味を攫んだ、そして、時を計つて伯爵夫人を抱擁しやうと、最早身體を前へ乘しかけて居た。

『これは、ポリイスの爲めに、私から、支度料として……』

アンナ・ミハーイロヴナは、最早先方を抱擁して、そして、泣いて居た。伯爵夫人も泣いた。二人は泣いた——二人が信友であつたが故に、優しい心であつたが故に、そして、若い時分に

信友であつた自分二人が、今は金錢といふやうな其樣な卑しい物のことを考へ無ければならぬ無くなつたが爲めに、それから、自分等の若い日が全く過ぎて了まつたが爲めに……。が、雙方の涙は各自に取つて好い心持であつたのだ。」

（十六）

伯爵夫人ロオストフは、自分の娘たちを伴れて、客の大部分と一緒に、客室に坐つて居た。伯爵は、男客の連中を、自分の部室へ伴れて行つて、珍らしい土耳古烟管の集めたのを見せた。それから一寸〳〵出て行つては、『彼の人は未だか』と、尋ねた。人々は、交際社會で『恐ろしい龍』といふ綽名のある、マリヤ・ヅミツリーエヴナ・アフロオシモフを待つて居たのだ、この女の名高かつたのは、金があるとか位が高いとか云ふのでは無くつて、その正直なこと、、率直な、因襲に泥ま無い行狀との爲めであつた。マリヤ・ヅミツリーエヴナは皇室でも知つて居られる女であつた、莫斯科でも、彼得堡でも、名高かつた、で、兩方の市の人々は、この女に驚嘆して居ながらも、その不遠慮な行狀を、誰も竊然笑つて居た、けれども、この女を尊敬したり恐れたりするのは、誰も異りは無かつた。

烟の朦々とした伯爵の部室では、丁度其頃、勅諭で公けにされた開戰と、軍隊の徵募の話が出て居た。勅諭は誰も讀んだ者は無かつた。けれども、誰もそれの出たことは知つて居た。伯爵は大榻の上で、烟草を吹かしながら話し合つて居る二人の男の中に挾まつて坐はつて居た。伯爵自身は、烟草を吹かさず話も爲無いで、唯だ、頭を彼方此方と振り向けて、烟草を吹かして居る二人をさも滿足さうに見詰め、自分がその兩側の人の間に起こさせた議論に聞入つて居た。

そのうちの一人は、瘠せた、皺の多い、短氣さうな、奇麗に剃り切けた顏の平人で、流行を追ふ若者のやうな隙か無い服裝ではあつたが、最早中年を越した男であつた。全然打寛ろいだ體で、大榻の上へ片脚上げ、口の角へ琥珀の吸口を啗へて、顏を顰めながら、時々急に烟を吹き出して居た。これは、老獨身者のシインシンといふ、伯爵夫人の從弟で、如何にも皮肉な警句を吐くので、莫斯科の客室では名高い男であつた。彼は、今、その相手の、拔け目無く、身體を濯ひ、毛掃を掛け、扣鈕を掛けた近衞の若々しい、顏の薔薇色の將校に對して、如何にも倨傲に拳動つて居た。將校の方は、口の中央に烟管を啗へ、小しづゝ烟を吸ひ込んで、それを赤い形の好い唇から輪にして吹き出して居た。これが、ボリイスを伴れて行つて呉れる筈の、